

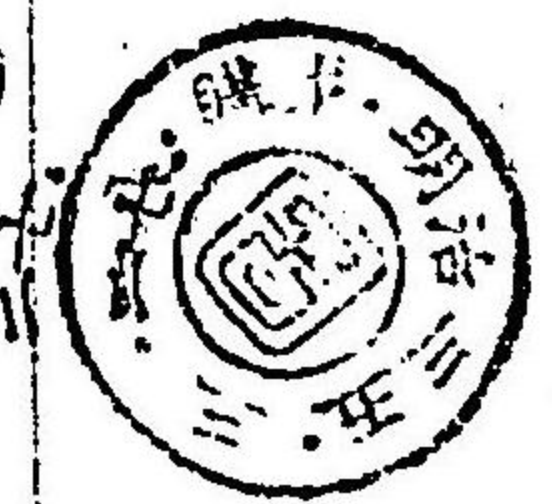
-90-60

高田早苗校閱  
山本利喜雄編著



叢書 康路西亞史

東京專門學校出版部蔵版



### 歴史叢書發行の趣意

本校出版部は史學專攻の諸名家に囑し『歴史叢書』の名の下に於て左の諸歴史を出版せんとす其の趣旨とするところは世界的觀念の發達て國民教育の大主眼を貫徹するに就て裨益するところをらしめ且つ諸専門學科就中政治、經濟、法律、文學の諸科を研究するの基礎として必要な歴史的智識の普及を計らんとするにあり二十世紀の日本國民は特に世界を知らざるべからず史的智識に基づかざる空論妄斷は遂に有害無益のものたらざんばわらず世間有識の士幸ひに余輩と感同ふし『歴史叢書』出版の舉を贊助せられれば實に余輩の幸福のみにあらざるなり

英國憲法史	近世殖民史	清國史	印度史	中央亞細亞史	米國史	土耳其波留汗史	北歐史	荷蘭白耳義史	西班牙葡萄牙史	伊太利亞史	露西亞史	獨逸史	佛國史	英國史	羅馬史	希臘史
オグエン	文士	文士	文士	文士	文士	文士	文士	文士	文士	文士	文士	文士	文士	文士	文士	文士
松平康國	河合弘民	矢野仁一	高野吉	高野吉	長瀬輔	小崎道	長田一	高桑吉	坂本健一	村川堅一	坂本健一	山本利雄	高田早苗	隈本繁吉	長田忠一	松平康國
編	編	編	編	編	編	編	編	編	編	編	編	編	編	編	編	編

例言

一 今回東京専門學校に於て歴史叢書發行の舉あり、本書は其第一篇として出でたるものなり。

一 露西亞程今の世界に於て人の論評に上る者はあらず、然れども翻て露西亞の史籍を探討すれば寥々として晨星も畜ならず。殊に體裁の完備して記録の詳密なる、稱して完璧と謂ふべき者を求むれば絶無と評するも誣言にあらず。されば材料の蒐集に關して特に困難を感じたる編者は、重にもラング氏(Lang)の英譯に係る佛人アルフレッド・ランボー氏(Alfred Rambau)の『露西亞史』(A popular history of Russia)に據り、傍らアボット氏(Abbott)の『露西亞帝國史』(The History of the Empire of Russia)ケリー氏(Kelly)の『露西亞史』

二  
(The History of Russia) ウォレンス氏 (Wallace) の『露西亞』(Russia) カ  
ルゾン氏 (Curzon) の『中央亞細亞に於ける露西亞』(Russia in  
Central Asia) 及びウラヂミル氏 (Vladimir) の『太平洋に於ける露  
西亞並に西伯利鐵道』(Russia in Pacific and the Siberian Railway) 等  
を參酌し、以て本書を成したり。蓋しアルフレッド、ラン  
ボー氏の書は從來世上に現はれたる露西亞史の中に就  
ては最好の著書と目すべくして、縱令時に白玉の微瑕な  
きにしもあらずとするも、優に纂譯者に對し良好の資料  
を供するものなればなり。尙ほ此書の定評に關しては  
左に抄譯せる英國新聞其他の言に徴して明かなるべし。  
亞歷山三世以後の事歴は以上に記載せし諸書に總べて皆な闕如たりしを以  
て或は泰西の雜誌新聞等を探みし或は先盟諸氏に問ひ以て之を敘述したり  
『ザロンドン・アトナ』(The London Athenaeum) 曰く、本書は能く露西亞の歴史に關する

重要な事項を網羅したり、其西歐に於て現はれたる露西亞史中に在りて最も完全なる  
ものたるや疑なし。著者が歴史を筆するに堪能なる一事は嘗て『英國史』を著して令名  
を得したるグリーン (Green) 氏と伯仲の間に在るが如し。要するに露國の歴史を研究せ  
んと欲する者は必ず本書を讀まざるべからず。

『ザ・サタデー・レビュー』(The Saturday Review) 曰く、太古渾沌たる時代より筆を起し、直ち  
に叙して露國最近の狀態にまで及ぼしたる本書の價値は如何なる賛辭を呈するも決し  
て溢美にあらざるべし。

又た英國の學者間に豫れて露西亞通の聞へあるラリントン氏 (Lalston) 曰く、ランボー氏  
は露西亞帝國に關する總べての事項に最も精通せる人なり、斯人にして斯書を著す吾  
人は之を歡迎せざらんぞ欲するも得ず。

尙ほ露國有名の小説家ツルゲチーフ氏 (Turgeneff) も亦曰く、本書は往々指摘すべき小缺  
點なきにしもあらざるも、西歐に在りて露西亞史を研究せんと欲する者の爲めには最良  
の伴侶なるべし。

一 本書稿を起せしは昨年十二月にあり、而して其業を卒へ  
しは本年七月なり、即ち寒風凜冽疎霰密雪書窓を撲つ

時を以て始まり、豔陽三月鳥謠ひ花笑ふの節を過ぎ、緑陰幽草花時に勝るの候を経、更に炎陽赫灼、白晝甌中に坐するが如き日に於て筆を擱く。其間甚だ短時日なりしと謂はざるも、亦た甚だ長日月なりしとも思はず。況んや編者の身は平生一定の業務あるをや、忙裡閑を偷んで匆勿執筆し去る、慎重の注意を以て事に従ひしも、尙ほ字句の粗笨、意義の澁晦を感ぜしむるものなきを保せず、是れ編者が大に慙羞に堪へざる所なり。然れども上下千有餘年、苟も露西亞歴史の中に記述すべき重要な案件は勉めて之を網羅し、畧ぼ遺憾なきを期せり。若し夫れ本書に依り我邦に於て従來殊に不備不完なる憾ありし露西亞史の梗概を知るを得ば、纂譯者の本懐實に之に過ぎ

ず。

一本書始めて稿を起せし時、其頁數は畧ぼ豫定あり、是を以て記事の如きも間々忍んで割愛したるものなきにしもあらず。第三十五章に於て露西亞の兵備、教育、文學、宗教、社會、貿易及び工藝美術等を叙する條下は殊に然りとす、讀者は之を諒せざるべからず。

一東洋の風雲日を逐ふて急を告げ來り、露西亞の東亞に對する關係例へば露清關係の如きは志士の最も研究せざるべからざるものなり。然れども是等の問題は別に之に關して一書を編纂すること却て適當にして、又た這般の著書は従來既に世上に乏しからざるを信ずるが故に、本書に於ては唯だ其概要を擧ぐるに止めたり、是れ亦た

讀者の諒せざるべからざる所に屬す。

明治三十三年七月下旬

編者識

### 露西亞史目次

第一章	露西亞の地理	一
第二章	露西亞の人種	四
第三章	ルリク及びオレグの經營(露西亞の創設)	五
第四章	オルガの攝政、スヴァトスラフの統御	一四
第五章	ウラヂミルの希臘教輸入、イアロスラフの統一(露西亞の結合)	二四
第六章	露西亞の分裂	三六
第七章	キーフ没落後の露西亞	五〇
第八章	蒙古の侵入	五八

第九章	西部露西亞の結合	七六
第十章	モスコーの發達	八〇
第十一章	イヴァン三世(露西亞の成立)	九三
第十二章	イヴァン第四世(露西亞最初の皇帝上)	一〇八
第十三章	イヴァン第四世(露西亞最初の皇帝中)	一一六
第十四章	イヴァン第四世(露西亞最初の皇帝下)	一二四
第十五章	イヴァン第四世死後の露西亞	一四〇
第十六章	彼得大帝(露西亞の改造者上)	一四九
	其出生 其即位	
第十七章	彼得大帝(露西亞の改造者中)	一六四
	アゾフの罌取 廢立の陰謀 歐洲漫遊 土耳其に對する 戰爭 瑞典に對する戰爭	
第十八章	彼得大帝(露西亞の改造者下)	二〇八

第十九章	内政の改良 彼得の家庭 彼得大帝の繼承者	二二八
第二十章	二人のアンナの時代 貴族等の陰謀 ヒロンの時代 波蘭王位繼承の争 土耳 其に對する戰爭 千七百四十一年の革命	二三〇
第二十一章	エリザベス、ペトロヅナ 其排普政策 其内治	二五三
第二十二章	ピートル三世 對外政策の一變 カテリンの簒位	二五九
第二十三章	カテリン第二世(上) 第一面の波蘭分制 土耳其に對する成功	二六二
第二十四章	カテリン第二世(下)	二八〇

土耳其分割の目論見 第二回の波蘭分割 第三回の波蘭分割

第二十五章 ポール第一世……………二九〇

第二十六章 亞歷山第一世(上)……………二九四  
ナポレオンの侵入

第二十七章 亞歷山第一世(下)……………三二四  
神聖同盟 亞歷山の内治 秘密結社

第二十八章 ニュラス第一世(上)……………三三〇  
内亂の平定 波斯との戦争 希臘獨立戦争 露清關係

第二十九章 ニュラス第一世(中)……………三四一  
波蘭の叛亂と露國の排佛熱

第三十章 ニュラス第一世(下)……………三五九

第三十一章 シリミヤ戦争の失敗 ニュラスの憤死  
亞歷山第二世(上)……………三八五  
内政の改良と波蘭の叛亂

第三十二章 亞歷山第二世(中)……………三九三  
露國と諸外國との關係 亞細亞方面の經營

第三十三章 亞歷山第二世(下)……………四〇六  
露土戦争 亞歷山の被害

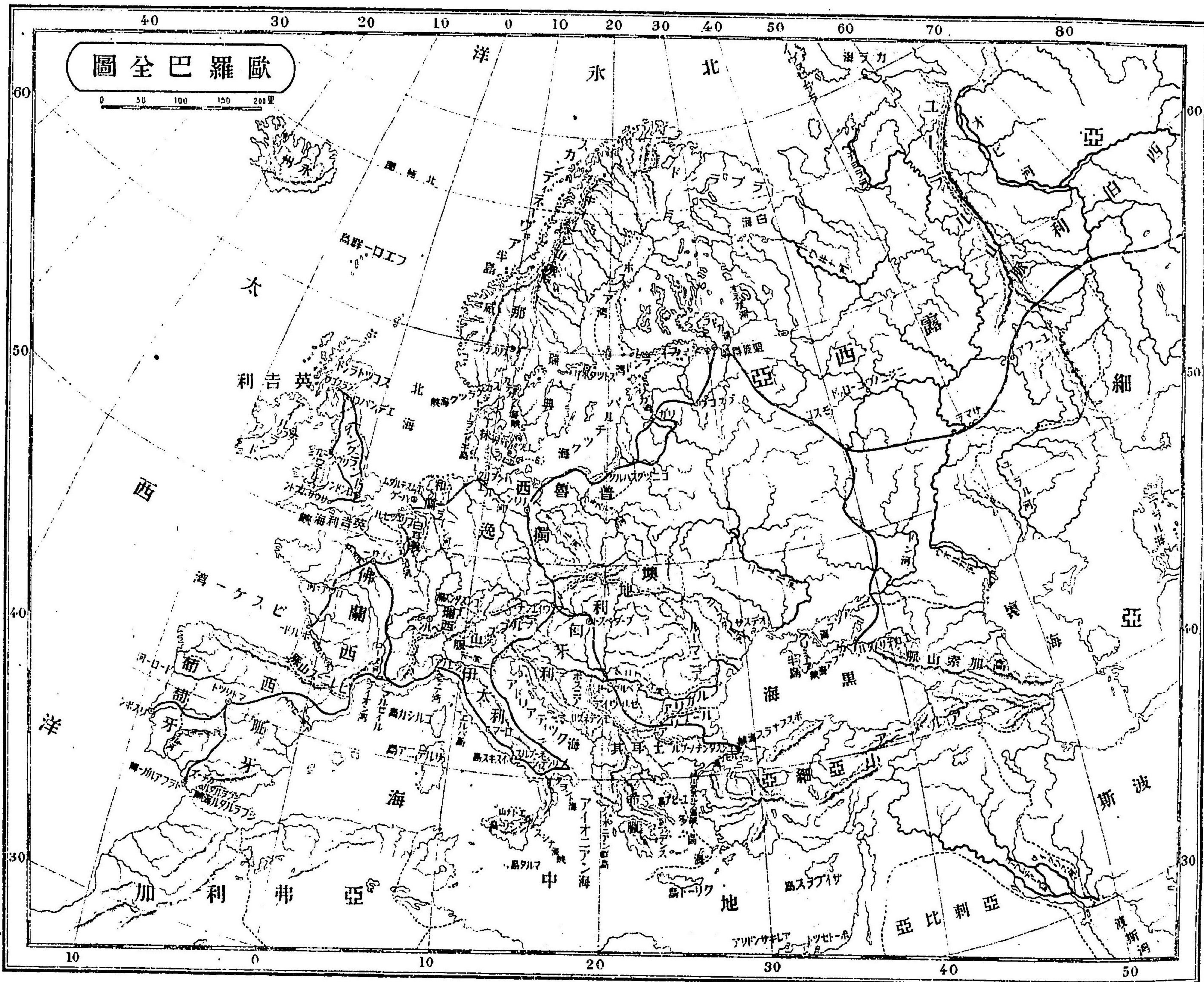
第三十四章 亞歷山第三世……………四二二  
亞富汗事件 バルカン半島の紛擾 露佛同盟 西伯利鐵道

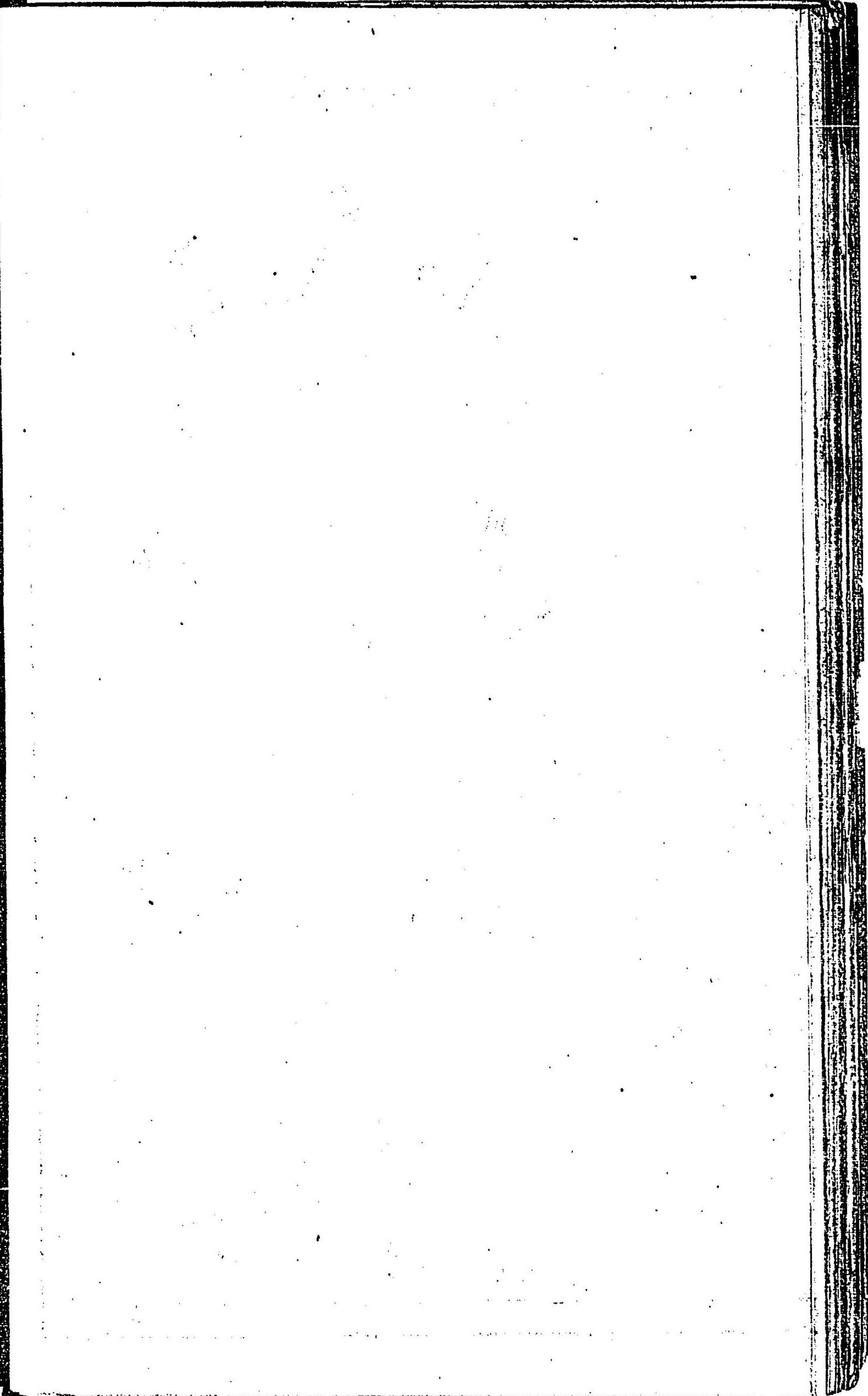
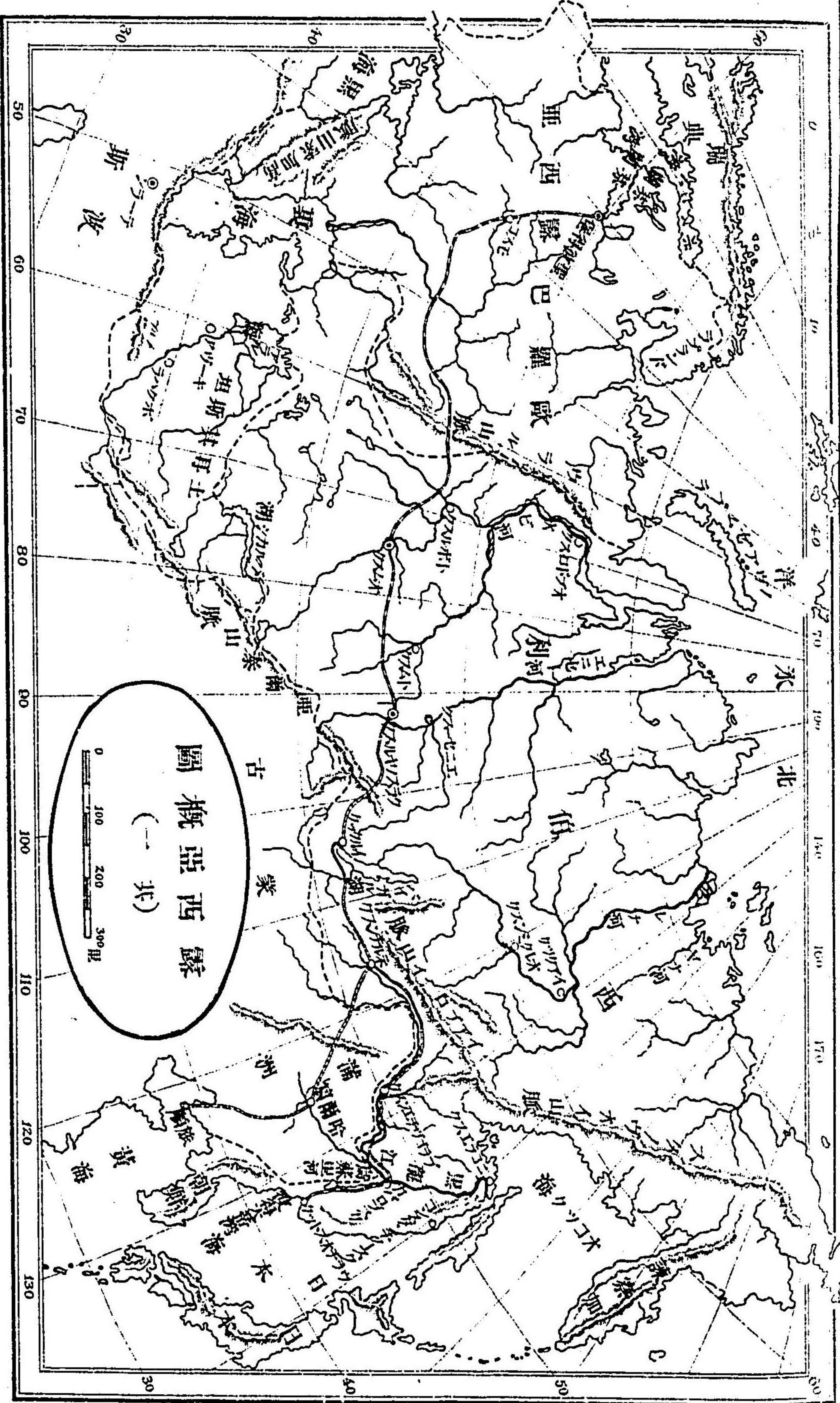
第三十五章 兵備、教育、文學、宗教、社會、貿易、工藝等……………四三七  
露西亞皇帝歷代年譜……………四四三

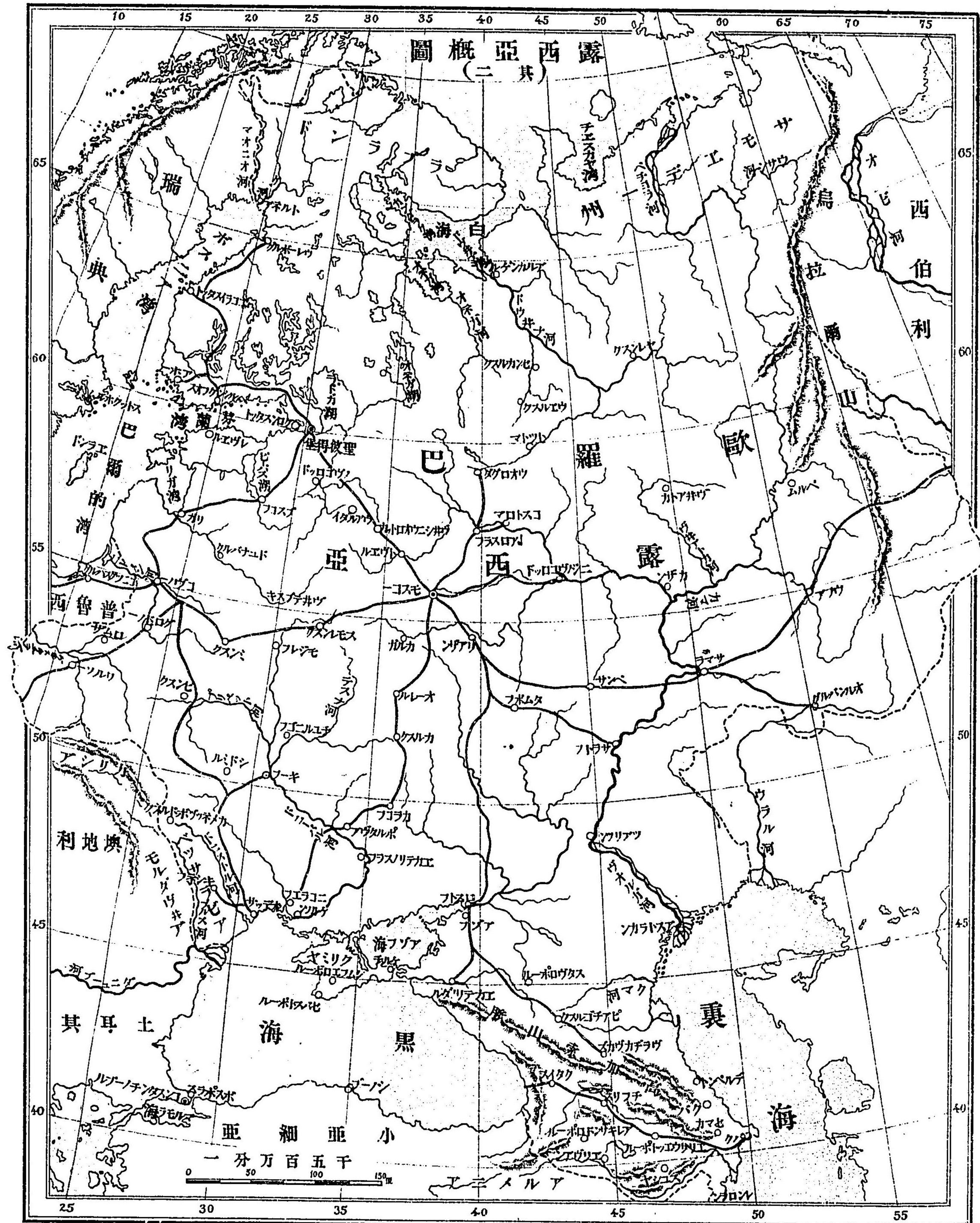


歐羅巴全圖

0 50 100 150 200 哩







# 露西亞史

## 第一章 露西亞の地理

山本利喜雄 編著  
高田早苗 校閲

均しく是れ歐洲なり、然れども其東部と西部とを把て兩々相對照すれば地理上甚だしき懸隔あるを發見すべし。西部の海岸は港灣到る處に出入し、半島あり岬あり、一凹一凸頗る均一ならずと雖も、東部歐洲は之に反し、比較的斯る事なし。是れ露西亞が他の歐西諸國と大に其趣を異にする一要點なり。即ち露西亞は其版圖の龐大なるだけ、北に於ては白海 (White Sea)、北極洋に面し、南に於ては裏海 (Caspian Sea)、ノルマン海 (Sea of Azof)、黒海 (Black Sea) に瀕し、北西に於てはバルチック海 (Baltic Sea)、ボツニン (Bothnia)、ノルマンラマ (Finland)、リヴォニア (Livonia) 等の灣に臨むと雖も、且

海北極洋は一年の強半を通じて結氷すれば航海の便を與へず。バルチック海、裏海も亦た結氷の期早くして、舟楫の利杜絶し易し。乃ち此點より觀察すれば、自然が露西亞に惠與したる所以のものは、極めて僅少なりと謂はざるべからず。露西亞が地理上に於て、歐西諸國と懸隔せるもの豈に皆に其海岸のみならず、山脈に於ても亦た實に然りとす。試みに歐西諸國の山脈を點檢し來れ、皆な國の中央に亘りて其脊骨を形成せざるはなし。而かも獨り露西亞には此事なし、其山脈は概ね皆な國の邊境に起り、中央の地は多くは茫漠たる平原を以て充たさるゝのみ。

露西亞が既に平原にして山嶽の保障を爲す者なしとすれば、其北極風の爲めに疾掃せらるゝは固より當然なり。又た既に無比の廣袤に割合せざる僅少の海に洗滌せらるゝのみとすれば海風若くは潮流の爲めに陸地の氣候が調和せらるゝ事も得て望むべからず。其結果として露西亞の氣候は全然大陸の源因に依りて左右せられ、代る々々北極の感化と中央亞細亞の感化とを受け、氷の沙漠の影響を蒙りて、非常の寒冷を感ずるにあらざれば、燠くが如き沙の大洋の影響を蒙りて非常

の炎熱を感ずるのみ。

セント、ピーターズボルグ(St. Petersburg)は北緯六十度に位し、球上最北の都府たり。此市に於ける最も永き日は十八時四十五分間に於て、大陽は三時前二十分に昇り、九時後二十分に没す。若し夫れ其最も短しと稱する日に至りては、五時四十七分間に於て、大陽は九時後五分に昇り、三時前八分に没す、而して一年の中二箇月は日光を觀難し。

露西亞の如く廣大の地を包容し、而かも露西亞の如く良港灣の闕如たる國に在りては河は極めて緊要なり。露西亞をして亞非利加若くは濠洲の如く、内地の交通全く杜絶して純然たる鎖國の觀あらしめざるものは何者の恩惠ぞ、實に河其者の力なり。河は冬季に於ては、堅氷を結びて、氷上車馬を通すべく、嘗て露西亞の諸王侯に一大捷路を假して、其軍隊を導かしめたるのみならず、夏季に於ては、堅氷融解して水勢汪洋を極め、大船小艇皆な相前後して下るを得べし。所謂夏の船、冬の橈とは蓋し露西亞に於ける唯一の交通機關と知るべし。

形勢此くの如し、是を以て露西亞の歴史を研究して、其發達の跡を繹ぬれば、彼れが

名譽ある戦勝殖民等は一に皆な河の流れに隨て爲されざるなし。詳言すれば露西亞に於て最初民衆が相集りて建國の基礎を立てしは、一に皆なオカ(Oka)カイ(Kama)ドン(Don)及びヴォルガ(Volga)等の河岸に於てせしなり。

### 第二章 露西亞の人種

往古黒海の濱は希臘人が夙に互市を開き、殖民地を創めたる地にして、彼等が之を爲すや殖民地は同盟を結び、ホスボラスのアルホン(The Arkhon of the Bosphorus)と名けられたる世襲的盟主を載き、アルホンの主權は附近の野蠻等も亦た之を承認したりき。斯くて殖民地の民人は勉めて母國の文明を保存し、美術を勵み、雄辯を嗜み、若し戰場に赴くことあれば、夫のホーマーの詩を高唱したりき。然るに彼等と密通して一群の種族の住せるあり、殖民等は之を呼ぶにシーマアン(Syrians)の名を以てしたりしが、シーマアンは野蠻なりしが故に、其平生の習慣は頗る奇とすべき者ありき。即ち彼等は劍を抜て地に樹て、之を禮拜して『戦の神』と爲し、戰場に於て最初に殺したる敵人の生血を吸ひ、捕虜を誅し、其髑髏を以て酒器を製し、王

死すれば多數の殉死者を出だし、王死して年回の忌辰に當れば、其馬と奴隸とを容赦なく屠戮し、以て亡き人の名譽なりと信じたりき。露西亞の所謂スラヴ(Slav)なる者も、亦た實に此シーマアンに屬せりと云ふ、而かも其詳しきは、今之を考ふるに由なし。

### 第三章 ルリク及びオレグの經營

(露西亞の創設)

自紀元八百六十二年  
至紀元九百十二年

露西亞の北人をヴァリアマ或はヴァランママン(Variagi or Varangians)と云ふ、彼等は露西亞の開祖なり。然れども其の起源系統に關しては未だ容易に真相の認むべきものあらず。ヴァリアマ或はヴァランママンは何者なるや、彼等は何の種族に屬するや、凡そ這般の疑問は、露西亞の上古に於て最も喧しき議論の楔子と爲りしものなり。甲論乙説紛々として決せず、年所約一世紀を経たる後ち漸く左の三説に歸着するを得たり。

第一説 ヴァリアマはスカンデナヴィア人(Scandinavian)より來り、所謂スラヴ人

の國に始めて『露西亞』の名稱を興へたる者なり。其證左は一にして足らずスカ  
ンデナヴィキアン流の名字が露西亞に君臨せしヴァリアツ諸王侯の表中に多々  
散見するにあらずや。希臘の皇帝コンスタンチン、ボルビロゼニタヌ(Constantine  
Porphyrogenius)が露西亞に就て語れる中、スラツ人と露西亞人との間に區別を  
立てたるにあらずや。尙ほ彼れはドニール(Dnieper)の瀑布を記載するに常  
り、露西亞語の名稱とスラツ語の名稱とを以てし、其露西亞語の名稱は、概ね皆な  
スカンデナヴィキアン語の轉訛なるにあらずや。セント、ヘルチナヌ(Saint Bertinus)  
の記録に據れば、皇帝セオドラス(Theophilus)は露西亞の某使節をルイ、ラ、ノボキ  
ール(Louis, Le Debonnaire)に紹介したるも、忽ちにして其ノルマン(Norman)の間諜  
なることを覺り怒りて之を囹圄に投じたりと云ふにあらずや。イアロストラフ  
(Tarostaf)が編纂したる露西亞最初の法典は、スカンデナヴィキアンの法典と酷似  
せるにあらずや。是等の事實を以て揣摩すれば、ヴァリアツがスカンデナヴィキ  
アンより來りしは殆んど疑なきが如し。

第二説 ヴァリアツは畢竟スラツのみ、彼等はバルチック海の岸に於けるスラツ

より來れり、又たスラツがスカンデナヴィキアンに於て創めたる殖民地よりも來  
れり。本來露西亞(Russia)なる語は瑞典語の起源にあらず、太古よりドニール  
の地に於ては常に使用せられ『露より來り露にまで往かん』などの語は古き  
書類に散見し、所謂『露』(Rus)なる語は、實にキーフ(Kiev)の地を意味したり。知ら  
ずや、亞拉比亞の記者は露西亞なる名稱を、其甚だ多大なりと思惟せし國民に與  
へ、スカンデナヴィキアンにあらずして土著のスラツを意味したるを。

第三説 第一説第二説は共に非なり。ヴァリアツは一の國民にあらずして、彼  
等は各處より集合したる無籍の冒險者のみ。彼等の中にはスラツあり、スカン  
デナヴィキアンあり、雜然として一團を爲し、上古より此二者の間には、商業上、政治  
上一種の關係を存し、軍隊に在りては、スカンデナヴィキアンは將校の役を演じス  
ラツは兵士の務を行ひたり。要するに彼等は勇敢なる無籍兵士の集合體と視  
れば、中らずと雖も遠からず。

以上三説中、其孰れが正鵠を得たるかは、今遽かに之を斷すべきにあらず。然れど  
も所謂ヴァリアツなる者が、純粹のスカンデナヴィキアンなりとするも、將た彼等がス

ラヴの冒險者と合同混和したりとするも、スカンデナヴィア人が、ヴァリアシの重なる元素たりし一事は、勇鋭として首肯すべきに似たり。思ふに彼等も亦た『海王』として、往時歐洲西北部の海岸を震懼せしめたる剽悍なる種族の黨與ならん乎。近年露人サモクヴァソフ氏(Samokvasof)がチヘルニコフ(Tchernigof)の近傍に於て『黒墓』と呼び倣されたる古墳を發掘したることありしに、同氏は十世紀の無名の一王侯の遺骨と武器とを發見したり、是れ蓋しヴァリアシの一主宰者なりしならん遺骨は固より白一片の紀念物たるに過ぎざりしも、武器は則ち考證の資料を供給したるもの鮮少なからず。其鎖單衣や、其兜やは一としてノルマン兵士の武器に酷似せざるはなかりき、而して夫の古畫に於て觀られ得る露西亞の王侯が、常にノルマン王侯の如く武裝せる事を回想すれば、露西亞創設者の由て來れる所も亦た或は思半に過ぎん歟。

ノルマンが歐洲北部の民人を震懼せしめたるが如く、ヴァリアシも亦た歐洲南部の國民を驚動恐怖せしめたり。彼等は剽悍にして奇矯なり、容貌は魁偉にして材幹は長大なり。「椰子樹の如く丈高し」とは亞拉比亞人が彼等の體格を嘆稱して發

したる語。彼等は水夫としては勇悍にして大膽、兵士としては先天的に最も尊敬すべき歩兵たるに適し、彼等が當時に於ける露西亞の他の種族とは遙かに撰を異にしたり。其戰場に於けるや、彼等は常に集合して敵軍と、戦ひ、驅馳進退嘗て離散せず、之を望めば恰かも肉體を以て築きたる鐵壁の如き觀あり。其武裝を言はん乎、彼等は厚き鐵甲を以て其身を包み、鐵甲は直ちに其脚部に至り、若し敵に後ろを見せかけて退却すべき場合に臨めば、咄嗟之を背部に回轉し、敏捷にして靈活なる事備さに其妙を極めたり。又た彼等は決して降の一字を言はず、何となれば彼等は敵人の手に斃るゝ者は、來世に於て必ず其奴隸たるべき者なりと信じ、勝利の見込めらざれば、潔く自ら首刎ねて其最後を遂ぐべければなり。迷信は則ち笑ふべしと雖も、其勇猛不屈名を重んじて死を輕んずる氣象は、多とするに足る。是故に希臘人は頗る彼等を愛し、彼等はロス(Ros)或はヴァリアシの名稱の下に希臘皇帝の近衛兵を組織し、數度の戰場に従ひたり。

斯くてヴァリアシは、次第に其戰鬪的勞役を他邦人に賣るに至り、彼等はノヴゴロツド(Novgorod)若くはビザンチウム(Byzantium)の爲めに戰鬪に従事したりしが、



要するに彼等は少數たるを免れざりしかば、遂に其打勝ちたる民人と混和するに至れり。只だ夫れ彼等が其特色として長へに保存したるものは、軍事上最優等の位地を占めたる事、換言すれば干戈を執りては驍勇絶倫敵なかりし事、其世襲的首領若くは公選したる主宰者に忠實にして、能く服従の義務を負ひたる事等にして、此服従の義務を知れる一事が、實に彼等が無政府極まる状態に於て在りしスラヴ人に秩序てふ觀念を注入し、以て露西亞國を創設せしめたる大根底なりとす。

さて紀元八百五十九年の頃に於ては、ヴァリアマは、イルメン (Imen) シリヅネ (Krivich) チューヂ (Tchudi) ヴェス (Ves) 及びメリアン (Meriane) 等の各メラツより貢物を徴收しつゝありしが、スラヴ等は次第に其貢物の強要に堪へずして、遂に蜂起してヴァリアマを放逐するに至れり。然るに後ちの爲政者概ね其人を得ず、部落統一せずして騒亂相繼ぎ、民衆殆んど其生を聊せざりしかば、スラヴ等は商議して鞏固なる政府を要すと爲し、紀元八百六十二年に至り、再びヴァリアマを招還したり。されば露西亞なる語が、本來瑞典の一地方に於て工風せられたるか、或は然らずして、ドニイバルの河岸より發生したるかは未だ容易に其孰れなるかを知るべから

ずとするも、ヴァリアマが招還に應じてスラヴォニア (Slavonia) に歸りたるを同時に露西亞の歴史が開始せられたる事實は歴然として争ふべからず。蓋し露西亞の名が東歐に顯著なるに至りしは全くヴァリアマの力にして、ヴァリアマ徴りせば、露西亞は當時尙ほ未だ東歐人の注意に上らざりしなり。ヴァリアマの時代は、實に光輝ある冒險的遠征の時期にして、別言すれば、露西亞の英雄的時代なりしなり。ネチルスキー (Petchenski) の傳記にして、露西亞最初の歴史家たるネストル (Nestor) が、露西亞の名譽として、此時代に於ける不可思議なる武勇談を世に傳へたるもの決して鮮からず。

スラヴの招還に應じて家族と共にバルチック海を渡り、露西亞に來りたるヴァリアマは兄弟數人ありて、長兄ルリシ (Rurik) はラゴダ (Lagoda) 湖畔に居所をトしてラゴダ市を創始し、二弟シニユース (Sineus) はヴェヌスの白湖 (White Lake) 附近に、三弟トルゾオル (Truvor) はノズヴォルメン (Novgorod) に各々其居を占め、以て互に近隣に於けるスラヴの爲めに、其統轄の任に當りたりしが、後ちの二人は幾ばくもなくして死没し去り、ルリシのみ更らにノズヴォロッドに移り、其城郭を築設したりしに、此時

別にアスコルド(Aschold)及びチル(Dir)と名けられたる二人のヴァリアフありて、彼等も亦たキーフの地に來り、擅まゝに其近隣を支配しつゝありしが、彼等は夫のツアルクラド(Tsargrad)若くはビザンチニウムに對して遠征軍を派し、二百艘の戦艦を醸してボスボラスに入り、君士坦丁堡を圍み、功將さに成らんとして暴風の起るに遭遇し、忽ち露西亞の全部艦隊を覆没せしめたる者なりき。

ルリシの繼承者は、其子イコル(Igor)にあらずして、其第四弟オレク(Oleg)なりき。オレクは露謀に富み、ヴァリアフ、スラヴ、及びフィン(Finns)の混成軍に將として南に長驅し、スモレンスク(Smolensk)ルーベチ(Lubetch)等を徇へ、直ちにキーフの外郭に達し、時偶々内應者ありしを以て、最も容易にアスコルド及びチルの二人を生擒し、遂に之を殺戮し畢んぬ。而してアスコルドの墓は今尚ほキーフの附近に於て、其殘礎断石を認むるを得べしと云ふ。斯くてオレクは、此新たなる勝利を得て喜ぶこと限なく、自ら移りてキーフに居り、『キーフをして全露西亞都府の母たらしめよ』と絶叫せしが、彼れはノツコロド、スモレンスク及びキーフを通じて、バルチック海、黒海の聯絡を開き、更らにシリヅキチ(Krivich)メリア(Meria)ドレツツマン(Drev-

lane)セツヒリアン(Severiane)ポリアン(Poliane)及びラヂミチ(Radimitch)等を服従せしめ、遂に露西亞に於ける殆んど總べての種族を其支配の下に歸せしめたり。斯くて紀元九百七七年に至り、オレクは大軍を起し、二千艘の戦艦を醸し、再び海陸よりツアルクラドに侵入したりしが、露西亞古代の英雄譚に就て讀めば、當時彼れが威風の堂々として當るべからざるものありしは、之を想像するに難からじ。即ち彼れは戦艦の上に車を装置し、帆を充分に張り、海風に吹き送られて、一瞬千里直ちにツアルクラドの城門に達したりしが、此時レオ第六世(Leo the Sixth)は其勢容の盛んなるに辟易し、復た防禦の術を講ずる能はずして、只管貢物の供給を應諾し、以て速かに干戈を輟めんことを懇請して止まざりき。然るに此後オレクは、希臘人が毒を食物中に置き、以て露西亞人等を斃さんと計りたることを發見し、更らに苛重の貢物を課し、露西亞の爲めに大利益ある通商條約を強要し、遂に之に調印せしむるを得たりき。

スカンヂナヴ非アンの主宰者オーゲン、ギルフ及びロード(Odin, Gyf and Rode)等が一方に於て大なる軍人たりしと同時に、一方に於て大なる幻術者なりしが如く、オ

レクも愚昧にして傀儡に等しき臣下等より視れば、其智の優りたる、其才の逞しき、亦た是れ宛然たる一個の幻術者たるの觀ありき。彼れは嘗に遠征軍に於て成功したるのみならず、數名の使節を外國に派し、修好の事を議し、所謂條約なるもの、教科書を後世に貽し。内治の施設より外交の操縦に至るまで、一種神變不可思議の手腕を有する大政治家なりとして崇敬せられき。

一豫言者嘗てオレクに豫言して曰く、『御身の愛馬は御身の生命を斷つに至るべし』と、されば此言を聞きたるオレクは、爾後其愛馬を遠ざけて身邊に近づけざりしが、五年の星霜を経て、愛馬は九百十二歳を以て死したりしかば、オレクは豫言者の虚妄を笑ひ、其屍體を解剖に付したりしに、不可思議なる哉、死馬の頭蓋骨より一頭の小蛇現はれ、忽ちオレクの足を噛み、遂に其落命を致したりと云へり。此荒唐無稽の談は全く事實なりとして、露西亞の歴史が傳へて以て今に至る所なり。

### 第四章 オルガの攝政、スヅ井アトスラフ

の統御 自九百十二年  
至九百七十二年

オレクの死後、其甥イゴルは、ツアルクラッドに對し更らに第四回の遠征を企て、初めは失敗せしも終りに於て遂に成功したりしが、紀元九百四十五年に至り、彼れはドレヅリアンの爲めに惨殺せられたり。

イゴル既にドレヅリアンの爲めに惨殺せらる、次で立ちし者は何人なりしや。彼れの未亡人なるオルガ(Olga)は、彼れの子にして、當時尙ほ未成年者たりしスヅ井アトスラフ(Sviatoslaf)の攝政として機務を綜攬したり、而してイゴルが残忍なるドレヅリアンの爲めに非命の最後を遂ぐるに際し、將さに絶へんとして、『遺憾、遺憾』の語を斷たざりしは、オルガが夢寐にだも忘るゝ能はざる所なりしかば、攝政として彼女の第一の慾望は、實にドレヅリアンに對する復讐なりき。果然復讐は仕遂げられたり。彼女はドレヅリアンが彼女を慰藉する爲め特派したる二人の代表者を、一人は生きながら地中に埋め、一人は浴室に於て窒息せしめ、更らに又た軍隊を派してドレヅリアンの都府コロステン(Kosten)を包圍し、家毎に三羽の鳩と三羽の燕とを獻すべき條件を以て媾和を許し、彼等か之を獻ずるに及んでは、彼女は火を點したる蠟を其尾端に縛し、一齊に之を放還したりしかば、鳩や燕やは皆な飛んで

其舊樓に歸り、ドレツリアンの木造の建物と藁葺の家屋とは、看すく祝融の禍に罹りたり、斯て彼女はドレツリアンの民人を一部は殺戮し、一部は奴隸と爲したり。オルガは露西亞に於ける最初の耶蘇教徒なりき。チストルの語る所に據れば、彼女は皇帝コンスタンチン、ボルピロセニクスを訪問してツアルクラッドに赴むきたりしに、其の性質の伶俐にして、萬能に熟達せることは、深く皇帝の心を驚かしめ、遂に其斡旋を以て、ヘレン (Helen) の名の下に洗禮を受けたりと。然れども此の一事は、毫も露西亞に於て注意せられざりしのみならず、當時露西亞の兵士は未だ耶蘇教の何物たるを解せず。ヒザンチウムに對する數度の遠征軍に於ても、彼等は既にヒザンチウムに入れば、寺院若しくは會堂を擇んで之を攻撃し、忽ち火を放て貴重なる建物を烏有に歸せしめ、又た残酷にも僧侶を捉へて其頭に釘し、苦悶して號泣するを觀て、一段の興味ある處と爲したる程なりしかば、他人が耶蘇教徒たらんとするあれば、縱ひ之を妨害せざるまでも、嘲弄輕侮するは則ち之ありき。現にオルガは、其子スヰキアトスラフが成年に達し、政を視るに及んで、『御身一人だに洗禮を受けなば、御身の臣民等は、影の形に隨ひ、響の聲に應ずるが如く、皆な直ちに御身の例に倣ふべし』と説きて、其耶蘇教徒たらん事を勸誘したるも、スヰキアトスラフは單に『予が軍隊の嗤笑を奈何せん』と答へて、應ずる色なかりき。

スヰキアトスラフの御世、詳言すれば紀元九百六十四年より九百七十二年に至るまで八年間は、短日月なりしと雖も、顯著なる事件の發生せし爲め、露西亞の歴史は、毫も索寞を感じざりき。顯著なる事件とは何ぞ、カザルイ (Khazarne) の勦滅と、ブルガリア (Bulgaria) 領有の爲め、スヰキアトスラフが、ヒザンチオン帝國に對して戰を宣したる事是れなり。初めの事件に就ては、歴史の記録は、寧ろ闕如たりと雖も、スヰキアトスラフが、ドン河を遡りて、カザルイ帝國の都府白市 (White City) を陥るれ、高加索のイアス、或はオセチヌイ (Ias or Osetinu) 及びカンガン、或はチヘルケヌイ (Kassogans or Tcherkesu) 等より貢物を強奪したりとの傳説にして、若果して眞なりとすれば、彼れが當時全勝を得たるは、疑ふべくもあらず。然り、彼れは此くの如くにして無前の大捷を博したり。而かも露西亞人は、此大捷を喜ぶべき一の理由を有せず。何となれば、カザルイの零落は、忽ちにして最も悍猛猖獗にして、制御すべからざる野蠻種族、ペチニチマ (Petcheneg) の爲めに、其進路を容易ならしめ、スヰキアト

ストラフは第二のカザルイを得たるよりも、更らに恐るべき強敵を得たればなり。記録の傳ふる所に據れば、某年某月ベチエチマはスツキアトストラフの不在なるに乗じ、咄嗟キーフの外壁に肉薄し來り、遂に其母子を屠戮し去りたりと。而して誰れか料らん、異日スツキアトストラフ自身を殲す者も亦た此ベチエチマにして、亞拉比亞人が『野獸』と綽名せし蠻族ならんとは。

終りの事件、即ちブルガリアの戦争に就ては、歴史の徴すべき者必ずしも缺乏せずと雖も、史家の記する所同じからず。ネストルは曰く『希臘人はスツキアトストラフが如何なる人物なるかを探知せんと欲し、先づ黄金及び其他の珍寶を贈りて、彼れが舉動を偵察せしに、彼れは輕蔑の色を以て之を一瞥し、直ちに兵士に命じて他に持ち去らしめしかば、希臘人は更らに一口の名劍を致したるに、彼れは始めの氣色に似もやらす、拜跪して之を受け、最も熱心に贈物に接吻したりしを以て、希臘人は、茲に始めて彼れが勇武の氣象に富める偉人なることを知り、大に警戒を加へたり』と。乃ち之に因りて之を見れば、彼れがブルガリアに對する宣戰は、實際其威武を發揮するの好機會なりしに似たり。然れども希臘の史家某の語る所に據れば、ア

ルガリアの戦争に於けるスツキアトストラフは、寧ろ一個の傀儡たるに過ぎずして、當時彼れが背後に在りて巧みに之を操縦したる者は、實に希臘の皇帝ニセホラス、ホーカス(Nicephorus Phocas)なりしなり。詳言すれば、ニセホラス、ホーカスは、ブルガリアの皇帝ピートル(Peter)に侵奪せられて、心筋かに復讐を望みたりしも、其力足らざりしを以て、ゼザンチーン朝廷の慣手段たる詭計に依頼し、一介の使者に充分の軍用金を齎らして、スツキアトストラフの許に到り、出師の事を謀議せしめ、遂に能く其目的を達し、所謂外交的手腕なるものを揮ふて、スラヴ種族をして互に干戈を執て相見ゆるに至らしめ、蜜蜂先づ紛争して、己れ獨り漁父の利を壟斷せんと欲したるなり。斯くてスツキアトストラフは、淺薄にも其術中に陥り、戰備を整へ、艦隊を藏し、ダニエー(Deaube)を下り、ビザンチーンを恢復し、ブルガリアの首府ペレアシタ(Pereiasla)を占領するに至れり。

此役にスツキアトストラフは勝利を得て、頗る雀躍し、遂に其都をペレアシタに移さんと欲し、人に語りて曰く『美なる哉地や、實に予が領土の中央にして、又た富の集合點なり、觀よ、貴重の織物と芳烈の酒と純良無垢の黄金と各種の菓物とは希臘よ

り來り、駝馬と白銀とは、チエキ(Tcheki)及びハンガリア(Hungaria)より來り、獸皮と蜂蜜と蠟と奴隸とは露西亞より來るにあらざや」と斯くてスヰキアトスラフは、初めは希臘皇帝の使賤に依りてベレアスラフに攻め入りしが、忽ちにして躬自ら此地に垂涎するに至りしを以て、希臘帝國より限なき危險物として嫌惡せられたり。蓋し是れ決して謂れなきにあらず。今夫れヒザンチエームは小弱なるブルガリアすら、其力到底抗すべからずとして恐怖したる者、乃ちバルチック海より、バルカン(Balkan)半島に領土を擴張し、兵士の精悍なる事、断じてブルガリアの倭にあらざりし者が彼れと咫尺に相對峙して、何時鐵騎一鞭、其城郭に肉薄し來ることなきを保せずとすれば、彼れは勢ひ杞憂を懷かざらんと欲するも得ざりしなり。然れども昊天は未だ希臘帝國の滅亡を傍觀するに忍びず。此時新皇帝ヨアン、シミス(John Ximises)は英武にして才幹あり、徐ろに兵士を集めて、スヰキアトスラフの雄圖を防遏する所以を講じ、拮据經營、遂に其野心を成就すること能はざらしめたり。今其次第を叙せん、是れより先き、ベレアスラフは形勢再び不穩と爲り、スヰキアトスラフは重て此地に出陣し、ブルガリア人の掃蕩に従事しつゝありし

が、此時ヨシミスは、先帝ボロカスが嘗て彼れと締結したる條約に依り、彼れに此地より撤兵すべきを要求したりしも、スヰキアトスラフは毫も之れに傾聽せざりしかば、ヨシミスも今は大に所存の勝を固むる所あり、密かに兵士の糾合に着手し、遂に紀元九百七十二年三月の初に於て、ダニユールに沿ふて艦隊を北進せしめ、自身も亦たアドリアノーブル(Adrianople)に向て急發したり。然るに露西亞人はヨシミスが爾かく急速に到達すべしとは些も豫想せざりしかば、其突然ベレスラフの外壁に迫るに及んでは、大に驚愕して舉措を失し、遂に全く撃破せられて壁内に退きしが、道がに露西亞人も豪の者なり、八千の籠城者は齊しく皆な城に墜りて死守し、盡頭極尾降の一字を言はず、遂に火を放て一人も遺さず皆な灰燼に歸して止みたりき。

今や警報は頗にスヰキアトスラフの許に飛びぬ。最早や猶豫すべきにあらず、彼れは希臘皇帝と會戦せんが爲めに其軍隊の大部分を引率して、急に進發したり。龍岡虎争の地は何の處なりしや、シリストーリア(Silistria)のフロストル附近に於て、兩雄は端なくも逢着したり。當時露西亞の軍隊は、或は六萬以上ありしと云ひ、或は

一萬に上らざりしと云ひ、其數は精確に之を知るべからざりしも、兎に角彼等は此の如くにして此處に震天動地の大戰を演じ、十二時間は勝敗の決未だ孰れとも知るべからざりしが、希臘の騎兵に當りたる露西亞の歩兵は遂にドロストルに退却し、此處に於て再びヨミセスに圍まれたり。而して包圍の裡に在りても露西亞人は最も勇悍に防禦し、其婦人小兒に至るまで頗る大膽に戰鬪に従事せしかど、奈何せん糧食既に盡きて復た支ふべからず。是を以てスヰキアトスラフは一夜風雨の晦冥なるに乗じ、希臘艦隊の眼を偷みて附近の村落より米穀を蒐集しつゝありしが、彼れは不幸にして忽ち敵軍の覺知する所と爲りたり。既に否塞に向ひたる運命は再び開發すべくもあらず。スヰキアトスラフは威名一たび衰へて雄風復た競はず、さしも拔山蓋世の勇ありし身も、是に至て茫乎として爲す所を知らず。漸く窮餘の一策を案出し、其聲を漏されし郎黨を擧げて潔く一快戦を試み、以てヨミセスと雌雄を決せんと欲したりしが、彼れが這般の決心を爲すに及んでは、ヨミセスは却て彼れに提議して言へらく『無用の戦争を事として徒らに部下の人命を傷ふは忍ぶべきにあらず、汝予と雌雄を決して甘心せんと

欲せば請ふ單身來て決鬪する所あれ』と。されどスヰキアトスラフは此提議に同意せざりき。彼れは無造作に答へて言へり曰く『予が何を爲すべきやは汝の言を須たずして、予自身最も能く之を知れり、然れども汝にして既に現世の生活に倦み復た生存することを願はずとなれば、死の方法は、決鬪を除却するも、他に多々之あらん』と。斯くて所謂最後の戦争は愈々開始せられ、殺伐慘憺の光景は、固より毫も従前に減せざりしが、勝利は遂にヨミセスに歸し、スヰキアトスラフは、殘甲敗兵を收めてアルガリアに引揚げたり。彼れが當時ヨミセスに對して誓約せし言は寧ろ奇なるもの曰く『天長へに地久しく予は復た希臘を侵さざるべし。而かも若し今後希臘帝國に對して異國を挾む者あらん乎、予は予が全力を竭くして其防禦に従事せん、天神地祇照鑑を垂れ給へ、予にして將來若し此言を食むれば、予が全身は直ちに黄金の如く黄色に變じ、立ち所に生命を断たれん』と。斯くて彼れはアルガリアを引揚げて、無難に歸國することを許るされしが、途次不幸にして、ペテエチの要撃する所と爲り、一代の豪雄彼れの如き者も、竟に其兇手に斃れ、蠻族等は彼れが頭を斬て例の如く飲器を製したり。

## 第五章 ヴラヂミルの希臘教輸入、イアロスラフ

の統一(露西亞の結合)自九百七十二年  
至千五十四年

天下は馬上を以て取るべきも、馬上を以て治むべきにあらず。勇悍なるヴァリアの戦勝に依りて露西亞を創設したるスラヴ種族は、之を結合維持して、敢て或は土崩瓦解せしめざる所以を講ぜざるべからず。彼等は如何にして之を講じたる歟、彼等の間に共通なる宗教の力に依頼するの外、他に其の術なかりき。

露西亞に於て、最初耶穌教を信仰したる者は、既記の如く攝政オルガなりき。彼女が尙ほ草昧の時代に於て、萬緑叢中一點紅を以て自ら居り、夙に博愛慈善の聖教に私淑せしは洵に欽して而して敬すべき所なれども、當時の事は要するに露西亞に於ける宗教發展の一萌芽たるに過ぎざりしかば、之を以て上下共通の國教と爲し、其冥々の間に人心を支配する一種偉大の勢力を利用し、以て一國の結合統一を計らんと欲せば、更らに大に經營する所なかるべからざりしや勿論のみ。借問す、露

西亞に於て這般の事に任じ、能く其業を完成したる者は果して誰れぞ。實にヴラヂミル(Vladimir)其人なりき。但だ夫れ彼れは其初年に於ては、亂行敗徳相踵ぎ、頗る蕩佚の譏ありたる者、斯人にして斯業を完成す、觀來れば稍々異様の感あるのみ。

ブルガリアより歸國の途次、ベチニチヤに要擧せられて非命の最後を遂げ、半世の雄圖空しく一場の夢と化し去りしスヴヂャトスラフは三人の子を有し、イアロポルス(Taropole)はキーンを主宰し、オレシ(Oleg)はドレヅリアンを支配し、而してヴラヂミルはノヴゴロッドを統率せしが、事變の後には内亂相繼ぎ、兄弟三人牆に闘ぎ、イアロポルクはオレシを殺し、ヴラヂミルは、イアロポルクを殺したり。斯くて伯と叔とは相前後して冤鬼の羣に入り、季のみ長へに生存したりしが、彼れはイアロポルクが結婚の約を取換はしつゝありしロクナダ(Rogneda)と名けられたる婦人に懸想し、其父ポロトスシ(Polotsk)のロクツオロッド(Rogvolod)に向て公然彼女を其妻に迎へんと申込みたり。然るに思ひきや、佳人ロクナダは、ヴラヂミルの命を峻拒し、『奴隸の體內に宿りたるものとは結婚するを欲せず』と言ひ放ちたりしかば、ヴ



ラヂミルは烈火の如く激怒し、軍隊を派してポロトスクを陥るれ、ロクツオロッド及び其子二人を屠戮し、而してロクツダを脅迫して遂に己れに嫁せしめたり。蓋しヴラヂミルの母は、イアロボルク、オレク等の生母とは異り、嘗てスヰキアトスラフに侍せし賤婢なりしかば、佳人ロクツダは今此言を爲せしなり。而してヴラヂミルの亂行は固より此くの如くにして止まざりき、即ち彼れは更らにイアロボルクが、ビザンチウムに對する遠征軍の際に捕虜と爲したる希臘の尼にして頗る姿色ありし者を寵し、尙ほボヘミア (Bohemia) フルガリア等よりも、各々一人の妻を納れ、最後に史家が其千秋の詎録に残して『奴隸の體內に宿りたる漢子は、ツイセコロツヤ (Vishlegorod) に三百の妾を蓄へ、キーフに密通せる、マイルコロット (Baigorod) に同じく三百の麗妹を養ひ更らにベレストフ (Berestof) に二百の曲眉豊頬を置きたり』と傳ふるまでに、其淫樂を恣にしたり。然れども彼れも亦た徒らに酒色に沈溺して一生を醉生夢死に了する統袴子にあらず。赤露 (Red Russia) に打勝ち、ヅキアチツチ (Viatich) ラヂミツチ等の叛亂を鎮定し、尙ほ能くフィンンの各種族に對し其貢物を献納せしめたり。

蠻行を敢てして時人を驚殺したるヴラヂミルは、宗教的觀念に依りて偶然にも別人の如く爲れり。彼れは最初スラヴの多神教を信仰したり。ドニールの水に臨みて兀然屹立せるキーフの高丘には、銀頭金髯の爛漫たる偶像神安置せられたり、二人のヴァリアジは之を崇拜せざりしが爲め、無残にも殺戮せられたり。然れども世運は駸々として進歩し、古代偶像神の迷信は一般に皆な攪破せらるゝに至りしかば、ヴラヂミルも亦た新たなる信教の必要を感じ、キーストルの語る所に據れば彼れは特に使節を各地に遣はして宗教制度の善悪可否を探知せしめたりき、斯くて使節は回々教徒を訪ひぬ、猶太教徒を訪ひぬ、尙ほカトリック教徒をも訪ひぬ。然れども一として、ヴラヂミルの意に適する者なかりき。彼れは回々教は信徒の陽物を断ち、露西亞人が嗜む酒を嚴禁するを以て之を嫌惡したりき。猶太教は信徒が住處を定めずして世界各地に遍歴するを以て之を排斥したりき、而して儀式の粗雑にして莊嚴華麗の觀を缺くとは、彼れがカトリック教を採用せざりし口實なりき。然るに彼れが君士坦丁堡に派せし使節は、聽がて其驚愕に堪へ得ざりし面持にて歸り來れり。セント、ソファアイヤ (Saint Sophia) の建物は巍峨として如何に

偉觀なりしよ、僧侶の衣服は燦爛として如何に眼を射るばかりなりしよ、儀式は如何に壯大にして美麗なりしよ、贊美歌は、劇院として如何に高尙優美なりしよ、使節は口を極めて希臘教の完美を稱賛し、ヅラヂミルが、尙ほ狐疑して決せざる色あるを觀るや、『若し希臘教が最良の者にあらざりしなれば、御身の祖母なるオルガも斷じて之を採用せざりしならん、既にオルガが之を採用せられたる以上は、彼女は人間の最も賢明なる者として知られたる人なりしかば、御身が今之に倣はるゝことも何の不可か之あらん』と説きて、交々彼れを懲慙したりしを以て、彼れも遂に決心する所ありたり。然れども彼れは元來傲岸不屈の英雄、縱ひ希臘教を露西亞に移すとするも、自身希臘人に依りて洗禮を受くることは之を爲すを屑とせず。其胸中には此時早くも既に成算の備はるあり、是を以て彼れは自個の武勇に依りて希臘に打勝ち、無形の分取物として其宗旨を壟斷せんと欲したりき。斯くて彼れは亂暴にも兵を率ゐてトローツド(Troitz)に下り、ケルソン(Kheron)を圍みたるに、幸なる哉、當時内應者ありて容易に勝利を得たりしかば、彼れが尊大の程度は、歩一步益増進し、彼れは直ちに使節を希臘皇帝バシル(Basil)の許に派し、其皇妹アンナ(Anna)

を納れて、己れが妻と爲さんと求め、言若し聽ざれば忽ち君士坦丁堡に長驅せんと恫喝したりき、されば此時内亂の空湧に因頼して、國政の措置を持餘ますばかりなりし希臘皇帝は之を辭するに由なく、遂に皇妹を與へて婚儀を舉げしめ、其唯一の條件として、ヅラヂミルをして洗禮を受けしめたり。斯くてヅラヂミルは固より豫期したることゝて直ちにケルソンに於て其式を行ひ、滞りなくアンナと婚姻の事を終りたり、而して彼れが露西亞に歸りて改宗の事を斷行したるも亦た最も果斷なりき。即ち彼れは露西亞の民衆が驚怖して號泣する者ありしに管せず、其嘗て建立せしドニール岸に於ける偶像神を仆し、容赦なく之を河水に投じ、又た老弱男女を問はず無数の民衆を裸體と爲してドニールの水に投じ、彼等の爲めに洗禮を行ふと稱し希臘の僧侶と共に河岸に佇立し、無造作に其禱詞を朗讀したり。

然れども信仰の觀念は到底外部の脅迫を以て左右し得べきものにあらざ、ヅラヂミルが所謂改宗の事を斷行したる後ちもスラツの天地は依然として多神教の舞臺にして、耶穌教は只だ僅かに上流社會の一部に行はれたるのみ、故に此點より言

はん乎、彼れが宗教上の成功は左程大なる者にあらざりしなり。然れども兎に角彼れが人格は是れより後ち著るしく變化したり。彼れは希臘の妻に對して誠實眞摯にして、其言とし言へば概ね皆な之を聽きたりき、彼れは復た戦争を好まざりき、其歳入の幾分を喜捨して學校を建設し、貧民を賑恤し、時世の進歩と共に犯罪の増殖せしに管せず、刑罰を加ふることすら躊躇したりき、要するに彼れは其初年に於て亂行敗徳を以て指彈せられたりしも、其生涯の後半期に於ては、不可思議なるまでに善人と爲り了せり。

ヴラヂミルは紀元千十五年に於て死没したり。其後に残りたる者は極めて多數なる妻妾が生みたる子。彼等はヴラヂミルの生存中は互に和合して、棟梁最も親しかりしが、乃父六尺の軀幹が一朝にして冷却し、當日の好漢も憐むべし一堆の土饅頭と化するに及んでは、相反目し相争奪して、忽ち慘憺たる修羅場を現出したり。其詳細は爰に一々すべきにあらざと雖も、概要を擧ぐれば左の如し。

ヴラヂミルの死没せる時に於て、露亞の版圖は、業に既に非常の膨脹を遂げ、彼れが其多數の子に分配したる領土の範圍を一考すれば、當時彼れが如何に強大なりし

かは之を想像するに難からず、即ち彼れはイアロスラン (Jaroslav) に、ヴゴロツトを與へ、ロシチダの子イシアシラン (Isiaslav) に、ポロトスク (Polotsk) を與へ、ボリス (Boris) に、ロストン (Rostov) を、グレム (Gleb) に、ムロム (Morum) を、スウヰアトスラフ (Sviatoslav) に、ドレヰツリアンを、ヴゼツオロツド (Vsevolod) に、ヴォルヒニアのヴラヂミル (Vladimir in Volhynia) を、ミスチスラン (Mstislav) に、ムントリカカン (Muntorakan) を與へ、而して最後に其甥スウヰアトボルクには、トエロフ (Turof) の公國を與へたりしが、彼れの死後此スウヰアトボルクは、擅まゝにキーフの主宰者と爲り、先づボリス、グレムの二人を暗殺し、次でドレヰツリアンの主人公スウヰアトスラフをも、亦た其兇手に斃したりしかば、イアロスラフは忽ち慨然として驟起し、正義の戈を揮ふて同胞等の爲めに復讐を計り、誓て彼等が九原未死の冤魂を慰めんと決心したり。然れども此イアロスラフも、亦た當時偶々大なる罪惡を犯したる者、即ち彼れは一朝の怒に乗じ、ノヴゴロツドの市人無數を惨殺したる事ありしを以て、今此スウヰアトボルクが他の三人の同胞を戕害したりとの飛報に接しても、忽ち自身の運命を懸念するの餘、全身粟を生じて覺へず、戦慄したりしが、ノヴゴロツドの住民等は

元來善良にして兇惡ならざりしかばイアロスラフが其罪惡を懺して赦免を懇請し、遂に彼等の前に號泣して止まざるに至りては、中心惻然として自ら禁せざるものあり、『皇子よ、幸に意を安んぜられよ、御身は縦ひ吾等の仲間を虐殺せられたるにもせよ、吾等は誓て御身の爲めに粉骨碎身して戰場に奮闘すべし』と、異口同音に唱へたり。斯くてイアロスラフは義侠心に富めるノヅゴロツド人等と共に、スヅキアトホルクに對して戰を宣し、首尾能くキーフの篡奪者を撃破し、スヅキアトホルクには匪違の報として、間關流離、具さに辛酸を嘗め、身は金枝玉葉の貴を以てして、尙ほ且つ路傍に彷徨して饑餓に瀕せざるを得ざらしめしも、要するに當時は既にウラヂミルの死没したる後となりしを以て、野心家、謀叛者は續々輩出して、鼎の輕重を問ふ者決してスヅキアトホルク一人に止らず。ポロトスクのイシアスラフトムトラカンのミヌチスラフ等、皆な一世の奸雄にして、異國の形跡歴然たりしのみならず、既に進んで、イアロスラフに對し攻撃の態度を取りたりしかば、イアロスラフも今は已むを得ず、此二人の者も亦た之れを勦滅し、遂に全露西亞の唯一なる主權者と爲りたり。所謂キーフの全盛期は實に此時代にして、彼れは更らに法

典を編纂し、各種の土木を起し、又た文學を奨励したり。史家之を稱して、イアロスラフの統一と云ふ。

イアロスラフは又た波蘭(Poland)を討ちて赤露の數市を奪し、ベチエチヤと戰て回復すべからざる創痕を蒙らしめしが、嘗てスヅキアトスラフがカザルイを撃破して、其勢力を蹂躪したるより忽ちにしてベチエチヤに勃興の機會を與へたりしと一般に、彼れはベチエチヤを殆んど全く勦滅したりしが爲めに、却てボロツツイ(Polovtsui)と名けられたる新種族に北進の氣勢を添へしめたり。此他南征北伐、イアロスラフの御世は尙ほ數度の戰爭を見たりしが、其最後の者は、希臘に對する大軍の進發なりき。即ち彼れの子ウラヂミル(Vladimir)は、遠征軍の元帥として、眼夙に希臘軍を空ふし、屢々希臘皇帝コンスタンチン、モノマカス(Constantine Monomachus)を輕蔑し、擲搦し、遂にボスボラスの海濱に於て鐵火相見へたりしが、希臘軍の發砲と黒海の暴風とは容易に傲慢なる露西亞軍を四方に散亂せしめ、八千の軍隊は逃れて露西亞に還る途次、敵に塵殺せられて全滅し、八百の軍隊は不幸にして捕虜と爲り、縲紲の辱を受け、君士坦丁堡に護送せられて種々の責に堪へたる後ち、殘

酷にも皆な其兩眼を抉出せられたり。

露西亞法典の起源たるイアロスラフの法典は『ルスカイア、ボラヴダ』(Russkaia Pravda)と稱し、既記の如く全くスカンデナヴィア法典の神を移したるものなりき。即ち法典は私人の復讐を認め、死者の親戚は何人たりとも敵を窮追して之と不倶戴天の恨を霽らすべき事を規定し、各種の犯罪并に皇室に對する罪の罰金を定め、司法上の決闘を許るし、熱湯を探り若しくは鐵條を燒きて紅色に變したる者を握り以て争に係る事件の正邪を神の判断に任かすべき掟等ありき。

蓋しイアロスラフの時代に於ける露西亞は、所謂ヴァリアマ統系の露國なるものが漸次發達して其隆盛の頂巔に達したる時期にして、文物典章の比較的具備して燦然觀るべき者ありしは勿論、イアロスラフ自身が當時歐羅巴の各主權者間に占有せし位地も亦た極めて名譽あるものなりき。即ち彼れの妹マリア(Maria)は波瀾の王カシミル(Kasimir)に嫁し、彼れの女エリザベツ(Elisabeth)は諾威の王ハロルド・ゼノマン(Harold the Brave)に嫁し、アンナ(Anna)の佛蘭西王ヘンリー一世(Henry the First)に嫁せり、アナスタシア(Anastasia)の匈牙利王アンドロニー一世(An-

drew the First)と婚せる、其他彼れの子ウラヂミルが英王ハロルド(Harold)の女を娶れる、イシヤスラン(Isiaslaf)が波蘭の王ミシスラン二世(Mieszko the Second)の女を娶れる、ヴェスラン(Veslaf)が希臘皇帝コンスタンチン、モノマカスの女を娶れる、其姻戚の盛んなること實に未曾有にして、歐洲の天涯地角到る處として籍甚の名聲あらざるはなく、又た能く諾威、瑞典、英蘭等の王侯にして、自國の内亂の爲めに難を避けて露西亞に流寓しつゝありし者を厚遇し、以て大に其威福を行へり。

尙ほイアロスラフの時に於けるキーフの光景を一言せんに、當時全歐に接踵比肩する者なかりし彼れの首府として、優に繁華盛麗を極はめ、イアロスラフが此地を以て必ず君士坦丁堡に譲らざる都府たちしめんと熱望したるだけ、無数の寺院は修繕せられ、建築せられ、又た市街の外部を包める胸壁も新たに築設せられ、府民の人口は次第に増殖して、人家は益々稠密と爲り、大厦高樓阡陌に相望み、ビザンチエームに達する大道の如きは瞥見すれば希臘の一部分なるかの如き感さへありき。

而して通商貿易の盛んなる、キーフの地は八個所の大市場を有し、和蘭、匈牙利、日耳曼及びスカンデナヴィア等の商賈が層至雜沓せる、ドニール川の河水が輻輳せ

る商船を以て充たさるゝ其般賑の狀誠に眼を驚すべき者ありき。否、ニアロス  
ラフが經營せしものは獨り此くの如きに止らず、彼れは夙に學校を創設し、貨幣を  
鑄造し、後ちの露西亞の爲めに殆んど總べての物を準備したりしが、彼れは紀元千  
五十七年に至りて、遂に天壽を以て病没しぬ。

三六

## 第六章 露西亞の分裂

自千五十四年  
至千六百十九年

紀元千五十四年より千二百二十四年に至るまでは露西亞の歴史は、其記録中に於  
て最も錯雜紛糾を極めたるものにして、或る史家の言に據れば露西亞は此時代に  
六十四の公國を有し。キーフの主宰を争ひし者二百九十三人の多きに及び、内亂  
絶ゆることなく全國を擧げて篡奪争鬭の區と化し、之に加ふるに外國に對する戰  
争また頻々之ありしかば國歩最も艱難を極めたりと。蓋し群雄割據の遺風が  
尙ほ政治的結合の理想を壓倒せんとする傾ありしを以て、其國民的領土の常に分  
割せらるゝの厄に遭遇したるは誠に免るべからざるの數なりしなり。今當時に

於ける公國の重なる者を列擧すれば概ね左の如し。蓋し這は往昔に於けるス  
ラヴの各種族が漸次發達して、今は既に儼然たる一國と爲りしものと知るべし。

スモレンスクの公國

モツヤイスクの公國

ウ非アスマの公國

トロベトスの公國

キーフの公國

ベレアスラヴルの公國

ウエイセゴロツドの公國

ベルゴロツドの公國

トリボリの公國

トルンクの公國

チエルニコフの公國

ノヴゴロツド、セヴェルスキの公國

リアザン及びムロムの公國

スツアルの公國

ポロトスクの公國

ノヴゴロツドの公國

ヴォルホニアの公國

以上列記したる公國中、其の本宗と目すべき者を問へば言ふまでもなくキーフなりき。キーフの主宰者が他の公國の主宰者と趣を異にし、自ら稱して大公(Grand Prince)と云ひ、他の公國の主宰者に比し常に優勝の位地を保ちつゝありしは太古夫のルリクが露西亞を創設したる時よりの制にして、スラヴ人が一般に皆な承認して毫も疑を挟まざる所なりき。されば勝を好むの人情誰れか敢て此公國の主宰者と爲り、以て富貴權勢を貪るとを欲せざらんや。所謂太公なる者を繼承すべき人が明定せられざることあれば、非望を覬覦する者が群起して常に其跡を絶たざりしは些も怪しむべきにあらず。夫のイアロスラフの死後、主權繼承の野心を懷抱せる諸王侯の争奪と爲り、禍亂と爲り、一國の統一全く壞崩したるも亦た全く

之に職由せるもの、本章に記載せる露西亞は實に此紛々擾々たる状態に於て在りし者なり。

イアロスラフは其露西亞統一の功勞を以て實に『大王』の名を贏ち得たる者なり。然れども其死後は北邨一堆の陵土未だ乾くに及ばずして、繼承の争既に全國に瀰蔓し、殆んど潰裂四出して復た拾收すべからざるに至らんとせり。是れ果して何に因りて然りしや、實にヒザンチーンの新法典とスラヴ固有の國法と繼承の點に關して著るしき差違ありたるが爲めなり。今夫れ諸王侯等は法律の規定明瞭にして、敢て或は一點の疑を挟むべき餘地なきにもせよ、其野心を成就せんと狂奔せる者なれば百の口實千の理由を案出して、夙夜に其主張把持する所を貫徹せしめんとす。况んや法典の規定相矛盾して、彼等が萬一を僥倖する所以のもの、を杜絶する典範頗る明確を欠けるをや。イアロスラフが其長子に任意の遺言を爲し、且つ垂死の病牀に他の群兒を集め、『長子を視ること己れを視るが如くせよ、彼れを尊重すること己れを尊重するが如くせよ、我れに不諱あればキーフの主宰者たるべき者は無論彼れなり』と繰返へしたるは、明白なる事實なれども、奈何せん其六

尺の軀幹一朝冷却して黄土に歸すれば、群兒は復た當日繰返へされたる言辭を記  
 臆せずして、既に各々自立せんとするの志ありたり。斯くて長子イシアシアスラン(Ish-  
 aslan)がキーフの主權者として名譽ある大公の裝冠を戴きしは眞個に東の間ののみ。  
 其弟スヰキアトスラフ(Sviatoslaf)は忽ち兵を起して彼れを顛覆せんと謀り、イシ  
 アスラフは紀元千七百十三年に於てキーフの都を後にして日耳曼王ヘンリー第四世  
 (Henry the Fourth)の朝廷に逃走せざるを得ざるに至れり。而して窮鳥既に懷に投  
 じたれば、日耳曼王は此時特に其使節を派しキーフの篡奪者に就き、イシアシア  
 フの復位を議せしめたりしも、スヰキアトスラフは禮を厚ふし辭を卑ふして使節を  
 待ち且つ厚く金銀珠玉を以て之に賄ふ所ありしかば、日耳曼の使節も一種の政略  
 の爲めに魅せられ遂に全く平和の政策を執るに至れり。此くの如くにして憐む  
 べきは客土に流寓しつゝありしイシアシアスラフの境涯、彼れは杖柱とも頼みてしへ  
 ンリー第四世がスヰキアトスラフの爲めに忽ち其藥籠中の物と爲されたるが爲  
 め遂に復位の初一念を達する能はず。紀元千七百十六年に當の敵たるスヰキアト  
 スラフが死没せるまでは空しく羈旅に呻吟してキーフに歸るを得ざりき。

斯くてスヰキアトスラフの死後、辛うじてキーフに歸りたるイシアシアスラフは、已れも  
 亦た紀元千七百七十八年に於て忽ち死没したりしが、其死後は彼れの子スヰキアトポ  
 ルク(Sviatopolk)は直ちに其空位を充たすを得ずして、當時の法律に依れば、イアロ  
 スラフの子たる者は順次に皆なキーフの主宰者たるべき定めなりしかば、彼れの  
 弟ヴセヴォロツドは、彼れに代りて立ち、紀元千七百七十八年より千九百十三年に至るま  
 で十五年間其支配を繼續したり。而して之と同一の理由に依りヴセヴォロツド  
 の死後も其子ウラヂミル、モノマク(Vladimir Monomach)は遂に繼承者たる能はずし  
 てキーフ主宰者の裝冠は、再びイシアシアスラフの血統に回へり、スヰキアトボルクの  
 頭上に落ち來たり。而して此時夫のウラヂミル、モノマクは、元來善良誠實の皇子  
 なりしだけ毫もスヰキアトボルクと相争はず、速かにキーフの主權を彼れに致し  
 て退きたり。

大公スヰキアトボルクの御世も亦た慘憺たる争奪の渦中に埋没せられたるを觀  
 るのみ。即ちスヰキアトスラフは前きにチェルニゴフの公國を畧し、尙ほトムト  
 ラカン、ムロム及びリアザン等の地を併合したりしかば、スヰキアトボルクの父イ



シアストラフ及びウセツオロッド等は、皆な之を憎み、遂に其死後に及び、併呑者の群兒等を撃破して、其父が侵奪したるチエルニコフの公國を強奪し、當時寡慾の聞へありしウラヂミル、モノマクすら其分取物の幾分を獲得したりしを以て、スヅキアトボルクの御世に至り、スヅキアトストラフの群兒等は臥薪嘗膽の幾辛酸を嘗め必ず其恨を報ぜんと欲し、群兒の中長子オレク、スヅキアトストラフキチ(Oleg Sviatoslavich)の如きは、驚悍勇猛にして、夙に十一世紀の傑物として知られたる者なりしだけ、劃策經營總べての手段を盡くし、遂に夫の獐狂猖獗なるボロヴツイの種族までも之を招徠して己れが爪牙と爲し、殘忍酷薄なる復讐を露西亞人の上に敢てして甘心せんと欲したりしかば、ウラヂミル、モノマクは痛く此不幸を慨し、其嘗てチエルニコフの地を分割したる事を悔ゆる旨、書を草して先づオレクに通告し、更らに場をドニールバルの河岸、ルーベツチニトして各公國の主宰者を集めたる會議を開き、内亂の一日も早く平定せられざるべからざることを論じ、若し尙ほ紛擾を極めて内訌の底止せざるあれば、各種の蠻族、殊にボロヴツイの如き者は乘じて以て非望を抱き、鼎の輕重を問ふべきは勿論、果ては全露西亞を擧げて虎狼の餌に委するべし

に至らざんばあらずと警告したり。されば此會議の結果として、オレクはチエルニコフの公國を回復して、再び其領土と爲し、キーフの大公及びウラヂミル、モノマクは彼れと連衡して蠻族ボロヴツイに對抗することを約し、出席各主宰者も亦た皆な十字架に接吻して、山河砥帶長へに渝らざる誓約を結び、『今より後ち、露西亞は我等共同の國なるへし、我等の同胞中將來我等共同の敵と爲りし者あれば、何人も其討滅に全力を竭くすべし』との誓言を爲して散會したり。

是れより先きヴォルヒニアの公國に於ても亦た主宰者ダヴィット(David)は久しく其甥ヴァシルコ及びウオロダル(Vasilk and Volodar)等と干戈を交へつゝありしが、ルーベツチの會議は、一切の禍亂を杜絶する爲め、彼等の間に争に係れる土地も亦た最も公平に之が分配を議したりしに、何事ぞ、條約の批准未だ終らざるに先ち、ダツヅキッドは忽焉としてキーフの大公スヅキアトボルクの許に到り、ヴァシルコが彼れに對して不軌を謀りたる旨、其長廣舌を弄して誣告したりしかば、輕忽事を處し、平生の心術浮薄にして、表裡反覆頗る常なかりしスヅキアトボルクは、ルーベツチ條約が儼として彼れに存せるに管せず、豎子に註誤せられて、ヴァシルコ

を除かんとすの謀議を凝らし、ダツツ非ツドと協商して、或る宗教上の宴會を利用し、  
 ヴァシルコをキーフに誘致し、其到るに及んでは鐵鎖を以て之を縛し、不軌の次第  
 を告知する爲め、キーフの市民及び貴族等を召集したるに、貴族等は皆な異口同音  
 に、『我が君よ、若しヴァシルコが眞個に有罪なりとすれば、彼れは明かに死を償ひ  
 すべし、然れども萬一事之に反し、彼れが嫌疑は一にダツツ非ツドの讒誣に出でたる  
 ものなりとすれば、神は必ず彼れの爲めに冤を雪ぐるべし』と言ひたりしかば、ス  
 ヴ非アトボルクも中心大に安んぜざる所ありけん、遂に鐵鎖に繋かれたる一人をダ  
 ツツ非ツドに與へたりしに、冷酷兇惡なるダツツ非ツドは此時無殘にも、其兩眼を  
 抉出して快と呼びたりき。

斯くて惡事千里を走るの譬に漏れず、此の慘報は忽ちにして遠近に傳はりたりし  
 加ば、ルーベツテ同盟の盟主たるウラヂミル、モノマクはスヴ非アトボルクの違約  
 を憤ること甚だしく、遂にチエルニコフのオレグと合同し、彼れに對して問罪の師  
 を起したりしに、キーフの民衆及び僧侶等は、再び其間に調停斡旋して、戰爭の破裂  
 を未然に防ぎ、スヴ非アトボルクも亦た先非を悔るダツツ非ツドに約せし所を

破棄して、ヴァシルコの復讐者等に加盟せざるを得ざるに至りたりしが、茲にダツ  
 ツ非ツドは總ての者を敵として最も勇悍に防戦し、對抗數次、未だ屈服の色を示さ  
 りしも、ウラヂミル、モノマクの首唱に係かる第二の會議は、此後忽ちドニール  
 左岸ツ非チエツオ (Vitelhevo) の市に開かれ、出席者一同合意の上ダツツ非ツドは  
 其の非行の辭として、ツオルヒニアに於けるウラヂミルの公國を奪はれたり。所  
 謂ツ非チエツオの市なるものは、尙ほ露西亞に於て當日の面影を觀るを得べし  
 と云ふ。

スヴ非アトボルクが死歿せる後は、キーフの民衆は擧げて皆なウラヂミル、モノマ  
 クを得て其大公と爲さんと欲したり。然どもウラヂミル、モノマクは、固辭して聽  
 かず、『我にして此名譽ある主權者の位に上れば、故障を提起して同一の位地を争ふ  
 べき者一にして足らず、現にオレグの如きも恐らく其一人なるべし、我が固辭して  
 受けざるは露西亞の安寧靜謐を欲するが爲めなり』と言ひつゝありしが、當時偶々  
 キーフの市に暴徒起り、スヴ非アトボルクが其生存中財政上の機關と爲したりし  
 猶太人を掠奪し、物情頗る騒然として、形勢甚だ憂ふべきものありしかば、民衆がウ

ラヂミル、モノマクに大公の位に上りて、人心を危懼の際に安んぜんと思請するものは益々急と爲り、謙讓を專一として平生恬退の風ありし彼れも最早や固辭するに由なく、遂に其請を容れて、キーフの主人公と爲れり、斯くて紀元千百十三年より千百二十四年に至る間は、彼れはキーフの民家の爲めに多く善政嘉謨を講じ、且つ外に對して大に其武を輝がし、頻りにボロツツイ、ヘチエチマ、トルキ(Tolki)及びチエルケヌイ(Tcherkesui)等の各種族を撃破りたり。

現下試みに杖をモスコウ(Moscow)の博物館に曳て一瞥せよ。嘗て希臘皇帝アレキシス、コムテナス(Alexis Comnenus)がウラヂミル、モノマクに送りたりと稱せらるゝ陶製の盃を觀るべし。事實の眞偽は今遽かに之を判ずべからざるも彼れがアレキシス、コムテナスと干戈を交へたりとの傳説は、尙ほ露西亞人の口碑に温存する所、一個の古盃が無數の觀客をして佇徬俯仰坐るに懷舊の念に堪へざらしむるもの亦た、ずしも其故なきにあらず。尤も或る人の説に據れば『此盃は眞個にウラヂミルに屬せし物にあらずして之を爾かく言ひ傲せしは全く後世露西亞の皇帝が政畧上其祖先の威武を擴張誇大ならしむるが爲めに故らに這般の説を作

爲したるなり』と、未だ孰れか是なるを知らず。

世に傳ふるウラヂミル、モノマクの遺訓なるものは其子孫の爲めに周到懇篤なる規箴を與へたる者なり。然れども誦讀一過、如何にも千古の奇文なりと思はる、今其概要を抄出すれば實に左の如し。

汝の生活を永久ならしむるものは斷食にあらず、隱遁にあらず、又た僧的起居にあらず、只だ善行なり。貧困者は之を賑恤し必ず忘却する勿れ。財貨を地中に埋むるを止めよ、何となれば是れ明かに耶蘇の教旨に反すればなり。金錢を蓄積、之を地中に埋没するは當時露西亞に固有なる習慣なりしなり 鰥寡孤獨を厚遇せよ、無罪なると有罪なるとを問はず、何人も之を殺す勿れ。汝の妻を愛せ、然れども之をして汝を凌ぐに至らしむる勿れ。汝が有益なる事を知り得たる際には之を記憶に存し、又た常に新智識を求むる所あれ。予が父は足管て宮廷の外に出でざりしに能く五種の外國語を操りたり。予は二十三度の戦争を爲し、ボロツツイと十九度の講和條約を結び、少くとも其酋長の百人を擒にし、後ち之を放還し、外に二百餘人を河中に溺死せしめたり。何人も予より速かに旅行する者あらざるべし。予は早朝を

以てチユルニゴフを發すれば夕刻前には優にキーフに着すべし。時としては予は深林に於て數頭の野馬を捉らへ予自身の手を以て之を縛したり。如何に屢々予が水牛の爲めに馬鞍より地上に投せられしか、鹿に角もて打たれしか猪に脚もて踏まれしか。予は如何に多く予が幼時に時て落馬せしか、予は予が頭を破りたり予が腕及び足を傷けたり。然れども總べての場合に於て神は常に予を保護せられたり。

ウラヂミル、モノマクは又たスツアルの公國に於てスラツ種族の移殖を完成し、彼れの名と同一の名を有する都府を創設したりしが此地は漸次發達して從來殆んど露西亞勢力の中心と爲り、歴史上著名の區寰として知らるゝに至りぬ。

ウラヂミル、モノマクは多くの子を有したりき。而して皇子イユーリー、ドルゴルキ (Iuri Dolgoruki) はスツアル及びモスコイを領し、皇子ミスチスラフ (Mstislaf) はガリツナ (Galitch) 及びキーフを領せしが、此兩派は常に軋轢して相調和せず。ウラヂミル、モノマクの死後に於ても、是等兩派の争鬪より露西亞は再び兵亂の巷と化し其結果遂にキーフの衰滅を見るに至りたり。詳言すればミスチスラフの子イ

シアスラフ (Isiaslaf) は紀元千四百四十六年に於てキーフ市民の迎ふる所となり、大公の位に上りたりしが、此時イユーリー、ドルゴルキはキーフの主權者たるべき者は自己の外他に適當なる者なしと主張し、叔姪遂に干戈を執て相見へしも、イシアスラフは中途にして暴死したりしかば、イユーリー、ドルゴルキは紀元千四百五十四年に於て同盟軍を應てキーフに侵入し大公の稱號を篡奪し、領土の分配を黨與の間に行ひしかば、所謂キーフの公國なるものは、此時既に事實の上に於て其存在を絶ちたるの觀ありき。况んや紀元千六十年に於てイユーリーの子アンドレイ、ボロニユフスキ (Andrei Bogoljubski) は更らに十一の公國を連衡して同盟軍を編成し、其子ミスチスラフ (Mstislaf) をして大軍に將として此地に攻め入らしめ、包圍三日、全く之を陥落したるをや、史家當時の慘況を記する者の言に曰く「露西亞に於ける都府の母と目せられたるキーフは、從來屢々敵に包圍せられ、攻撃せられ、其黄金の門を開放せざるを得ざりし事數次なりしかど、未だ曾て亂暴狼藉にも敵軍に闖入せられ、凌辱と掠奪とを擅まにせられたるとあらざりき。而して之あるは實に今日に始まる、其汚辱たる豈に鮮少なんや。觀よ三日包圍の後市内は皆に民家

のみならず、會堂も寺院も皆な一樣に破壊せられ、セントソファアアの寺院すら之を保存すると能はざりしにあらざや。昨日大厦高樓の都府、今日忽ち變じて荒煙冷雨の廢場と所る、浩歎に勝ゆべけんや」と然れどもキーフとモスコイの軋轢は、一方より言へば、其實舊露西亞と新露西亞との衝突なりき。ドニペールの河岸に基礎を定めて今日まで繁榮を極めつゝありしキーフは、最早や其全盛期を經過し、久しく兵馬紛亂の衝に當りたる末、今は既に衰頹の悲境に沈淪せざるべからざる運命に遭遇し、之と同時にウラヂミル、モノマクが偶然にも地をヴォルガ河畔に相して經營したるモスコイは、一日勃興の隆運に向ひ、其勢海盈ち潮湧きて到底前路を防止し難く、疑々として優に露西亞に於ける新たなる勢力の中心と爲りしなり。人間の興亡、名場の盛衰、觀來れば一に皆な天意にあらざと云ふことなし。

## 第七章

### キーフ没落後の露西亞

自千六百六十九年  
至千二百十四年

キーフ没落の後、蒙古種族侵入の前年所約五十年間は、露西亞の歴史は重もに二公

國及び一共和國の事に關するを觀る、今左に項を分て之を略説すべし。

一、スズアルの公國 此公國の創設者は、既記の如く、イユイリ、ドルゴルキなりしも、彼れは其畢生の精力を竭くして、キーフの位を争ひし者なれば、スズアルに於ける眞成の主宰者を求むれば、彼れよりも、寧ろ彼れの子、アンドレイ、ボゴリユフスキを推さざるべからず。アンドレイ、ボゴリユフスキは從來露西亞の歴史中に於て見るを得たりし諸王公とは頗る其撰を異にしたる人。彼れは剛毅果斷にして、大志あり、二六時中種々の籌策を工風して、竟に靜止し難く、其計劃する所を問へば飽くまで領土の擴大にして、平生懐に忘るゝ能はざりしものは、全露西亞に於ける唯一の獨裁的支配者たる一事なりしかば、史家は彼れを以て實に後來モスコイに於ける露西亞皇帝の好模範を貽したる者なりと信ぜり。彼れが市の自由を束縛せんとて、百方盡力したる事、貴族を壓制して、器ぼ意に介せざりし事及び他の公國の王公等に對して、傲岸無禮なりし事は、異日モスコイの大公等が、其全權を得んが爲め、勢力の樹立を確かめんが爲め、十五六世紀の頃に於て敢てせし、傍若無人の舉動を十二世紀の頃に於て既に髣髴せしなり。然れども

時は尙ほ彼れの爲めに利ならざりき、彼れは其心期を成就するに力未だ足らずして、スズアルは彼れが夢想せし如く、全露西亞を支配する中心と爲らざりしのみならず、彼れは其雄圖未だ緒に就くに及ばずして、壓制暴戻を極めたる結果、忽ち衆怨の府と爲り、一朝暗殺の兇刃に斃れて、萬事皆な休しぬ、是れ紀元千百七十四年の事なりき。

アシドレーの死後は繼承の争再び起り、干戈暫らく相交りしが、終局彼れの弟ミケール(Mikhail)及びツセツオロッド(Yasvlood)は前後相繼で位に上りしも、ツセツオロッドの死後は其三子之間に争闘復び起り、最後に長子コンスタンチン(Konstantin)はスズアル公國の主人公と爲り、紀元千二百十七年を以て死没し、其弟イユトリイ(Iuri)は茲に始めて位に上るを得たり。

二ガリツチの公國 是れコルヴァツ或はホワイト、シロツ(Khorvats or White Kroats)種族の住せし處にして、夫のヴァリアツの諸王公等が征服したる後ちも、依然として其舊慣と特質とを保存し、今も尙ほ純然たるスラヴ種族の面目を躍如たらしめ、此公國に主宰たる王公は、民衆の會議に依りて公撰せられ、單に其同意を得

て位に在るのみなりしが、會議の牛耳を執るべき貴族、換言すれば富豪等は、次第に波蘭及び匈牙利の流風に感化せられ、相結合して社會的階級を設くるの必要を認め、遂に平民の上に卓立して政治の權を左右し得べき一團體を形成し、鞏固にして圓滿なる貴族政治を創始したり。斯くてイアロスラフ、オスモムイスル(Borislaf Osmunisl)がアナスタシア(Anastasia)と呼ばれたる一婦人を寵愛し、正妻と定りたるオルガ(Olga)を顧みざるに及んでは貴族等は、彼れに對して其亂行敗徳を詰責し、アナスタシアを捕へて生きながら之を焚き、オスモムイスルに迫りてアナスタシアの子を放逐し、再びオルガの子ツラヂミル(Vladimir)を正當の繼承者と認めざるを得ざらしめたり。然れども貴族等の豫期せし所は、全く畫餅に歸したり。即ちツラヂミルは恩に感じ義に激し、其即位後は誓て貴族等の爲めに鞠躬國務に瘁盡すべしと思ひきや、彼れは位に上るや否や、放肆蕩佚を事とし、左右の諫を聽かず、貴族の妻女にして、姿色ある者は、誰れ彼れの別なく之を凌辱し、且つ大酒の癖ありて精神常に恍惚として到底爲政の任に堪へざりしかば、貴族等は再び彼れに迫り、其最も寵遇せる一婦人を求め、之を罰して典刑を正し、以

て甘心せんと欲したりしかば、彼れは事の急なるを觀て、忽ち其家族并に珍寶を擁して、匈牙利に逃れたり。斯くてウラヂミルは今既に客地に奔竄したりしかば、ガリツチは一日も主人公なかるべからず、否なウラヂミルの如き蕩子癡漢が跡をガリツチの公國に絶ちて復た出現せざる事は、貴族等の窮かに待ち設けつゝありし所なれば、彼等は猶豫なくウオルヒニアのローマン(Roman)を迎へて其新たなる主宰者と爲さんと欲し、彼れに向て其意を通じたり。されど此時懐に入れる鷓鴣を以てウラヂミルを視たる匈牙利の王ベラ(Bela)は決して黙して止む者にあらず。彼れは師を起してガリツチに侵入し、ウラヂミルの爲めに其復位を圖りたり。但だ夫れ危急の際、驟雲覆雨人心の變じ易きは古今の通患にして似て非なる義、俠心は危険の最も甚しき者なれば、當初ウラヂミルの爲めに滿腔の同情を表し、其全力を假して蒙塵の辱を雪がんと約したるベラも、一たびガリツチに侵入し、山川の美なる、産物の饒なる、其優に一方の樂土たるに適せることを知悉するに及んでは、鬱勃たる野心倏忽として胸底に起り、自ら取て之を領せんと欲し、昨日の友侶今日の仇敵と化し、憐むべきウラヂミルは驟て虐待薄遇

の愛き目を見たるのみならず、遂に幽閉せられ、ベラはガリツチに對して公然己れが垂涎の念に堪へざる旨を發表したり。さればガリツチの貴族等は何とて驚愕憤怒せざるべき。彼等が敵愾心は今は一にベラに集中せられ、其結果として彼等はウラヂミルを召喚することに決し、偶其幽閉の厄を脱出したることを聞き、急に之を迎へて再びガリツチの主人公たらしめたり。斯くてウラヂミルは殆んど豫期せざりし事情の發生せし爲め、再び主宰者の位地に上るを得たりしが、茲に最も失望の躰に見へしは夫のヴォルヒニアのローマンなりき。彼れ亦た到底黙々として止むべき漢子にあらず。乃ちウラヂミルの死後、彼れは波蘭人を引て援助と爲し、波蘭の王カシミル、ゼツヤスト(Kasimir the Just)が彼れに貸與したる精悍決死の軍隊と共に戰場の全勝を制し、能くガリツチに打勝ちたる後、從來の主宰者等が單に貴族の同意を得て位に在りしとは全然其趣を異にし、獨裁的主宰者として新たに其主人公と爲れり、彼れが如何なる人物なりしやは今日詳細に之を知悉すること能はざるも、當時の歴史家中には、彼れが功業を贊し、彼れを呼ぶに『大王』の名を以てする者すらありたりしと云へば、要する

に彼れも亦た鐵中の錚々たるを失はざる者なりしならん。彼れの死後は、其長子ダニエル(Daniel)代て位に上りしが、國內の騷亂絶ゆることなかりしのみならず、蒙古種族の侵入甚しく、主人公たるダニエルは英主として謳歌せらるゝを妨げざりしも、ガリツチの國運は業に既に衰頽に赴き、大勢の非なる所謂大厦の傾くは一木の能く支ふる所にあらざるの觀あり。天意の在る所到底人力を以て抵抗すべからずして、彼れは遂に胸中若干の企劃ありしに管せず、一も成就する所なく、憤慨憂鬱の裡に其一生を送り。而してガリツチの公國は第十四世紀の頃にて、波蘭の王國に併吞せられき。

三、ノッゴロツドの共和國 此地は政治に、商業に、太古より露西亞の北西部に於ける中樞なりしが、地勢の遠僻なるは却て著大の利益を與へ、露西亞の他の方面に於ては、キープ大公國の主權を掌握せんとて、諸公國の王公等が、一起一仆、長へに其騷亂を絶たざりし間に、一方に於て此地は西部歐羅巴を控へたる處に、居然別寰を形成せるの概あり。自ら進んで野心満腹たる諸公國の王公等に求むる所なかりしは勿論、王公等も亦た其遠僻の地に在りしを以て、之を如何ともする能

はず。一國の主權は全くヴェーチ(Vetich)と名づけられたる市民の會議に存し、主宰たるべき人物を選擇するに關しても、條件の輕重、任限の短長等、一に皆な其決定する所にして、既に一たび之を選擇したる後ちと雖も、若し其人を得ざりし事を發見すれば、存廢、易置悉く其意に任かせ、他の諸公國と均しく主宰たるべき人物は則ち之ありしも、彼れは必ずしもノッゴロツドを統括支配する者にあらずりしかば、其位地の他の諸公國の王公等と比して、大に懸隔せるは言ふまでもなく、勢望も亦隨て微弱なりし故、其壓制暴戻の行爲を取てするが如きは、本來爲し得ざる所なりしなり。蓋し太古夫のヴァリアマのルリクがスラヴ等の囑託に應じ、其黨與を率ゐてバルチック海を横斷し、以て此地に移住せし際、此地の人口は既に十萬を超へたりと云へば、勢力の偉大にして侮るべからざる到底當時の王公が其壓迫の支配の下に服従せしむる能はざりしや明白なり。此地紀元千二百二十四年に至り、無前の飢饉と祝融の禍とに罹り、大に衰頽の色を現はしたり。



第八章 蒙古の侵入 皇二十二年二十四年

十二世紀より十三世紀に至る間に於て、露西亞の歴史に就て慘の最も慘なる出来事を擧ぐれば、言ふまでもなく蒙古種族の侵入なりき。此出来事が當時は勿論、後世に至るまで如何に露西亞の民人を震懼せしめたるかは、露西亞の史家が書冊に明記して後世に傳へたるどころに依りて明かなり、史家乃ち記載すらく「吾人は重大なる罪過を犯して神の機嫌を損じたるが爲め、當時一種の蠻族は、潮の如き勢を以つて吾人の同胞を襲ひ來り。何人も彼等の素性を知らざりき。彼等は何處より來りて、彼等は如何の宗教をか有せし、何人も之れを詳かにするものあらざりき。彼等は天より降りしか、地より湧きしか、恐らくは神が罪過に穢れたる吾人の同胞を懲戒する爲め、故らに此の不可思議なる種族を使喚し、無前の虐殺暴奪を敢てせしめしならん」と。然り蒙古種族の侵入は、スラヴ種族の爲めに實に未曾有の不幸なりき。然れども當時露西亞が新らしき種族の爲めに侵略の奇禍を蒙りた

るものは、獨り蒙古の場合に限らず、彼れは北に於いて、西に於いて、皆な同一の厄に遭遇し、日耳曼人と衝突し、リザニア人(Lithuanian)と觸接したり。されば今蒙古種族の來寇を叙述するに當り、是等の種族に關しても亦た聊か記するところなかるべからず。(リザニア人の打勝に關しては次章に於いて記するところ即ち是れなり)。

露西亞の諸王公は一樣に皆なバルチック海の濱に於けるチニード或はレット(Tor-hud or Lett)種族を目して其臣僕と爲し、彼等は貢物を献納すべき義務ある者なりと信じてつゝありしが、諸王公等が何等の緣由に據りて這般の權利を主張しつゝありしや、今固より之を釋るぬに由なきも、夫のウラヂミル、モノマクの子ミスチスラフが此種族を攻撃してオヂンペー(Odenpesh)の市を略取したる事ポロトスク公國の王公等がドゥハナ(Dvina)河の岸に於けるゲルシク(Gersike)コーケンハーセン(Kokenhansen)等の堡砦を陥落して、威名遠くソレューダ(Thoreida)アスチユラテン(Ascheniden)等に及びたる事は確かに事實なりとす。然るにバルチック海の濱は、其後次第に貿易を營める日耳曼商人の來往と共に、其宣教師等も亦た盛んに

往還する地と化し、ドゥッホナ河岸一帯の地は漸次に日耳曼商人の足跡を印せると同時に、日耳曼宣教師等も亦た其布教の業に執掌する舞臺と爲り、宣教師メーッハルト (Meinhart) の如きは紀元千百八十七年に於てウエツキニカル (Uexkull) に堡砦を起し、以て其新たに創設した寺院の守護に供し、威權赫灼一時其隆盛を極めしのみならず、次第に兵力を以て近隣の地を畧取したりしかば、是れより後には、此地に於ける勇悍なる種族等も、漸次其自由を失ひ、領土を失ひ、若し雌伏に甘んじて爲すなきに終れば、運命の歸着する所は逆じめ知り難きにあらずしかば、彼等特にリッヴォニア人等は驟起して宣教師に抗し、干戈頻りに交りて紛擾絶へざりしが、最後にリッヴォニア人等は宣教師等を疾悪するの餘、嘗て其説教を謹聽して歸依信嚮の念を固くしたる耶蘇教を棄て、元と其崇拜景仰せし偶像教に復歸し、既に洗禮を受けたる輩は、今更ら其心に染まざる神の法式に従ふべき謂れなしとて、身を挺んで自らドゥッホナの河に投じ、詔して以て一度其受けたる洗禮を再び洗滌し去るなりと稱せり。而して此結果は如何、羅馬法王インノセント三世 (Innocent the Third) は彼等に對して十字軍を起し、紀元千百九十八年より千二百二十九年に至るまで

付正 (Bishop) たりしベッススホーデンのアルムルト (Albert of Buxhoeveden) は二十三艘の艦隊を率ゐてドゥッホナ河を遡り、大に土着の種族等を威壓し、遂にリガ (Riga) の市を創設し、紀元千二百年に於て之れを以て其の首府と定めたり。否な、アルムルトが此の地に於て經營せしものは、嘗て此の如きに至らず、彼れは翌年に於て更らに『基督軍の同胞』と名けられたる帶劍せる一隊の武士 (Knights) を編成し、白色の外套を穿ち、双肩に赤十字の徽號を付し、多くはウエストファリア (Westphalia) サキソニー (Saxony) の土人より成り、ゾッノード、ヴィノールバッチ (Vino de Rohrbach) なる者、其の將校と爲りしが、所謂リッヴォニア武士 (Livonian Knight) とは實に此の一隊を意味したるものにして、アルムルトはリッヴォニアに於ける最初の支配者なりしなり。

ポロトスクの王公等は微弱にして爲すあるに足らざりき。ノヴォゴロッドは内亂紛起して未だ外寇を問ふに暇あらざりき。而して露西亞の他の方面を顧みれば、發達の程度尙ほ頗る幼稚にして、未だ國民てふ觀念あらざりき。夫れ何を以て戮力同心奮て外寇に當たるあらんや、斯くて四圍の事情は總べて昔な帶劍せるリッヴォ

ニア武士の成功を容易ならしむる所以と爲れり。況んや彼等は武器に於いて、兵略に於いて、遙かに各種族よりも優勝の位地を占めたるをや。乃ち彼等はドゥルナ河畔のリッオニア人及びセミガル人 (Semigall) 等と頻りに交戦し或は北に或は南に次第に其戦闘線を擴張し、以つて縦横無盡に驅馳せしが、若し各種族にして強めて洗禮を嫌惡し、基督教を奉ずる事を肯んぜざれば、彼等は直ちに劍と火とを以て其頭に加へんと脅迫し。各種族にして既に降るあらん乎、彼等は人質を強要し、其地に堡砦を築設し、以て萬一の變に備へたり。而して其畧取したる領土に關しては、日耳曼人は猶豫なく之をリッオニア武士と大僧正 (Archbishop) との間に分配したり。

以上はリッオニア武士の發達に關する歴史の主要なるが、紀元千二百二十五年の頃に際し、普魯西のリザニア人中にも亦た之と酷似せるチエートニック派 (Euton-ic Order) と稱する一種の武士を生じ、威武を四隣に輝やがしたる未ソルン (Thorn) マーレンブルグ (Marienburg) エルビンク (Elbing) 及びロニッツスバルグ (Königsburg) 等の各市を開設したりしが、其相酷似せるは即ち相親善なる所以にして、此二者は黒

十字と赤十字とを聯結し、紀元千二百三十七年に至り遂に合體して一團となりしかば、さらぬだにバルチック海の濱に於ける露西亞の各種族に取りて恐るべき大敵なりしリッオニア武士は、更らに一層其勢力を増し、各種族に向て苛重の誅求を爲し、最も傍若無人の舉動を敢てしたり。

露西亞の史家が、天より降りしか、地より湧きしか、誠に其素性來歴の知れ難き一種不可思議の侵入者なりしと後世まで嘆稱して措かざりし蒙古種族、換言すれば韃靼種族は、元來亞爾泰山の麓に生育せし一蠻族にして、從來支那に對して其侵入を企てしことありしが、彼地に關する記録は概ね闕如として、今其詳細を求め難きも十三世紀に於ける某記者は記載すらく「彼等は牧畜を業とし、水草を逐ふて各處に轉移する外、一も爲すべき事なく、城壁を建築し都府を創設する意志なく、文字を解せず、誓契を有せず。幼時より野馬に跨り、弓を執りて、走れる獸、飛べる鳥を射ることに習ひ、戦争と奪掠とは其畢生の能事にして、莊嚴鄭重なる宗教上の儀式等は一も存することなく、裁判制度の如き者も無論之を有せず、上は王公の貴より下は下僕の卑に至るまで、一に家畜野獸の肉を食し、其皮は直ちに衣服の料と爲り、一般の

好尚は言ふまでもなく、勇武剽悍の氣象にして、老を敬し幼を扶くるの精神は全然  
 缺乏し、父死すれば其の多妻主義なるだけに、妙齡の妻は再び子に嫁する風なりし  
 と。而して更らに又た同記者の記事に據りて、戰場に於ける彼等が摸稜を叙すれ  
 ば『彼等にして若し一市を陥落せんと欲せん乎、彼等は先づ電光石火の勢を以て其  
 近隣の村落を襲ひ、其各部將等は互に十人若くは十二人の敵人を捕獲し、其捕虜を  
 して或は木材或は石材、或は他の物を目的地に運搬せしめ、時としては柵を結ひ、時  
 としては濠を鑿ち、努力百般、必ず其目的を達せざれば休せず。而して其之を爲す  
 に當りてや、彼等は五千、六千乃至一萬の兵をも犠牲に供することを厭はず。既に  
 陥落したる後は、市民は總へて皆な虐殺すべき者と定め、其長幼貴賤賢愚の別を問  
 はざりし』云々。

斯くて野獸よりも猛惡なる是れ等の種族を統一して、紀元千五百五十四年より千二  
 百二十七年に至るまで、之れを支配したるものは夫の有名なるテムチン或はゲン  
 キスカン (Temuchin or Genghis Khan) にして、彼れは各種族の王公を會して自から  
 皇帝の位に上ることを宣言し、『天に二日なきが如く、地にも亦た二主あるべからざ

れば、自今我れは總べての者の君主たるべし』と告げ、總がて其の大軍を率ゐて、滿洲  
 の野に攻め入り、咄嗟之に打勝ち、鐵騎の向ふ所是れより敵する者なく、土耳其斯  
 坦、ボツカラ (Bokhara) を略し、更らに西部亞細亞に入りて、其の侵畧を逞くし、地を有  
 すること殆んどクリミア (Crimea) の邊境に達したり。而して露西亞の諸王公が偶  
 と彼れの軍隊と相見ゆるに至りしは、實に此ボツカラ侵畧の時にして、當時彼れの  
 將校はボツカラに到る途次、無数の土耳其人を征服し、裏海の南岸に由りてゼオル  
 ヌン (Georgia) 及び高加索を襲ひ、更らに露西亞の南境に於て、夫のボロツツイの種族  
 と衝突したるに、ボロツツイは其從來屢々露西亞に寇する所ありしに關せず、蹶て  
 露西亞の諸王公に援助を請ひ、奇矯飄突にして、一種の功名心に驅られたる諸王公  
 が、未だ深思熟慮するに及ばずして立ち所に其請を容れ、身を以て自ら争鬪の渦中  
 に投じたるに因るなり。乃ち觀來れば、韃靼種族の侵入は、彼等が亞細亞の天地に  
 於て無比の戰勝を博し、餘威に乗じて狼りに長驅したる結果なりしとするも、抑も  
 亦た露西亞諸王公の輕舉妄動、自から其奇禍を買ひたるものも、與りて大に力なく  
 んばあらず。

ボロツツイが露西亞の諸公王に援助を求めたる口實は極めて單簡なるものなりき、曰く『韃靼種族は今日我等の國を奪はんとせり、彼等にして若し之れを奪ひ了すれば、明日必ず汝等の國を奪はん、汝等にして若し果して社稷の覆滅を欲せざるあれば、須らく今に及んで應分の援助を與へ、以て我等の領土を保護せざるべからず』と、斯くてガリツチの主宰者を始めとし、ヴォルニア、キーフ、チエルニコツフ、スモレンスク等の各王公は、皆々請に應じて蹶起したり。ドニールの河岸は時ならずして人馬屯集の區と爲りぬ。各王公は各々其の軍容を此の處に觀め、して意氣軒昂、直ちに蠻族を壓殺せんのみと叫びぬ。然れども亞細亞の野に連戰連勝して、球上復た恐るゝに足る者なしと打算したる韃靼種族は、争でか此くの如き軍容に畏縮して、逡巡遲疑すべき。彼等は傲然として使節を派し、旨を傳へて曰く、『汝等は早計に事を構へて、後日悔ゆる所ある莫れ、我等は神の託宣に依り、醜類ボロツツイを勦滅する爲め、遠道此に來れり、元と汝等と仇敵の關係あるにあらず、汝等にして手を斂め、敢て或は我等の尊嚴を冒瀆するなければ、我等も亦た敢て汝等に加ふる所なかるべし』と。此無禮なる使節に接したる露西亞人は、果して如何の舉動にか出

でたる。彼等は一時の激怒を制するに由なく、輕卒に使節を捕へて之を戮し、咄嗟軍を進めてアソフ海に注入するカルカ(Kalka)河の畔に韃靼種族の軍を攻撃したり、然れども此時露西亞軍は之に將帥たる諸王公が、互に功を争ふて統一を缺きたるが爲め、一敗地に塗れ、幸にして韃靼種族の兵刃に斃るゝことを免れたる者、僅かに全軍の十分の一に過ぎざりき。

其來るや遽然として迅雷耳を掩ふに暇なく、其去るや沓然として些の消息なく、人をして恰かも一場の悪夢に惱まされたるかの如き感あらしめたる者は、實に韃靼種族の侵入なりき、彼等は既に露西亞に侵入し、人を殺し、地を畧し、十二分の慘害を敢てしたる後、卒然として東に歸り、十三年の間は全く露西亞人に其形跡を認めしめざりしかば、健忘症なる露西亞人等は、復た恐ろしき記憶を喚起することなく、此間は例に依りて例の内亂を繰返へすの外、殆んど餘事なかりしが、天意果して人事と相關し、天變地妖皆な何物かの前兆ならざるはなしとすれば、此間の歴史は實に忌はしき現象を以て満たされぬ。即ち飢饉は頻りに到りたり、悪疫は盛んに流行したり。紀元千二百二十四年の慧星と云ひ、紀元千二百三十年の地震及び日蝕

と云ひ、慘憺たる光景は眼前總べての方面に現はれたり。鞑靼種族が十餘年間其消息を断ちしは、彼等が専ら支那の征服に力を用ゐたりしを以てなり。而かも此征服は今や漸く其緒に就き、彼等は餘力を分て露西亞の侵略を完成すべき地位に立てり。ゲンギスカンの子ウクグアイ或はオクタイ(Ugudai or Okhai)は其甥バドニイ(Batin)を以て西侵軍の總大將と爲し、紀元千二百三十七年に於て先づアルガリアの方面に攻め入り、火を放て其首府を焼き、住民を殺し、更らに進んでヴォルガ河の畔を掠め、リアザンの公國に使節を派して最も傲慢に其主宰者に言はしむる様「安危禍福の岐るゝ所は一に汝の決心如何に在り、若し危を去て安に就き、禍を轉じて福と爲し、汝及び汝の臣民の生命を全ふし、領土の滅絶を免れんとならば、速かに汝が有する財貨の十分の一を献じ、以て其他なきを表せよ」と。斯くてリアザンの主宰者は、鞑靼種族が今や再び猛虎の咆哮するが如く、其牙を鳴らし、其爪を磨き、求むる所若し聽かれざれば、轉瞬の間に復た又た其最も恐ろしき搏噬を逞くすべしと稔知せしも、未だ一矢をも酬ゆるに及ばずして甘んじて屈服するは断じて其爲し能はざる所なりしかば、彼れは毅然として使節に答ふらく「言

論は凡て無用なり、汝若し我が珍寶財貨を争はんと欲せば、只だ劍あるのみ」と。此くの如くにして、戦争は猶豫なく開始せられ、リアザン人等は少時能く抗戦せしも、固より鞑靼種族の敵手たるに足らざりしかば、忽ちにして市民は總べて殺戮せられ、都府は全く焼き拂はれたり。

リアザン既に陥る、次はスズアルなり。勝ち誇りたる鞑靼種族の軍隊は、廢至して直ちにモスコイを焼き、ウラヂミルを圍みたりしが、此時露西亞人等は既に彼等に抵抗すべき勇氣なく、自ら其運命の歸着する所を知り、彼等の鋒鏑に懼りて斃るか、否らざれば、其奴隸と爲りて驅使勞役に任ぜざるべからざるか、二者其一を出でざるべきを料り、寧ろ潔く相脣めて死を共にせんと誓ひ、老幼男女互に提携して某寺院に到り、鞑靼種族が吶喊して市内に闖入するに及んでは、既に火を放て自ら焚死したり。

此時までキープの大公國は、幸に侵入軍の奇禍を免れたりしが、纏がて其同一の運命に遭遇すべき順番は廻り來れり。ゲンギスカンの孫マンク(Mank)は他に率先して夙に此地を衝きたり。彼れがドニイバルの左岸より望みたる、大なるキープ

市の全景は如何に雄壯華美なりしか。即ち此地はヴラヂミル、モノマクの死後、嘗て一たび争亂の衝に當り、さしも宏壯なりし名場も、一時荒廢に歸して止みたりしが、今や大に其舊觀を復し、碧瓦朱甍、白色の牆壁と相映じ、ビザンチンの流を汲みたる技師等が、丹精を凝らして修飾したる尖塔は雲に聳へて一段の光彩を添へ、尙ほ金銀を鏤めたる無數の寺院ありて其間に點綴し、道がの蠻族等も、此光景を目睹しては誠に一驚を喫したり。然れども彼等が驚て以て其發達の顯著なりしを感ぜし一事は、未だ以て其侵略の念を制止するに足らざりき。乃ち彼等は之を陥しめらるゝに先だち、其管てリケザンに侵入したる際爲せしと同じく、最も倨傲なる媾和の條件をキープ人等に指示したるも、キープ人等は管に之に傾聽せざりしのみならず、斷然其派出したる使節を斬て大に決心する所あるの色を示したりしかば、マングの怒は殆んど其極に達し、急に狀を具してパトニイに詳報し、速かに『全露西亞の都府の母』を屠り了せんと促がせしを以て、報を得たるパトニイは瞬時も躊躇せず、直ちに其大軍を驅てキープに到り、木車の軋れる音、水牛、駱駝、馬の吼へ、叫び、嘶く聲等、其混雜と紛擾とは實に凄まじくも亦た怖ろしく、殘酷なる殺戮、奪掠は到る處

に行はれ。キープ人等は、ドミトリ(Dimitri)と名づけられなる勇悍なる一貴族に依りて援けられたるが、由來群羊は猛虎に敵すべくもあらずしかば、紀元千二百四十年に至り、キープ市は全く陥落したり。此時韃靼種族は最も殘忍なる行爲を敢てしたる者にして、當時キープに於ては古代の墳墓すら悉く發掘せられ、一も安全なるを得ざりしと云へり。

要するに露西亞に於ける韃靼種族の侵入は、都府を破壊し、民衆を屠戮し、鐵騎の蹂躪する處、禍害の窮極する所を知らざりしが、獨りノヴゴロドの共和國は、此間に介在し、當時英名ありしアレキサンデル、ネフスキ(Alexander Nevski)の指導の下に、夙に退讓屈服の政略を取り、初めより彼等と相争はずして以て兵火の厄を免るゝを得たり。而して此くの如くにして殆んど露西亞の全部に打勝ちたる韃靼種族は、ヴオルガ河の一支流に傍ふてサライ(Saray)の城廓を建設し、西侵軍の總大將たりしパトニイは、其六萬の麾下と共に此處に府を開きたりき。

韃靼種族の侵入は、露西亞の歴史に於て、絶後は知らざれども、空前の出來事なりしは確かに然りとす。隨て此侵入が露西亞の將來に及ぼしたる影響如何は頗る肝

要なれば左に少しく叙する所あらんとす。

露西亞人と雖も木偶にはあらざりしなるべし。否な彼等は從來屢々進歩したる國民例へば希臘若くは瑞典の勇悍なる兵士等と戦ひたり。戰場に於ける驅馳操縦は彼等も亦た之を熟知せしならん。而かも今や韃靼種族の來襲に遭遇し、毫も支ゆること能はずして、殆んど其國の全部を擧げ、鐵騎の蹂躪に委棄したるは何ぞや。其失敗の餘りに激甚なりしを以て、後世の史家をして、往々疑を其間に挟まへしむるものあり。然れども彼等の爲めに辯護の勞を取る者は、其敗衄の理由を數て、實に次の數項に歸したり。

- 一、韃靼種族は強ち驍勇絶倫なりしにあらざるも、其數は頗る大にして、現にパトニイは其麾下に六萬の大衆を擁したり。されば露西亞人が敗北に歸して終りしは必ずしも戰の罪にあらざりして、全く衆寡敵せざりしなり。
- 二、韃靼種族の此大衆は、宛も一人の如く行動せり。之に反して露西亞人は、個々に分裂して進退したれば、其力は毫も一處に集合せざりき。
- 三、韃靼種族の軍隊は總べて騎兵より成り、一鞭の下に千騎萬騎潮の如き勢を以

て急進し來りしかば、露西亞の王公等は、縦ひ同盟軍を形成し、連衝して之に當らんとするの意志ありしも、其暇あらざりき。

四、パトニイの率ゐし六萬人は、言ふまでもなく、韃靼種族の軍隊は皆な精悍なる兵士なりしも、露西亞人に於ては、兵士たるべき者、貴族及び市民等に限り、其大部分を占めし農民等は、初めより戰爭に干與せざりき。

五、况んや韃靼種族は、亞細亞の野に連戰連勝して精神益々加はり、其露西亞に侵入せる際には、露西亞人等は既に其意氣込に於て一籌を輸したるをや。

其源因理由の如何を探索するは別問題なりとするも、兎に角露西亞人は、韃靼種族の侵入に對し、全然失敗に歸して止みたりしかば、一時其主權の羈絆に服従せざるを得ざるものありき。斯くて露西亞の王公等は、如何に千辛萬苦を経て沙漠の野を披ざり、ヴォルガ河の支流に傍へるパトニイの城郭は勿論、時としては支那の黒龍江畔に於けるケンギスカンの子孫等が宮廷までも、之を訪問して其參勤の禮を盡したる、如何に従順に其人頭税及び血税を納付したる。如何に神妙に宣戰、講和、踐祚、讓位等總べて皆な其許可を得たる。韃靼種族の使人が急速に露西亞の王公



等の上に及ぼしたる影響は爾かく顯著なりき。然れども其將來に於ける露西亞の制度の上に及ぼしたる影響も、亦た甚だ鮮少ならざる者ありて存す、即ち之を列擧すれば左の如し。

一、政体上に及ぼしたる影響　モスコイの王公等は、此後日、一日獨裁的君主たる傾向を有するに至りたりしが、之を觀て直ちにゲンキスカン等の流を汲みたるものなりと斷ずるは因より早計たるを免れずして、モスコイの專制臭味は、全く其源を君士坦丁堡に發し、ヒザンチン帝國の流風に感化せられたる結果なりしと雖も、露西亞が、唯我獨尊、臥榻の傍ら斷じて他人の軒聲を容れざる底のゲンキスカンの子孫等に服従し一時其支配を受くるに至りしは、大に此專制的觀念を發達生育せしむるに力ありき。さればワレーニス (Wallace) 氏の如きは『モスコイに於ける露西亞の皇帝は、政治上露西亞王公の系統にあらざりて、却てゲンキスカンの系統なりし』と言ひたる程なりき。

二、兵制上に及ぼしたる影響　露西亞人は無前の侵略を蒙りたるを以て、言ふべからざる慘禍に罹りたるも、彼等は其代りに兵制改善の好教科書を供給せら

れたり。鐵馬に跨りて自由自在に戰場に奔馳し而かも隊伍整頓旗幟鮮明一絲亂れずして能く全局の勝利を收めたる韃靼種族の兵士等は、彼等の爲めは實に得難き摸範を示し、彼等は後來韃靼種族の兵士等に私淑せるの餘其軍隊を改良して兵士の服裝より卒伍の編成に至るまで、總べて之を刷新し、優に西歐諸國の畏怖する所の者と爲りたり。

三、財政上應急の手段を教へたる事　從來人頭税などは露西亞人は毫も之を知らざりしが、韃靼種族が一たび之を賦課徴收するに及んでは、彼等も亦た其必要を認め、財政上一時の困難を救ふには、之に依頼すること免るべからざる所なりと信ぜり。

四、僧侶の勢力を助成せし事　韃靼種族は、勇悍犖猛にして粗暴雜駁なりしかど、彼等は野蠻なりしだけ一種の迷信者にして、敬神の念は一般に厚かりしかば、露西亞人等も其羈絆の下に服従するに隨ひ、知らず識らず彼等に感化せられ盛んに其寺院を起し、僧侶の富と勢力とは、後來益々増進するを觀たり。

第九章 西部露西亞の結合 自千四百三十四年

リザニア人が西部露西亞の地を侵襲したる事は、前章の劈頭に於て既に述べたる所なりしが、今此種族が其戦勝に依りて西部露西亞の結合を完成したる始末を按ずるに其順序左の如きを觀る。

一、ミンドヴォク (Mindvog) の時代 ミンドヴォクは十三世紀の初よりリザニアを統御し、彼れは蒙古種族の侵入に依りて、疲弊困憊を極めたる露西亞の諸公國を襲ひ、屢々大勝を博したる後、遂にクロツドノー (Grodno) ノヴォグロデク (Novogrodek) 等を奪取せしが、此時露西亞の王公中にも夫のアレキサンドル、ネアスキの如き、ダニエルの如き、敵手として寧ろ彼れに一籌を贏ち得たる人物ありしかば、彼れは遂に大に其目的を達する能はざりしのみならず、所謂リツオニア武士等も、亦た此時を以て彼れに對して反抗する色ありしを以て、彼れは四面皆な敵を受けたるかの如き感想を生じ、羅馬法王に哀訴して急にカド

リック教を奉じ、法王の力に依りて其勢力の失墜を防止せんと試みたりしが、一時危難の去るに及んでは、彼れは再びカドリック教を棄て、顧みず、且つ法王の黨與に對して抗戦したり。

二、ゲヂミン (Gedimin) の時代 ミンドヴォクの死後、一時紛擾を極めたるリザニアを平定して、其主權を確立したる者はゲヂミンにして、彼れは紀元千三百十五年より千三百四十年に至るまで、リザニアを統御し、其勢力を西部露西亞に扶植するに關しては、夙に開祖の名を博し、遂に韃靼種族の援助を得て、チエリニコツフ、ヴォルロニア等を奪し、リザニアの首府をヰキリア (Vilna) 河畔のヰキルナ (Vilna) に遷したり。

三、オルゲルド (Olgord) の時代 オルゲルドは、ゲヂミンの子にして、ゲヂミンの死後、彼れは其弟クスタット (Kestut) と共にリザニアを支配したりしが、雖がて彼れはノヴォロツドの共和國を屈服せしめ、是れより南征北伐總べての方面に於て成功し、ヰヰヂェフスキ (Vilejski) モヒレフ (Mohilef) ムリアンヌス (Mriansk) ノヴォロツド、セヰヘルヌキ (Novgorod-Severski) カメネツ (Kamenets) 及びボドリア

(Podolia)等を占領し、大に其領土を擴張したり。

七八

四、リザニアと波蘭との結合　　イアゲルロ或はイアグアイロ (Iagello or Jagiello) はオルゲルトの子にして、紀元千三百七十七年より千四百三十四年に至るまでリザニアを支配せしが、彼れは其位に上るや、直ちに詐謀を以て伯父クスタツドを惨殺し、且つ兄弟及び従兄弟等を逐ふて悉く之を國境外に遁走せしめ、後ち更らに國民の不同意なりしに管せず、波蘭の王ルイ (Louis) の女にして其唯一の遺れ形見なりし、ヘドツヰガ (Hedwiga) と結婚し、自ら稱して波蘭の王なりと稱し、遂に其首府を波蘭のクラッコイ (Cracow) に遷せしかば、さらぬだに彼れが行爲に憚焉たらざりしリザニア人は益々激昂し、嘗て惨殺の厄に遭遇したるクスタツトの子ツヰトツト (Vito) はリザニア人の軍に將として彼れを襲撃せんと企て、彼れが豫ねて其舊都ツヰルナに配付し置きたる波蘭の戍兵を塵殺し、遂に彼れをして紀元千三百九十五年に至り、自らリザニアをツヰトツトに割讓せざるを得ざらしめたり。

五、ツヰトツトの時代　　斯くてオルゲルトの遺圖を繼ぎ、リザニアの擴大を完成

したる者は實にツヰトツトなりき、彼れはスモレンスクを略取し、サライに於けるトクタムイシニコカン (The Khan Tokhtamish) が蒙古の皇帝テムル、カルトニイ (Timur Kurta) と相善からざりしを機とし、トクタムイシニコを援けて、テムルと開戦し、軍利あらざりしも敢て其威名を失墜せず、又た日耳曼人に對して有名なる征伐軍を起し、全然其勢力を滅絶し、紀元千四百三十年殆んど其百歳の壽を以て病没せるまで、胸中に鬱積せし功名心は曾て衰へざりしが、彼れの死後はさしも優勝の位地に有りしリザニアも國運次第に衰頽に赴き、遂に復び波蘭に合併せられ、其支配の下に置かるゝに至れり。

要するに此時に於ける西部露西亞は、最早や純粹無垢の露西亞にあらずして、其首府をツヰルナに有せる複雑なる一國と化し、露西亞人あり、リザニア人あり、波蘭人ありて之を形成し、以てモスコイを中樞として、他の一方に存在せる東部露西亞と兩々相對峙したる者なりと知るべし。

## 第十章 モスコイの發達

自千三百三十二年  
至千四百六十二年

西部露西亞がリザニアの威力の下に屈服して、歴然たる一版圖を形成せると同時に、他の一方を顧みれば、東部露西亞はモスコイを中樞として、別に一寰を成し、蒙古種族の下に在りしと雖も、漸次其發達を遂げ、異日全く其羈絆を擺脫して、次第に勢力の範圍を擴張し、一旦旺盛を極むるに及んでは、西部露西亞を合併し、遂に所謂露西亞帝國なる者を統一するに至れり。さればモスコイの王公等は、自個等の名譽として、千秋に誇耀すべきものは、實に此黯澹たる蒙古の羈絆時代に於て、夙に露西亞帝國の萌芽を胚胎し、漸次之を發育養成し、以て一旦世界の尊敬畏怖する者たらしめたるに在り。

モスコイは此くの如く露西亞の歴史に於て極めて重要な地なり、而かも其名は比較的遅く露西亞の歴史に現はれたり。即ち歴史が此地の起源に就て後世に傳ふる所は、只だ紀元千四百四十七年に於て、夫のイェーリイ、ドルゴルキが此地に來り、

土地の貴族ステフエン、キニッチョイ (Stephen Kutshko) なる者を殺し、偶然にも此地の形勝を占むる事を發見し、遂にモスコヴァ (Moskova) 河の畔にモスコイ市を創設したりと云ふに過ぎざるのみ。否、此地の起源に關して歴史の記事が爾かく闕如たるのみならず、其後年所約百年間は、此地が如何なる状態景況に於て在りしかに就ても、亦た歴史は杳として何等の消息なく、只だ僅かに紀元千二百三十七年に於て、蒙古種族の侵入ありたる事と、其後リザニア人と兵を交へてモスコイのミケイ (Mikhail) なる者が、此地に横死を遂げたる事とを記するのみ。乃ち知るモスコイの眞成の創設者は、夫のアレキサンドル、チツスキの子ダニエルなるを。ダニエルは實に此地を領土として、其父より與へられ、既に此地に來りたる後ちも、其甥某に屬せしヘリ、スラツル、ゼリスキ (Perislaw-Zajieski) の市を奪ひ、又たりアザン人に屬せるコロムナ (Kolonna) の地を略取して、大に其領域を歴大ならしめたる者にして、此事實は歴史も亦た明かに記載する所なれば、彼れは少くとも、東露西亞に於ける中樞としてのモスコイの創設者なるべく、其死後は、彼れは遺骨をモスコイに於けるセント、ミツチネル (Saint Michael) の寺院に葬られ、彼得大帝の時まで、此寺院は露

西亞に於ける歴代帝王の遺骨を埋藏する靈場と爲りき。而してダニエルの死後順次モスコーに君臨せし王公は實に左の人々なりき。

一、イェーリリー、ダニエロウヰチ (Iuri Danielovitch) ダニエルの子にして、紀元千三百三年より千三百二十五年に至る迄モスコーの主人公と爲り、其御世は人の土地を奪ひ人の生命を斷つ最も殘忍酷薄なる事項を以て滿たされたり。即ち詳言すれば、彼れはスモレンスクの主宰者よりモマヤイスク (Mojaisk) の地を奪し、スズアルのアンドレー、アレキサンドロウヰチ (Andrei Alexandrovitch) の死没せる後はトヴェル (Tver) のミキtail (Mikhail) を其空虚と爲りたる位を争ひ、サライのトクタクカン (The Khan Tokhta) がミケルを援けしを以て初めは失敗せしも幾ばくなくしてトクタクカンも亦た逝去したりしかば、彼れは其狡猾なる手腕を弄してトクタクカンの繼承者たるウスベクカン (The Khan Usbek) を籠絡し、局面一變して遂に能くミケルに對する全勝を制し、紀元千三百十九年を以て之を虐殺し、遂にモスコー、スズアル、ノヴゴロツドの全權を双手に掌握するに至れり。

二、イヴァン、カリタ (Ivan Kalita) 同じくダニエルの子にしてイェーリリー、ダニエロウヰチの弟なりしが、彼は紀元千三百二十八年より千三百四十一年に至るまでモスコーに君臨したり。而して彼れの在位の間に於ける重なる出來事は彼れが嘗て虐殺せられたるミケルの子アレキサンドル (Alexander) と相争ひし一事にして、イェーリリーがウスベクカンに覺へ目出たかりしと同じく、彼も亦た蒙古の全權者と相善かりしかば、彼れは機を見て其毒舌を奮ひ、アレキサンドルを讒誣する所以を計り、ウスベクカンに白して『異日蒙古の最大憂患たるべき者は實にアレキサンドルなり』と言ひたりしかば、蒙古の主權者は未だ事の實否を審かにするに及ばずして、直ちに不幸なるミケルの子を殺したり。而して形勢此くの如く、モスコーの主宰者は巧みにサライに於けるパトユイの子孫等を操縦して其成さんと欲する所を成し、パトユイの子孫は毫も事實の如何を問はずして、機會だにあれば露西亞の王公等を屠戮し、單に暴威を以て四方を壓服せんと務めたりしかば、他の露西亞の諸王公等も亦た皆なウスベクカン及びカリタを懼ること甚しく、心固より之に服従せるにあらざ

りしも、之を畏怖して措かざるの餘、互に競ふて款を通じ、以て其意を迎へん試みたる結果、カリタは日を逐ふて益々其權力を増大ならしめ、モスコイは優に他の諸公國を睥睨して一方に覇を稱するに至れり。否、獨り之のみならずカリタは此時ウラヂミルの外に、ウグリツチ (Uglitch) ガリツチ (Galitch) エロゼルスキ (Bielozelski) の地とコストロマ (Kostroma) ロストフ (Rostof) 等の附近に於ける一帯の地とを買収したりしかば、彼れは今や實にモスコイ并にウラヂミルの唯一なる主人公と爲れり。蓋しウラヂミルは彼れが疊きに三寸の舌を奮て非命の最後を遂げしめたるアレキサンドルに屬せし地なりしを以て其死後は變じて彼れに歸するに至りしなり。

斯くてカリタは急轉直下の勢を以てモスコイ並にウラヂミルの大公と爲りぬ。然れどもモスコイの彼れに於ける關係は決してウラヂミルの彼れに於ける關係の如く淺薄なるものにあらずして、彼れは本來世襲的繼承の權利に依りて當然此地に主宰者と爲り、蒙古主權者の意志を以てするも此地は妄りに彼れより之を褫奪すること能はざりしが、ウラヂミルに至りては其嘗てア

レキサンドルに屬せし地なりしだけ、蒙古主權者にして若し彼れの行動に慊焉たらざるものあらん乎、始め之を興へたるも忽ちにして之を奪ひ以て他人に與ふること全く其方寸に存し、其如何なる處分に出づるも、カリタは決して之が適法の措置たることを否認する能はざりしなり。而して此時に於けるウラヂミルの地位は、果して如何なりしやと言へば、縱ひ事實の上に於て露西亞の首府たる者はモスコイなりしにもせよ、ウラヂミルは、名義上依然として其舊格を存し、積威の約する所、幾分か尙ほ衆望を繋ぐに足るものありしかば、カリタは其全力を擧げてモスコイの盛大を計る事に執掌し、之をして事實上並に名義上露西亞を支配する唯一の中心たらしめんと欲したりしが、恰も好し當時ウラヂミル市の大僧正等は同市よりも寧ろモスコイを愛し、遂に此市に來り住せしかば、夫のキーフの没落後ウラヂミルに移りつゝありし露西亞宗教上の中樞も忽ち轉じてモスコイに移り、亦た是れモスコイの發達を幫助してカリタの素志を貫徹せしむる有力なる一原因と爲れり。

三、シメオン、ゼブラオド (Simeon the Proud) カリタの子にして紀元千三百四十一

年より千三百五十三年に至る迄モスコイを支配せしが、初めカリタの死するや、トヴェル並にスズアルの主人公等は、各々サライに於ける蒙古の主權者に訴へ、ウラヂミルの主宰者たるべき權利ありと主張したりしかば、シメオンも亦た自らサライに赴き、其把持せる所を陳べ、議論と云ひ、辯舌と云ひ、些も人を動かすに足るものなかりしも、彼れは其父が蓄積したる黄金を散ずること限りなく、遂に能く一種の手段に依りてサライに於ける主權者を己れが味方と爲し、以て他の二人に挺んで、其目的を達するを得たり。されば彼れはサライに對しては媚態百端、其從順なると殆んど猫の如くなりしも、他の王公等に對しては傲岸不遜、虎よりも猛なる者ありしかば、遂にフラウド(傲慢なる綽名を得るに至れり。斯くて彼れは其御世の間に於て、ノツゴロツドの共和國を威迫して貢物を強要し、尙ほ其自由を制限し、遂に始めて『全露西亞の主權者』なる名稱を用ひたり。而して當時モスコイの社會は次第に物質的進歩に向ひボリス(Boris)なる技師はモスコイ及びノツゴロツドの各寺院の爲めに、幾個の巨鐘を鑄造し、繪畫彫刻亦た皆な長足の進歩を爲し、以て各寺院の修飾を新

たならしめ、製紙業の如きも此時漸く其發達を遂げ、現にシメオン自身も其遺言を書するに當り、復た從來の羊皮(Parchment)を用ゆるに及ばずして今日の如き白紙に記するを得たり。但しシメオンは千三百五十三年に至り、不幸にも當時西歐に流行して頗る猖獗を極めたる黒死病に罹りて斃れたりき。

四、イヴァン二世(Ivan the Second) シメオンの弟にして紀元千三百五十三年より千三百五十九年に至る迄モスコイに君臨したりしが、彼れは珍らしくも資性平和にして戦争を好まず、固より暗君庸主と云ふにあらざりしも、長槍大馬天下に旁午して兵亂絶ゆることなかりし此時代に於ては、内は臣僚を服し、外は仇敵を制するに足らずして、其在位六年間モスコイは從來次第に勢力の歩武を増進しつゝ、ありしに管せず、屢々近隣の王公等より凌辱せられ、又た國內にも叛亂の起るを觀たりき。

五、ドミトリ、イヴァノヅキチ(Dimitri Ivanovitch) イヴァン第二の子にして紀元千三百六十五年より千三百八十九年に至る迄モスコイの主人公なりしが、彼れは乃父に似ず、資性最も勇武にして、其御世を通し概ね戦争に従事し、此時代に

於て特に露西亞の威名を遠近に輝やかしたり。而して其所謂戦争なるものは、先づスズアル、トヴェル、リアザンの諸王公に對する争鬪を以て始まりたり。即ち是れより先き、イヴァン二世の死するや其子は皆な幼冲なりしかば彼れと同名異人なりしスズアルのドミトリ(Dmitri)は紀元千三百五十九年に於てウラヂミルの市に攻め入り、嚴格なる儀式を擧げて其主宰者なることを宣言したり。さればドミトリ、イヴァノヅキチは其年甫めて十二にして驟然起て其當の敵と爲り、サライに於ける蒙古の主權者に狀を具して、其公明正大なる裁決を請ひたりしに、幸ひなる哉蒙古の主權者は彼れを直とする旨の裁決を與へたりしも奈何せん、ドミトリ、イヴァノヅキチの喜は一場の夢と化し、蒙古の主權者は忽ちにして其裁決を驕へし、却てスズアルのドミトリを以てウラヂミルの正當なる主宰者なりと爲したりしかば、ドミトリ、イヴァノヅキチは之を聞て大に怒り、從來其既にサライに於ける蒙古の勢力を藐視し、機一たび會すれば之に向て鼎の輕重を問はんと欲しつゝある際なりしを以て、彼れは裁決の反覆常なきを憤れると同時に、最早や之に服従すべき義務なしと稱

し、他くまでウラヂミルの主宰者を以て自ら居り、咄嗟兵を起してスズアルのドミトリを此地より放逐せんと企て、漸く其己れに大利益ある條約を締結するに及んで干戈を動かすことなくして止みぬ。

而して次の戦争は、トヴェルのミケル、アレキサンドロヅキチ (Mikhail Alexandrovich) に對せるものにして、此戦争は前後三度戦はれしが、最後に紀元千三百七十五年に至り、ドミトリ、イヴァノヅキチは兵を率ゐてドヴェルの市を包圍し、遂にミケルをして、終生己れを推戴し、サライの蒙古に對する嚮背の如きも一に皆な其命に是れ聽くべきことを誓約せしめたり。

尙ほドミトリ、イヴァノヅキチは紀元千三百七十一年を以てリアザンのオレク(Olek)を襲ひ、其嘗てイヴァン二世の平和主義なりしを好機とし、モスコイに加へたる凌辱に對し酬ゆる所ありたり。

此くの如くにしてドミトリ、イヴァノヅキチは今や其最後の戦争に従ふべき時期に際せり。最後の戦争とは何ぞや、實にサライの蒙古に對する其名譽の戦鬪にして、當時彼れは十五萬の大衆を擁してドン河を渡り、クリコツオ(Krivoi-



九〇  
Toro)の原野に於て敵軍に衝突し、激戦數次遂に能く全勝を收め、約十萬の敵兵を戰場に斃したる外、無數の捕虜と分取物とを得、繼令此後タメルラン(Tamerlan)の出づるに及び露西亞が再び蒙古の羈絆に束縛せられざるを得ざりしにもせよ、要するに其羈絆は決して擺脫すべからざる者にあらずして、スラヴにも英雄豪傑の出づるあれば其自由を恢復する甚だ難きにあらざることを世界に向て證明したり。斯くてドミトリ、イヴァノヰチはドン河の畔に於けるクリコヰオの原野に於て無比の勝利を博したりしを以て、其偉勳を長へに記憶する爲め時の露西亞人等は彼れにドンスコイ(Donskoi)の綽名を付して之を呼びたりき。

露西亞人が戦争に於て大砲を使用したる嚆矢は紀元千三百八十九年にして、即ちドミトリ、イヴァノヰチの御世の末尾なりしが、所謂物質的進歩は彼れの時代に於ても亦た益々其形跡を認め得べく、當時アソフ海の附近に來りて貿易を營みつゝありしゼノア人等は漸次西歐の氣風を輸入し、銀、銅貨等の貨幣も此時を以て始めて露西亞に行はれ、モスコイの寺院は各處に其宏壯輪煥

たる建物を以て市街を粉飾したり。

六、ヴァシリ、ドミトリ、ヰチ (Vasilii Dmitrievich) ドミトリ、イヴァノヰチの子にして、紀元千三百八十九年より千四百二十五年に至る迄モスコイに主宰たりしが、彼れの御世に於て特筆大書すべき出來事は、夫のタメルランの侵入なりき。今其概畧を記せん。此第二のゲンギスカン若しくはパトユイとも稱すべき恐ろしき強敵がモスコイに侵入せしは、元來其ボシハラ、ヒンドスタン(Hindistan)イラン(Iran)及び小亞細亞等を縦横無盡に掠奪し、充分貴重に分取物を獲得したる末、更らに君士坦丁堡の豊富と埃及の財貨とを夢想し、露西亞に入りても亦た能く己れが貪婪飽くなきの口腹を大半の滋味に満たし得べしと思惟したる結果なりしが、思ひきや鐵騎一たび此地に入るに及んでは彼れは只だ茫漠無邊の原野と密樹掩映して、豈尙ほ暗き深林とを觀るの外、さまで其眼に映ずる物を認めざりしかば、失望の念は忽ちにして胸裡に起り、其初めや疾風の如き勢を以て前進し來りしも、須臾にして其長驅を止め、方向を一轉してアソフ海の濱に進み、當時同處に於て貿易を營み巨額の富を蓄積しつゝ、

ありし埃及及びセノア等の商賈を掠奪し、更らに紀元千三百九十三年を以てアストラカン(Astrakhan)を陥れ、尙ほ其同種族なりしサライの市民すら之を攻撃殺戮して以て聊か其心期の乖戻したる恨を霽らしたりき。

七、ヴァシリ、ゼ、マラインド (Vasilii the Blind) ヴァシリ、ドミトリ、ヴホチの弟にして、紀元千四百二十五年より千四百六十四年に至る迄モスコイを支配せしが、彼れの御世は二十餘年間に渉れる内亂ありて、ドミトリ、ドンスコイの一家は紛糾擾亂を極はめ、ヴァシリ自身に對し、驟起して其位を争ふ者ありしかば、彼れは其在位の大半を通じて艱難苦楚、概ね失意の境遇に在りしが、彼は其反對者と戰場に相見みゆるに至り、一敗地に塗れて憐むべき捕虜と爲りしに、敵は無慈悲にも其双眼を抉出したりしが、天未だ彼れが福祉を絶つを欲せざりしか、彼れは其後隱忍の間に生命を全ふし、遂に一朝誠實親擧なるモスコイ市民の援助を得て再び掃蕩の業を完成し、以て一時麻の如く亂れたるドンスコイの舊領地を統一することを得たりき。彼れがフライインド(盲目)と綽名せられたるは、實に此不幸にして双眼を抉出せられたるに因るなり。

## 第十一章

### イヴァン第三世(露西亞の成立)

自千四百六十二年  
至千五百三十二年

露西亞に於けるモスコイ公國の主宰者が歴代其勢力の樹立に執掌し、近隣の諸王公と事を構へて篡奪鬭争概ね寧日なかりし時に當りてや、他の一方を顧みれば西歐諸國の國民は昔な其封建時代の末に於ける紛亂を掃蕩して統一の大業を成就したり。チャールズ第七世(Charles the Seventh)ルイ第十一世(Louis the Eleventh)の佛蘭西に於ける、フェルデナント(Ferdinand)イサベラ(Isabella)の西班牙に於ける、チネードル(Tudor)家の英國に於ける、フレデリック三世(Frederick the Third)マキシミリアン(Maximilian)の奥地利に於ける昔亦然らざるはなし。否な獨り之のみならず此時暗澹たる妖雲を破りて新たに乾坤に射出せし文明の曙光は一般に西歐諸國に其痕跡を印し、文學技術蔚然として再興し、コロンブス(Columbus)及びヴァスコ・ガマ(Vasco de Gama)が眇たる小艇に乗じて杳冥たる大洋に航し、以て首尾能く新世界を發見したるも亦た全く此時なりしかば、世界の氣勢は駭々として維新改

造の機運に向ひ、復た蝸牛角上に干戈を弄する底の事を以て人間の大目的と爲さざるものありき。乃ち一の利便なる海港だに之を有せずして西歐諸國の文物氣風に感染すべき機會なかりし露西亞も、何とて能く其舊時の状態を持續して長へに面目を一新することなく、動もすれば四分五裂群雄割據の光景を保存し得べき。所謂世運の推移は人力の維持する所にあらざりしかば、今やモスコに主宰たる者も亦た慨然として其大なる統一を計り、誓てモスコを以て全露西亞の首都たらしめんと欲するに至れり。此冀望を懷抱し能く之を成就したる者は果して何人なりしや、彼れは如何にして其統一を成就したるか、如何にして露西亞をして蒙古の羈絆より脱出せしめたるか。又た不完全ながらも如何にして露西亞をして西歐と聯絡せしめたるか、凡そ是等の事項は本章に於て記せんと欲する所なり。紀元千四百四十年に於てヴァシリ、ゼ、フライノドに、イオアン或はイヴァン (Ioann or Ivan) と呼ばれたる子の生るゝや、僧某はノヴゴロツドの共和國人に告げ曰へらく『ヴァシリ、ゼ、フライノドは遂に全勝を占むるの日あるべし、神は今や彼れに一子を與へられたり、此子は豐功偉勳を以て其一代の事歴を輝やかすべき運命を有

せり、モスコ人の爲めには慶して而して賀すべしと雖も、ノヴゴロツドの爲めには寧ろ憂慮すべき事に屬す、ヴァシリが子は必ずノヴゴロツトを征服するの日あるべし』云。

此豫言は偶然にも的中したり、イオアン或はイヴァンはヴァシリの死後、イヴァン三世 (Ivan the Third) としてモスコに君臨し、其在位四十三年間を竭くして統一の大業を成就したり。彼れが如何なる人物なりしやを記すれば彼れは極めて冷靜酷薄なる頭腦を有せる獨裁主義の主宰者にして、又た頗る應對操縱の術に長じ、其競争者を屈服せしむる所以のものは多くは争に係る問題の協商の際に存し彼れは此際に於て讓歩するが如く讓歩せざるが如く、決心するが如く決心せざるが如く云爲し、其意嚮殆んど端倪すべからずして、成るべく談判の進行を遅延澁滞ならしめ、其競争者が精を洒らし氣を弛るましむるに及んで、乘じて以て大に逞ふする所あり、遂に全局の勝利を收むるに至ること其平生の慣手段にして、彼れは後來モスコの朝廷に坐して所謂モスコの狡獪陰險なる手段、謀略を試みたる各主宰者等の爲めに實に政略の一模型を貽したる者なりしかば、其干戈を動かす

も亦た全く已むを得ざる場合のみにして、當時に於てもモルダヴィアの (Moldavia) ステフェン (Stephen) の如きは明かに彼れが人と爲りを嘆異し『イヴァン程世に不思議なる人物はあらじ、余は平生殆んど常に馬背に在るも尙ほ且つ領土の防禦を完ふする能はざるに、彼れは獨りモスコの宮廷に靜坐して別に爲す所なく、全く手を拱して總べての敵に打勝つゝの觀あり』と言ひたりき。蓋しイヴァンは露西亞の統一を以て平生其大目的と爲せる者なりしかば、戦争は成るべく之を避け、モスコ其他の地をして復た兵馬踏藉の區たらしめざらんことを欲し、勢ひ此の如くならざるを得ざりしものありしならんも、而かも彼れが一種の術策に長じ之を以て優に時流に傑出せし一事は到底争ふべきにあらず。

イヴァンは容貌魁梧にして、傲岸尊大の氣人を歴し、其赫として怒り、炯々たる双眼を睨らして、櫻み掛らんず姿勢を示す時は、温順にして柔弱なる婦人の如きは忽ちにして氣を失て卒倒するばかりなりき。否な彼れが殘酷なる舉動を敢てして、毫も意に介する所なかりしは露西亞の史家自身が、今も尙ほ之を傳へて戰慄する所にして、彼れは貴族を殺し、僧正を撻ち、波蘭人を鐵籠に入れて生きながら之をモス

コツア河の畔に焚き、當時の露西亞人等の眼にも宛も一個の恐るべき神として映せしかば、遂にテリアル(恐怖)の綽名を得るに至れり。但し此の綽名は彼れよりも寧ろ彼れの孫にして彼れと同名なりしイヴァンに適當したれば、露西亞の歴史に於て後世イヴァン、ゼ、テリアルと云へば、彼れにあらずして、彼れの孫なりと知るべし。

斯くてイヴァン三世が所謂統一の大業なるものを成就するに當り、其第一着の成功は實にノヴゴロッドの共和國を勦滅したる事なりき。當時此共和國は貴族政治の腐敗其極に達し、國內の騷亂絶ゆることなく、若し有力者にして一大打撃を加へ、因て以て其附庸と爲す所以を講ずるあれば、單に一舉手、一投足の勞のみなりしなり。况んやイヴァン三世の大決心を以てして、之に加ふるに彼が下に全盛の域に進みたるモスコは、此時益々勢力の隆盛を致したるをや。モスコの民衆を擧げてノヴゴロッドの共和國に加へんと欲す、夫れ猶ほ朽を摧き枯を碎くが如き乎。然れども前述の如くイヴァンは成るべく戦争を避けんと望みたる者なりしかば、彼れは輒ち干戈を動かさず、且つノヴゴロッド人等を戒飾して少しく

其内政の革新を擧げんことを求めたりしも、ノヴゴロツドの貴族等は頑冥不靈にして毫も其言に傾聽せず、遂に『余等はモスコイに於ける主宰者の鼻息を伺はざるも、ノヴゴロツドの事は余等自ら之を處理すべし』と暴言を吐くに至りしかば、イヴァンも今は已むを得ず、恫喝的に其開戦を宣言したりしに、ノヴゴロツド人等はボルトスキ(Borevskii)と名づけられたる貴族の未亡人マルファ(Marfa)なる者を領袖としてモスコイ排斥黨を組織し、益々彼れに對抗することを努め、到底不問に付し去るべからざりしを以て、イヴァンも茲に愈々其所存の臍を固め、兵を派してコロストイン(Korostuin)ヤロナ(Shelona)等の各地に轉戦し、紀元千四百七十年全くノヴゴロツドを屈服し、其戦費に對する賠償を強要し、ノヴゴロツトは此時既に事實の上にて獨立せる共和國たる資格を失ひしが、復び禍源を他日に貽すことを欲せざりしイヴァンは尙ほ進で之を全滅せんと企て、此後マルファの率ゆるモスコイ排斥黨が再び彼れに對して反抗するに及んでは、彼れはノヴゴロツド人等に逆言ありたりとて、遂にモスコイ全軀の民衆を擧げてノヴゴロツドに對する征討軍を編成し、其市を陥め、紀元千四百七十八年以後は復たノヴゴロツド共和國なる者を

露西亞の歴史に留めざりき。

イヴァン第三世が次の成功は夫の蒙古の羈絆を擺脫する所以のものなりき。回顧すれば當年西侵軍の總大將たりしバトコイが鐵騎に鞭て露西亞に侵入し、各地を陥め、府をサライの新市に開くや、露西亞の諸王公等は誰れ彼れの刑なく總べて皆な其奴隸と同一視せられ、即位の大典より宣戰媾和の事に至るまで一に其命に是れ聽き、歲時朝貢の外、諸王公等は又た皆な其府に參勤せざるべからざりしが、日月に關守なく露西亞が爾かく屬國の悲境に沈淪せし以來年所既に三世紀を経、今や漸く其羈絆を脱出すべき秋に際せり。蓋し此時露西亞に於ける蒙古種族の領土は業に既に土崩瓦解の状態を呈し、カザン(Kazan)アストラカフ(Astrakhan)即ちサライ、ノゲス或はノゲツィ(Nogais or Nogaisin)及びクリミア(Crimea)等の小邦新たに發生したりしが、是等の小邦は概ね皆な其内訌の爲めに争亂を極はめ、自力を以て時難を救済すること能はざりしより、前後來てイヴァンに其援助を懇請したり。然るに當時イヴァンはさらぬだに是等の諸國を己れが勢力の範圍内に壟斷し、蒙古の羈絆を根底より除去するのみならず、其宿昔の雄圖大志を成就して、全露西亞

の乾坤を唯一の主権の下に統治せんと熱望しつゝありしかば、彼れは此懇請を以て奇貨措くべしと爲し、其得意の狡獪手段を弄して巧みには是等二三の小邦を操縦し、一面之に對して援助を吝まざりしと同時に、他の一面に於ては成るべく彼等が再び結合することを妨げ、以て自個の爲めに其復讐の制御し難き敵手たらざらんことを勉めたり。而して當時力微なりしも尙ほ儼存せし蒙古種族の主権者に對しては彼れは最も其外交的の手腕の黠猾を極はめ、陰に之が勢力の全滅を計る者を使嚙せしも、陽に他意なき風を裝ひ、總べて防禦的に行動して敢て自ら進撃的動作に出でず、朝貢の禮の如き往々にして之を缺けるも又た注意して歲時進物の贈呈を怠らず、曖昧模稜の間に密かに諸般の準備を整へ、以て一朝驟起して之れに致命の打撃を加ふべき時機を待てり。夫の紀元千四百七十七年に於てマルコ・ポロ (Marco Polo) なる以太利人が彼れの使節として蒙古の仇敵たりし波斯の王ウツサム・ハッサン (Usam Hassan) の許に急行したるは何故なりしや、亦た實に彼れが蒙古に對して連衡を企てんと欲したる結果なりしのみ。彼れが其宿世の敵手を殫さんが爲めに、如何に慮を積み思を苦ましめたるかを想像するに足る。斯くて好機は

今や漸く際會したり、彼れは紀元千四百七十八年に於て明かに其蒙古に對する謀叛の意を表白し、サライに於ける時の主権者たりしアクメットカン (The Khan Akh-Ego) が貢物を受納する爲め使節を派し、其信として己れの畫像を持してモスコに來らしめたる時、イヴァンは其畫像を脚下に蹂躪し、使節を虐殺し、僅かに其一人を生還してアクメットカンに具さに狀を語らしめられたれば、蒙古の主権者は激怒を發して茲に愈々開戦を觀るに至り、アクメットカンとイヴァンとは兩々相對して戰場に見みへたりしが、イヴァンは持重を主として容易に兵を交へず、數回野に暴露したる後ち自ら退軍の令を傳へてモスコに還りたりしに、此時アクメットカンも亦た如何なる恐慌にや打たれたりけん、同じく直ちに軍隊を引揚げてサライに退きたりしかば、戦争は全く龍頭蛇尾に歸して終り、蒙古の餘りに臍甲斐なかりし事は其疇昔の勇猛驚悍、向ふ所敵なかりしを回想して殆んど之が理由を解すべからざる程なりしも、兎に角露西亞に對する其勢力は此時を以て終焉を告げ、アクメットカンは此後幾ばくもなく其部下に弑殺せられたり。而して是れより後ちイヴァンは更らにカザンを滅して一時其領土を併有し、ノグスに對しても亦た益々其

威力を用ゐたりしが、クリミアの如きは始めより彼れと親善にして寧ろ服従を表したりしかば、彼れはカザンを滅して一時己れが版圖に併有したる領土を擧げて其主宰者たるメングリ(Mengli)の甥某に與へたりき。

ノヴゴロッドの共和國既に勦滅せられ、蒙古の羈絆も亦た忽焉として其跡を收めたりしかば、イヴァン第三世が統一の鴻業を完成するもの今は只だリザニアを處分する一事と爲れり。リザニアは嘗て波蘭と結合し、イヴァン第三世の御世の初に當りては實に波蘭の王ガヨミル第四世の主權の下に在りし者、イヴァンは胸裡に懷抱せし素志の成就に全力を傾倒して總べての機會を利用し、之れが緒に就く所以を努めつゝ、あしも奈せん、カヨミル第四世の生存せる間は、其英邁機敏にして注意の周到なる、劃策施設、一に皆な其宜きを得、到底モスコの主人公に乗すべき隙を與へざりしを以て、茲に暫らく事なきを得たりしが、人生長へに健全なる能はず、不老不死の藥は竟に之を求むべくもあらずしかば、カヨミルもイヴァンの即位後、約十年を経て病没し、波蘭の地は其長子アルベルト(Albert)がリザニアの地は其次子アレキサンドル(Alexander)が各々之を支配する事となりたりしかば、敏活人

に絶し、機先を制するに長じたりしイヴァンは、直ちに其年來此地に垂涎しつゝある慾望を今更の如く復び盛んならしめ、カヨミルの嗣子等が在位日未だ久しからずして、勢力の樹立未だ確固たらず、隨て人心の稍々危懼せるに乗じ、平生の野心を逞ふして、一舉に成功せんと欲し、土耳其皇帝バヤゼット第二、匈牙利王マシアス、コルツキナスの外に、從來リザニアの爲めに一個の強敵なりしマルダツキアのステファン、及びクリミアのメングリ等を引て其黨與と爲し、直接間接にリザニアに對する己れが戦争を幫助せしめ、干戈を交ゆること少時にして、紀元千四百九十四年に至り、遂に之と媾和の條約を締結し、此條約に依りてモスコト公國の疆域を擴大ならしむると若干、以て能くデスナ(Desna)河の畔に到るまで其主權を及ぼしたり。而して此後幾くもなく、彼れは其皇女ヘレン(Helen)をリザニアのアレキサンデルに與へて婚儀を擧げしめしかば、平生の仇敵も今や忽ち融合して和樂の一團と爲り、露西亞とリザニアとの確執は全く過去の事實に厲して止むべしと思ひきや、此結婚はモスコの主人公たる彼れが儀式の未だ擧げられざるに先だち、豫じめ新婦は決して結婚後も改宗せざる事、換言すればヘレンは結婚後も必ず希臘教

を奉じ、希臘教の勤行を爲すべき事を誓約したりしに、結婚後少しく此誓約を破る所ありしかば、イヴァンは直ちにアレキサンドルの左右の者等に違言ありたりとて詰責して止まず、其結果彼れは遂にリザニアに對して干戈を動かし、リザニアが當時勢力を失墜して復た昔日の雄風なかりしに乘じ、デスナ河よりソヤ(Соя)に到る一帶の地を略取し、戦争久しきに涉りて尙ほ未だ決せず、殆んど東歐の全部を擧げて鐵火の裡に投じ去りたる觀ありしが、其後アレキサンドルは波蘭の王に擁立せらるゝに至りたりしを以て、速かに戦争の局を結ばんと欲し、遂に紀元千五百三年羅馬法王アレキサンドル第六世は匈牙利の王と共に兩交戦者の間に斡旋して調停の勞を取り、兩者とも各々主張する所を固執して毫も讓歩する所なかりしを以て、暫らく六年間の休戦を約して止みたり。

既にノヴォゴロッドの領地を略取しカザンを亡ぼし、サライを陥るれ、又ソヤに到るまでリザニアに打勝つ、イヴァン三世の版圖が前日の廣袤に倍蓰するものありしは言ふまでもなし。况んや彼れは此特別に露西亞の北部に於て、人跡未だ嘗て到らざる茫漠無邊の地を征服し、當時詳細明確に風土の探討に従事したる地

理學者すら、只だ無數の怪物等が棲息せる處とのみ思惟したる一帶の土地を合せ、之を領有したるをや、彼れが所謂統一の雄圖大志なるものは、今や漸く其成功を觀たりと謂ふべし。而して當時此領土の擴大に次で、彼れが歴史中決して瑣細ならざりし出來事は、實に其ヒサンチン皇帝の遺れ形見たる皇女ソフィア、パレオロガス(Sophia Paleologus)と結婚したる事なりき、此結婚を斡旋して殆んど媒介者の位地に立ちたる者は、羅馬法王ポール二世(Poul the Second)にして、初め此縁談が希臘より露西亞に申込まるゝや、飽くまで名譽心に富みたるイヴァンは因て以てヒサンチン系統の繼承者なりと託言し得べしと打算し、雀躍して直ちに應諾の意を表したるが、獨り之のみならず、モスコイの貴族等も亦た異口同音に賛成を唱へて歡喜措く能はず、果ては、天成の良縁は竟に破却すべからず、モスコイの主宰者に此くの如き顯著なる良妻を與へたる者は、全く神なりと絶叫し、滿腔の熱心を以て一日も早く其式の擧げらるゝことを慫慂したりしかば、此時に於ける上下の満足は殆んど筆紙の能く悉くす所にあらずして、儀式は直ちに舉行せられしが、此ソフィアは結婚後實に偉大なる勢力を有じ、幸にして牝雞未だ晨を司るに至らざりし



も其往々にしてイヴァンの内治外政に容喙したる結果は決して鮮少ならざりき、即ち詳言すれば彼女はイヴァンに獨裁政治の秘訣を教へたり、『露西亞人は久しく奴隸の狀態に在りし者なれば習慣の久しき別に自由の束縛せられたる苦痛を感ぜざるべきも、我等は生來斯る事に慣れざれば到底苛酷なる蒙古人の羈絆に堪へ得べきに非ず、請ふ後來速に彼等が餘孽を滅絶し、以て復た其頭を擡げしむる勿れ』と言ひてイヴァンに益々亞細亞種族に對する一種の猜忌と警戒とを加へしめたり。否な彼女が露西亞に寄與したる所以のものは獨り此くの如きに止らず、彼女は己れが希臘よりモスコに來りたると共に多數の移住者を希臘より露西亞に拉し來り、デメトリオス、ラロー (Demetrios Palo) あり、セオドール、ラスカリス (Theodore Lascaris) あり、トラクハニオテス (Trakhaniotes) あり、其他有爲の輩にして、此後續々移住せる者引きも切らず、而して此移住者の中より政治家出で、外交家出で、機關師出で、技師出で、尙ほ神學者出でたりしかば、彼女は實に露西亞の爲めに、歐洲古代の文明を齎らしたる者なりしのみならず、又た貴重なる希臘の書籍若干を是等の移住者に携帶し來らしめ、遂に能く今日まで現存して、露西亞の某圖書館に於て其

唯一の珍品たるに至れり、尙ほ夫の『雙頭の鷲』を以て露西亞國旗の徽號と爲したるも、イアロ斯拉フのルスカイア、ブラヅダを修正増補して、別にウロゼニア (Ulogenia) と呼ばれたる新法典を制定したるも、亦た皆なイヴァンの晩年に於ける事跡の一なりき。

イヴァン第三世は、此くの如く内に在りては全露西亞の統一綜合に拮据執掌して能く其目的を達したりしが、彼れは之れと同時に外に在りても亦た能く外交の事を忘らず、歐亞其他の方面と文書の往來進物の贈酬、頗る其頻繁を極はめ、ヴェニス、埃地利、匈牙利、丁抹、土耳其、波斯及び東亞諸國と使節の冠蓋相望まざるはなく、兎に角當時に在りては、俄に露西亞を導て世界の交際場裡に上らしめたり、されば後世、露西亞の史家は彼れを呼んで、『大帝』と爲し、其内治外政に關する大功を贊して、夫の彼得大帝と併稱し、『先きにイヴァンあり、後に彼得あり、以て露西亞の基礎は確固不拔なるを得たり』と言へり、蓋し亦た溢美にあらざるべし。

斯くてイヴァン第三世は、其在位四十三年間に於て、略ぼ己れが成さんと欲する所のものを成したりしが、彼れが長子は是れより先き不幸にして、既に夭折したりし

かば其死後は彼れが第二子ヴァシリ、イヴァノヴィチ (Vasilii Ivanovitch) 代て位に上りしに、其御世は紀元千五百五年より千五百三十三年に至るまで年所二十八年間に於て比較的短少時間なりしのみならず別に特筆大書すべき出来事を観るなく、只だ彼れが乃父の遺業を継ぎて益々露西亞獨裁國の基礎を鞏固ならしむる所以を計りたるのみなりしも、其子イヴァン第四世 (Ivan the Fourth) 即ち「ソブール」と稱名せられたる者の御世に至りては露西亞は更らに一層其規模を宏壯ならしめ、主宰者たるイヴァン第四世も今は斷然「露西亞皇帝」(Tsar)なる稱號を用ゆるに至れり。

## 第十二章 イヴァン第四世 (露西亞最初の皇帝、上)

自千五百三十二年  
至千五百四十二年

露西亞人誇りて曰へらく「我國には前にイヴァン第三世あり、後ちに彼得大帝あり、以て爪分の小邦を統一し、以て開國進取の國是を確立し、能く無窮の鴻圖を成就するを得たり」と然り、イヴァン第三世が露西亞の統一に大造ありしとは、上來既に叙述せる所にして敢て疑を容るゝに及ばざるべし、然れどもイヴァン第三世の死後、

彼得大帝の未だ出でざる際、モスコの主宰者と爲り、劃策經營新たに統一せられたる露西亞の結合を完成し、始めて皇帝の稱號を用ひ、殆んど現今に於ける露西亞帝國の基礎を定めたるイヴァン第四世の丕績も、亦た誠に没すべきにあらざ、露西亞人たる者若しイヴァン第三世及び彼得大帝の偉業を謳歌し、黄金以て其像を鑄ることあれば、彼れは同時にイヴァン第四世の勞に酬る功に報ずる所以も亦之を計らざるべからず。イヴァン第四世が露西亞の歴史に於て名譽の一座席を要求すべき權利を有せるや固より明らけし、唯た夫れ彼れは其御世の後半期に於て或る事變の發生せし後、最も殘忍暴戾の行爲を敢てし、七年間に涉れる慘殺すら之を斷行して毫も意に介せざりし者乃ち其露西亞の發達上施設したる事跡の如何は暫らく之を措き、一個人の道德性行を批評せらるゝ日に於ては常に攻撃非難の矢を集め、棺を蓋ふて數百年を経たる今日に至るまで、露西亞の史家中、若し彼れが一身に關する論斷に於て「功罪相償」と云ふものあれば、それは本來彼れの爲めに頗る寛假したる評語たるなり。彼れか不人望も亦た實に甚だしと謂ふべし、然れども驕て又た他の一方より言はん乎、彼れとて固より無情一偏の冷血漢にもあらざ

りしなるべければ、其在位の後半期に於て甘んじて這般の行爲を敢てするに至りたるは、自ら其理由事情の存するものなくんばあらず、或は曰く「彼れは其幼時に於て未曾有の逆境に立ち、千種萬狀の苦楚艱難を嘗め盡したる結果、其性情は既に頗る頑陋拗執と爲り、其意志は既に頗る多猜多疑と爲り、到底尋常の規矩準繩を以て律すべからざるものあり、之に加ふるに、其在位の後半期に於ては悪魔の如き貴族等と終始鬭争せざるべからざる境遇に立ちたりしを以て、其一旦激怒を發し、全身の血を沸騰せしむるに及んでは、殆んど前後を顧みるの暇なく、盲動暴行を逞くし、夫の狂人の状態と相去る僅かに一步の境に陥り、以て這般の残忍暴戾を敢てするに至れるなり」と、蓋し亦た然るものありしならん歟。左に記する所は即ち彼れが幼時に於ける境遇、位地に就て絮説せるものにして、ヴァシリ、イヴァノフチの死後彼れが尙ほ幼冲なりし日に於ける四邊の事情なりとす。

ヴァシリ、イヴァノフチの死後に於けるモスコイは、從來のモスコイとは全然其趣を異にしたりき。イヴァン三世若くは其先代等が人を殺し財を糜し、幾多の焦心苦慮を竭くして漸く自個等に屈服隷屬せしめたるモスコイ以外の諸王公、殊に

貴族等は、今や皆なモスコイに來りて臣と稱せり、モスコイの朝廷は彼等が齊しく瞻視して拜趨する唯一の宮殿と爲りぬ。往日諸王公が相對峙して各其主權を振へる時に當りてや、此貴族等は跋扈跳梁殆んど至らざる所なく、其王公に對して憚焉たらざるものあれば、或は黨與を結んで之を易置し、或は去て他の諸公國に赴き其新らしき主宰者を選んで之に事へ、進退去就毫も檢束せらるゝ所なく、唇舌心の儘に行動したりしが、今や天地乾坤總へて皆な一新し、臣事すべき者はモスコイの大公を除却すれば、天涯海角復た其人なかりしかば、彼等が既往に於ける一種の特權とも目すべかりし者は、頗る其効力を失ひ、既に意の欲するに任かせ、主宰者を變更すること能はずして、之と同時に去て他の諸公國に赴き新主を選んで之に臣と稱することも亦た全く其自由を缺き、彼等にして若し強めて露西亞に於けるモスコイを去らん乎、是れ日耳曼に往くなり、瑞典に往くなり、土耳其に往くなり、夢寐愉快、依々として懐に忘るゝ能はざる故國を去り全く歴史、地理、人情、風俗の相異なる他邦に赴くことなりしかば、彼等も亦た忍んで此極端なる舉動に出でざりしかど、さりとして其モスコイの主宰者に心服する能はずして、不平航牒の氣自ら抑制すべ

からざるものありしは掩ふべからざることなりしかば、彼等は往々リザニアの公國に赴き、其陰謀を成就する所以を計りたり、乃ちリザニアは今や波蘭と結合して、或る意味に於て既に全く露西亞の爲めに外邦たりしも、當年の關係よりして、彼等が眼には尙ほ若干の因縁ある者として映じたりしかば、彼等はモスコイに於て憤懣鬱に堪へざることあれば、直ちに去て茲土に赴き、其衆を驅てモスコイに侵入する事を計り、而して後ち大公の位を篡奪する事、其内帑に蓄積せる富の全部を領有する事等、順次其頭腦に成功の曉に於ける空望と夢想とを描きたり。而して事一度此に至れば、是等貴族の外に、夫の表面上モスコイの主宰者に屈服隸屬の風を装ひつゝありし當年の諸王公等も、亦た屢々其陰謀に加擔するあり、モスコイの宮廷は宛然陰謀、奸計、詐害、秘策の養成所と爲り、統一の鴻圖漸く其緒に就きたりと思ひきや、再び傾排、擠陷至らざる所なき最も恐ろしき内訌の府と化し、イヴァンは當時尙ほ幼冲の身を以てして、實に此恐ろしき紛亂の渦中に生長し、具さに人心の反覆頗み難き、世路の險惡、跋涉し難き千萬無量の辛酸を嘗め盡くし、子供心にも、危懼の際には世間總べての者を皆な其仇敵なりと思惟せざるべからずと感ずるに至

れり。

イヴァンの父ヴァシリ、イヴァンウヂキは中年に於て其妻を失ひ、更らにヘレナ、ジリンスキ(Helena Ginski)と呼ばれたる第二の妻を迎へたりしが、此婦人は元とポドリヤ(Podolia)貴族の一支族にして、同支族は嘗て波蘭の王シギスモンド(Sigismund)の爲めに異國を懷抱せりと疑はれ、遂に遁れて露西亞に來りたる者にして、彼女は容姿綽約として稀代の美人なりしのみならず、其氣象亦た頗る活達爽快にして、深くヴァシリの心に適ひ、尙ほ能く紛糾錯雜の難局を解排する技倆ありしかば、ヴァシリの寵幸信用共に兩つながら其優渥を極め、ヴァシリは其臨終の際に及び彼女に托するに、其二子イヴァン(即ち後來イヴァン第四世と爲る者)及びイェーロー(Imre)の後見を以てし、且つ卓勵風發して誓て己れが遺圖を失墜せざるべき事を囑したりしかば、天資英邁にして善く謀り善く處したる彼女は、如何にして當時モスコイの大公に對して常に禍心を包藏し、陰に其勢力の樹立を妨害しつゝありし貴族等を掃蕩燼滅すべきかを稔知し、一旦機の熟するに及んでは、毫も忌憚なく其胸臆を行ふに至れり、即ち彼女は自己がヴァシリの遺子等の爲めに後見に立ちた

る後ち未だ幾ばくならずして、亡夫の弟イェーリ、イヴァノフチ (Iuri Ivanovich) を謀叛の故を以て、囹圄に投じ、終に之に惨死を遂げしめたり、彼女自身の叔父ミケール、グリンスキ (Mikhail Ginski) を一時信任したりしも、忽ちにして事を以て逮捕し、又た幽閉の身と爲して同じく之れに非命の最後を遂げしめたり、尙ほ亡夫ヴァシリ、イヴァノフチの他の弟アンドレー、イヴァノフチ (Andrei Ivanovich) なる者も亦た之と不軌を謀りたりとの嫌疑を以て幽閉し了したり、而して是れより後ち彼女はリザニア人との戦争に於て武威を輝やがし、カザン、クリミア等の附近に於ける蒙古種族を撃破し、全くモスコの地を彼等が襲撃の圏外に置かんと欲し、堅牢なる一帯の長壁を起してキタイゴロッド (Khai-gorod) の方面を圍繞し、以て大にモスコの要害を固くしたり、而して宮廷の内には彼女は決して他人を輕信せず、貴族及び當年の諸王公等は勿論、彼女自身の親戚等も亦た皆な之を疎外して近づくることなく、獨り己れが御者たりしテレフチフ (Teleneh) なる者を引いて唯一の腹心と爲し、時人は此テレフチフを呼んで彼女の情夫なりと爲せし程なりしが、兎に角其爲政は最も嚴峻苛酷を極めたりしかば、モスコの貴族等が不満を惹起せ

るもの甚だしく、紀元千五百三十八年に至り、彼女は遂に其毒殺する所と爲りたり、而して是れより後ちモスコは再び無政府の状況を現出しぬ。

斯くて貴族等は、テレフチフを殺し、其妹にしてイヴァンの保母たりしアグラフェナ (Agrafena) を獄に下したる後ち、尙ほ其權力の争奪に餘念なかりしが、遂にシユイスキ (Shuiskis) 及びバルスキ (Belskis) 兩族の政争と爲り、最後にアンドレー、シユイスキ (Andrei Shuiskis) なる者、兵を以てバルスキの政府を轉覆し、自ら其相續者と爲りたりしが、此貴族等が、權力の争奪に日も是れ足らざりし際に在りて、夫のヴァシリの子等は果して如何に生息したりしや、弟イェーリは柔弱にして、暗劣なりしも、兄イヴァンは一世の傑物にして、其臣下等が當時頗るヴァシリの遺子たる自個等を輕蔑せることを無上の羞辱なりと爲し、必ず之に酬ゆる所あらんと欲し、悲痛憤慨の餘自ら當時の状況を記し、左の如く言へり。

余及び余が弟イェーリは一般の民衆に恰かも外國人の子の如く餘處餘處しく取扱はれたり、否な時としては乞食の兒の如く輕蔑せられたり、余等は惡衣にして粗食なりしかば、寒と飢とは到底之を免る能はざりき、而かも貴族等が奢侈

費澤を盡くして、國民を掠奪したるものは果して如何に激甚なりしよ、彼等は都府村落の各處を遍歴し、容赦なく總べての罪惡を住民の上に行ひ、擅まゝに余等が臣民を驅て遂に其奴隸と爲らしめたり。

イヴァンが無念骨髓に徹して竟に忘却すべくもあらず、密かに萬斛の恨を呑んで復讐の時期の到達するとを熱望しつゝありしもの誠に文字の外に歴然たりとす。尙ほイヴァンは此くの如く、轉軻零丁の悲境に在りしを以て、其教育とても固より不完全を極めたりしが、只だ彼れは此間に於て勉めて讀書を廢せず、聖典(Bible)を誦し、諸聖(Saints)の列傳を讀み、スラヴ語に翻譯せられたるヒザンチンの歴史を繕き頗る精勤なりしかば、其効果は空しからずして、後來彼れが其所謂「露西亞皇帝」てふ理想を懷抱するに至りたるもの、一に此歴史其他の書冊に負ふ所なりしと稱せらる。

### 第十三章

#### イヴァン第四世(露西亞最初の皇帝)

中(自千五百四十二年  
至千五百五十八年)

イヴァンが其胸裡に懷抱せし「露西亞皇帝」てふ理想の實行は紀元千五百四十三年の耶蘇誕生日饗宴の後ちに於て倏忽として其端緒を開きたり、此日までイヴァンは存養自晦心に慣れるも顔色に露はさず、胸に萬般の機略を有せしも容貌愚なるが如く裝ひ、全く專横なる貴族等が木偶たり傀儡たるの觀ありしが、此日に至り彼れは突然總べての貴族を其面前に召集し、嚴として犯すべからざる態度と、威嚇するが如き語調とを以て、充分其失敗を詰責し、「貴族等の中には刑罰を値ひすべき罪迹の行爲ありたる者十數人あるも今は只だ彼等に大戒を標するが爲めに其重なる者數人を處罰し、以て殘餘の者には其自ら新たにすることを許容すべし」と宣言し、咄嗟己れの近衛兵に命じてアンドレー、シニスキヤを捕拿し、遂に其四肢五體を劈て以て死に至らしめ、尙ほ貴族の中最も強項にして制御すべからざりし者若干をモスコイの市外に放逐したりしが、此急激なる政治的大打撃の發頭人は、此時實に其齡甫めて十三に達したる小兒なりしとは洵に驚嘆すべき至ならずや。斯くてイヴァンは從來モスコイの朝廷に於ける禍亂の根源たりし貴族に對する掃蕩の第一着手に於て成功し、自ら國政を視る準備として、輔弼の職に在るべき人

々を撰びたりしが、之を爲すに際し、彼れは露西亞歴代の主權者等と同じく、父方の親戚は其大權を篡奪するの恐多しと爲し、専ら母方の親戚に取り、夫の貴族グリンスキの一派は行政の機密に參與することを囑托せられたり。而して遂に紀元千五百四十七年一月に至り、彼れは即位の大典を擧げ、モスコイの大僧正をして其儀式を修めしめ、皆に大公の名稱のみならず、所謂『ツァー』(Tsar)即ち露西亞皇帝の稱號も亦た之を確有したり。蓋し此『ツァー』なる稱號は彼れが嘗て愛讀に耽りたりしスラフ語に翻譯せられたる歴史に於て、猶太、アッシリア(Assyria)埃及、巴比倫(Babylon)の諸王、及び羅馬、君士坦丁堡の皇帝等に與へられたる語にして、彼れ自身より言へば、天壤間復た之に過ぐる者なかりし尊稱なりしなり。否、獨り之れのみならず、彼れは熟ら露西亞王公の以上諸帝王に對する關係を考察し、實際彼れ自身が此稱號を使用するも大に其理由ありと爲し、モスコイの系統が、彼れの祖母ツファイア、パレオロガスを通じてヒザンチンの帝統に接続したりと言ひ得るが如く、彼れは一種の口實を設けてウラヂミル、モノマクを通じ、モスコイ主宰者の系統は羅馬の帝統に對しても、亦た全く無關係にあらざる趣を主張し、既に君士坦丁堡にし

て、第二の羅馬なりと云ふを値ひすれば、モスコイも亦た優に第三の羅馬なるべしと唱道し、圓滿旺盛の稱號の下に、益々其全盛の運命に向ひつゝありしが、其後幾ばくもなく彼れは貴族ロマノフ(Romanof)家の出にして、アナスタシア(Anastasia)と名けられたる婦人を納れて其妻と爲し、從來放肆蕩佚の行爲ありしに管せず、大に檢束を加ふる所あり、朝廷に於ける有司の如きも更らにロマノフ家一門の英を抜き、これを擯んで、大に其員を増し、一時御宇の寧靜なる、民衆は皆な其堵に安んじ、此後不幸にしてモスコイ市民の一部を紛擾驚動せしめたる大火ありしも、時局は忽ちにして再び平靜安穩に歸し、彼れはシルヴェストル(Silvester)なる僧侶に信任して其顧問と爲し、又た貴族アレキシス、アダセフ(Alexis Adashef)なる者を擯んで、内治及び軍政の監督を爲さしめ、別に民の疾苦を知悉して之れが救治の法を計る爲めに各種の請願書を受理することを司らしめ、尙ほ寺院の改良を完成する爲め百箇條の法案を起草し、百度整頓諸般の施設手に隨て擧がり、外康らかに内榮かへ、彼れの御世の間に於て最も幸福なりし時期を求むれば、實に此際なりしと云へり。而して此後ちイヴァン第四世の御世の間に於て起りたる出來事にして、彼れの爲

めに着るしき名譽を博したるものは、夫のカザン及びアストラカンに對する戰勝なりき今其次第を叙すれば左の如し。

是れより先きカザンにはモスコの主宰者に謳歌する露西亞黨とクリミアに於ける蒙古の主權者に左祖する蒙古黨とありて互に勢力の消長を争ひつゝありしが蒙古黨は一時優勝の位地を占めしも、後ち次第に衰滅に赴き、イヴァン第四世の時に至りては、此二黨の盛衰隆替全く其地を易へ、露西亞黨は圓滿の勢力を有して總べての國政を壟斷し遂にスシツク、アレー(Schig-Ale)を立て、其王と爲したりしに、此スシツク、アレーは、暗愚にして無經驗なる一豎子なりしかば、即位の後ち善政嘉謨を講じて民心を攬ると能はず、國內の形勢日に非なりしを以て、カザン人等は今は大に決心する所あり、斯る暗君庸主の下に在りて長へに稅政の憂苦を見るよりも寧ろ直接にモスコの支配を受け、同胞等が堵に安んずる所以を計るに如かずと爲し、遂に使節を派してイヴァンに懇請する所ありたり。是に於てイヴァンは直ちに其請を容れ、總督ミクリンスキ(Mikuliniski)を遣はして其爲政の局に當らしめ誓てカザン人等の望に副はんと企圖したりしが、此時カザンの民衆等は如何なる風

聲鶴唳にや驚かされけん、忽ちにして一種の風説を傳へ、ミクリンスキが大兵を率ゐてカザンに來り、其住民の總べてを屠戮すべしと喧呼し、昨日まで其モスコに對して親密なりし好意を翻へし、今は全く、滿復の敵愾心を以つて露西亞人を待ち、城下の外門を閉鎖して、ミクリンスキ以下の者を入れざりしのみならず、ノゲイに於ける蒙古の一王公を迎へて其主權者と爲し、モスコに對する防戰の用意に各人皆な忙殺せるゝ有様なりしかば、情報に接したるイヴァンも、今は已むを得ずして開戰することに決し、紀元千五百五十二年自ら將としてカザンに進發し、クリミアの蒙古種族が、カザンを援助せしに、管せず、同年九月其地に侵入し、都府を攻圍し、日耳曼の技師某の言を用ゐて外部の城壁を壞崩し、遂に之を陥るれたりしかば、アストラカンも亦た風を望みてモスコの主權を承認し、イヴァンは意外に早く其宿昔の目的を成就し、ヴォルガ河の流に沿ひたる一帶の地を掃清するを得たりき。此の如く露西亞の内部に於ける統一掃蕩の事業は着々歩武を進め、イヴァン第四世は今や殆んど其成さんと欲する總べてのものを成したりしが、得隴望蜀は由來人生の常情にして、殊にイヴァンは一世の傑物なりしかば、其平生の素望も亦た固



より此くの如くにして止むべきにあらず、彼れは露西亞に於ける内部の成功を觀たると同時に、バルチック海及び黒海に通ずる一箇の好海港を得、以て今後は大に西歐と交通場裡に轉旋し、其船舶を招徠し、日用必需の貨物は勿論諸般の機械を輸入し、最新の兵器、銃砲を致たし、實質的利益を獲得する傍ら、所謂文明の風潮に感染して、露西亞の無形的智識も亦た大に之を發達開展せしめんと欲したり。されば當時彼れが懷抱せし冀望は從來彼得大帝が露西亞の改造を成就したる大目的と容ほ同一にして、或る意味に於て言へば彼得大帝は單に彼れか遺志を繼ぎ、更らに一層其規模を擴大ならしめたる者なるのみ。彼れが露西亞の開發に關し、夙に其眼を海港獲得の一事に着けたるもの亦た甚だ機敏ならずや。然れども當時モスコよりバルチックの海濱に至る間には、露西亞の敵たりし者一にして足らず。瑞典あり、リッヅオニアあり、波蘭あり、到底平和の手段を以て此通路を得べくもあらざりしかば、イヴァンは遂に干戈の避くべからざるを知り、此目的を達し得る爲めに、後來屢々此等の者を敵として開戦したり。

斯くて瑞典に對する戦争は紀元千五百五十四年に至りて始めて破裂し、イヴァン

第四世は瑞典の王ガスタヴァス、ツァサ (Gustavus Vasa) と激戦數次に及びたる後ち、憐和の條約を締結し、通商上の事を協定して瑞典の商賈等が露西亞を通じて、印度支那に到り得る代りに、露西亞の商賈等も亦た瑞典を通じて、フランダ (Flanders) 英蘭及び佛蘭西と其取引を聯絡せしめ得ることを確かめ、戦争は豫想外に早く其局を結びたりしか、イヴァンは當時最も銳意熱心に海港獲得の一事に執掌したりしかば、瑞典に於て其志を得ざりし結果、彼れは轉じてリッヅオニア人の手に在るナルツァ (Narva) レヴェル (Revel) 及びリガの (Riga) 諸港を覬覦するの念を起し、隙の乘ずべきあれば大に其野心を逞ふする所以を案じつゝありき。而して紀元千五百四十七年に至り、リッヅオニア人が、彼れが機關師及び技師等を傭聘するため日耳曼に派遣したる使節を妨げ、遂に其使命を全ふすると能はざらしむるや、開戦の口實は茲に充分彼に提供せられ、彼れにして若し外に事なかりしなれば、モスコよりリッヅオニアとの間に於ける干戈は業に既に交へられしならんも、當時イヴァンは偶々カザンの勦滅に従事したりしを以て、遺憾ながらも看す看す好機を逸し去らしめしが、紀元千五百五十四年に至り、リッヅオニアの使節がモスコに來るに及んでは、

彼れは擅まゝに此使節を凌辱し其結果遂にリヴォニア人に開戦せざるを得ざらしめ、紀元千五百五十八年彼れは愈々露西亞の軍隊をして其平昔の望み通りナルツアの港を占領せしめ、尙ほニューホルヘン(Neuhansen)ドルパント(Dorpat)等を陥めしめしかば、リヴォニアのケトルレル(Kettler)は近隣の帝王に向て援助を請ひ、波蘭の王シギスモンド、オーガスタス二世(Sigismund Augustus the Second)は此時其請に應じてリヴォニアと攻守同盟を形成したり。

#### 第十四章

イヴァン第四世(露西亞最初の皇帝、下)

自千五百五十八年  
至千五百八十四年

後來露西亞の文明に偉大の關係ある海港を獲得せんと欲せば、イヴァン第四世は必ず幾場の戦争を賭せざるべからず。然り彼れは非常の決心を以て今や此戦争を開始したり。されば當時若し恐るべき内憂の彼れが前途に當て發生せるもの微りせば、彼れは恐らく速かにリヴォニアに打勝ちて其素望の在る所を成就せしならん。然れども寸善尺魔は人生の常態にして、憂苦のみ多きは由來浮世の真相

なれば、豫期せざりし革命は此の時彼れが宮廷なるモスコーに於て爆裂し、著るしく彼れを撃射して、一時彼れをして全く其精力を此紛擾の鎮定に用ゐざるを得ざらしめ、二豎亦た隨て彼れを厄し、頗る其暴力を逞ふしたりしかば、彼れは天の成せる災厄と人の致せる禍害とを以て備さに困頓を極はめ、天を恨み人を怨みし結果は一種殘忍暴戾の行爲を敢てするに至り、幼時既に千種萬狀の苦楚艱難を嘗めて性癖心術の頑陋猜忌に陥ありたりしに搗て、加へて、益々其執拗酷薄なる程度を増し、遂に其歴史の上、に於て『虐殺の時期』と稱せられたる最も寒心酸鼻すべき一代を現出し、此間に於て無慈悲にも幾多生靈の生命を奪ひ了るに至れり、今其顛末を按ずるに左の如し。

イヴァン第四世が嘗て拔擢して其顧問若しくは行政の監督者と爲したる僧侶シルヴェストルと貴族アマセフとはリヴォニアに對する彼れが戦争に關して端なくも彼れと意見を異にしたり。此意見の衝突は、イヴァンの爲めに決して日常瑣末の出來事にあらざして所謂モスコーの宮廷に於ける豫期せざりし革命なる者は實に此意見の衝突が其導火線と爲りて、遂に潰裂四出して復た拾收すべからざ

るに至れり。リッヴォニア戦争の利害に關してはシルヴェストル、アダセフ等が主張せし所も、イヴァン其人が把持せし所も共に俱に一理ありたれば其孰れか是にして孰れか非なりしかを斷言するは今爲し得べきにあらず。然れども兎に角此くの如くにしてイヴァンと其二人の臣僚との間に不和の念を生じたるは、當時モスコの朝廷の爲めに最も痛嘆すべき事なりしなり。即ちシルヴェストルは、其顧問の職に在りて併せて宗教上一切の事項を掌りしを利用し、此方面よりイヴァンの總べての名譽を毀損し、總べての自由を制限する所以を計り、イヴァンが其愛子を失て悲嘆に堪へざりし際の如きも彼れば無遠慮にも『是れ神がイヴァンの剛愎にして到底度すべからざるを惡み、殊に之を懲罰したるのみ』と唱道し、尙ほイヴァンに對し平生相善からざりし貴族等を説得して密かに一團の黨與を結び、イヴァンの妻にして今は純然たる露西亞の皇后たりしアナスタシアは勿論、クリノスキ、ロマノフの兩族に對しても總べて皆な反抗する色を示したりしかば、アダセフも亦た之に倣ひ、遂に相應援してイヴァンの勢力を剝奪する事に軌掌したり。然れども此時イヴァンは二人の臣僚に對し尙ほ一片の舊情を存し、臣臣たらざるも

君君たらざるの謂れなしと信じ飽くまで寛大の方針を執り、容ほ其爲す所に一任したりが紀元千五百五十三年に至り彼れは不幸にも重もき病癘に冒かされ殆んど九死一生の場合に瀕し再生の程甚だ覺束なかりしかば、茲に彼れは貴族等を要して其百歳の後ち幼子ドミトリ(Dmitri)に従順なるべき誓言を得べき必要に迫られたるに、貴族等は彼れが今や氣息奄々として其命且夕を計るべからざるを觀て、到底其起たざるべきを揣摩し最も大膽に此誓言を與ふることを拒み、彼れの従弟ウラヂミル(Vladimir)を擁して廢立をも計り兼ねまじき姿勢を示し、シルヴェストルは夙に此貴族等の徒黨に加はり、アダセフの一族も亦た同一の行動に出でたり、而して當時形勢の危急なりしはイヴァンの爲めに忠誠を抽んで終始其傍を去らざりし者等に在りても亦た何時病牀に呻吟しつゝある主宰者が暗殺者の兇刃の爲めに斃るゝなきを保する能はざる程なりき。

されば此時イヴァン第四世にして若し病癘の爲めに死歿したりしならん乎シルヴェストル、アダセフ及び其黨與等の爲めには實に無上の幸なりしのみならず胸底の功名心瞬時も休することなかりし夫のウラヂミルの爲めにも亦た誠に萬歳

を高呼して地を蹴て踴躍すべきものありしならんも、不可思議なる哉斯る重病に罹りて一時全く危篤に陥りたるイヴァンは漸くにして其健康を回復したり、彼れ程の善く怒り善く争ひ而かも臣下を待つ最も嚴峻苛酷なりし人物が何とて其復讐を企てずして止むべき、彼れは此後は其御世の終りまで全く愉悅の状態に於てある顔色を臣下に示せしことなく最も荒々しき言語舉動を以て總べての事を嚴命し、宮廷に於ける一切の臣僚を信用せず、恰も單身仇敵の裡に在るが如く行動し、先づ其最も疾悪せるシルヴェストルを天の一涯なるソロヴェトスキ(Solovet)の地に放逐し、アダセフをドルバットに左遷し、其病牀に於て嘗て呻吟しつゝありし當時の苦痛と憤懣とを追憶して恨ある者は一人も之を遺さず、皆な其復讐を敢てしたり、然れども此際、に於ける彼れが復讐は尙ほ幾分か慈悲の分子を含み、殘酷なる中にも未だ必ずしも人をして寒心酸鼻せしむるが如きものあらざりき、彼れがシルヴェストル、アダセフ等に就て自ら記したる所を瞥見せん乎、個中の消息は自ら之を知るを得べし。

人面獸心犬にも劣りたるアレキシス、アダセフ及び其黨與等の陰謀が露見する

や、予は予が激怒を成るべく慈悲の心を以て調和せんと勉め、彼等を罰せしめ、死刑には之を處せずして、只だモスコイ以外の市に放逐したるのみ……  
シルヴェストル及びアダセフの二人に屬せし擾々たる臣下の處分に關しては、予は只だ彼等が此二人の者と同處に群居する事を禁じたるまでにして、予は斯くて彼等をして復た此二人の者を其の首領巨魁なりと崇拜尊敬することを得ざらしめたるのみ、元來此事は予は彼等と誓約を結び、彼等が其誓約に違ひ最も忠實に予が冀望に副ふべきことを願ひたるも、彼等が亡狀無禮なる言に二人の者と隔離せざりしのみならず、彼等は却て總べての手段を通じて二人の者が當日の全盛に回復する所以を計り、甚だしきは予に對して不穩の舉動さへ之を敢てしたりしを以て、予は止むを得ず其の罪過に相當する刑罰を科したるなり。

唾嘗の恨も亦た必ず之を報ゆる所ありしに、管せず當時は尙ほイヴァンが虐殺の慘劇を敢てするに至らざりし事章々たり、而して此恐ろしき虐殺は、實にアンドレイ、カルブスキ(Andrei Kurbski)なる者がシルヴェストル、アダセフの處罰せられたることを非常に憤慨し、最も激烈なる詰問書を彼れに送致して、新たに其逆鱗に觸

れたる後に係れり。

さてアンドレー、カルプスキなる者は何人なりしや、彼は嘗てイヴァン第四世に事へて最も忠實眞摯なる貴族の一人なりしが元來熱心なるシルヴェストル及びアダセフ等の崇拜者なりしかば彼等が現時の境遇を憫み、深くイヴァンの措置に不満を抱きたるのみならず、身も亦偶々、イヴァンの爲めに當時リヴォニアに於ける露西亞軍隊の總大將と爲されたりしに、其疎虞懈怠の罪に依りて忽ち少數の波蘭人に其大軍を殲滅せられ兵士を失ふと莫大にして、一敗の後復た軍氣を振興するに由なく、遁がに歸りてイヴァンに合はすべき顔もなく、遂に密かに波蘭の王に款を通じて降を納るゝとを約し今や方さに其應諾を得て共に與に連衡してイヴァンに對抗する所以を計りつゝある際なりしかば先づイヴァンに其シルヴェストル、アダセフ等を處罰したる行爲に對し、最も嚴格に詰責糾問する所ある書簡を送り、書中に於て揶揄と嘲弄とを極めたる末速かに其波蘭の主權に屈服すべきことを促がし、言辭と云ひ趣旨と云ひ共に頗る傲岸無禮を極めたりしかば當時比較的學者なりとの名聲を博したるイヴァンは此書面を得て怒心頭より發し、咄嗟

之に對する長々しき答書を裁し、以てカルプスキが其書中に於て用ゐたりし言語よりも、更らに數層皮肉なる言語を用ゐ、彼れが己れに叛して仇敵に降りたる没廉耻を罵詈し尙ほ多くの古語古典を其書中に引用して己れが博學なる事を衒ひたり、而して此一刹那彼が意志は忽然として無比の變化を來たし、彼れは驚くべき決心を以て己れに對して反對の側に立つ者若しくは反對の側に立つべしと疑はるゝ者は誰れ彼れの別なく一切皆之を虐殺し去らんと欲するに至れり。所謂『虐殺の時期』とは實に此時代を稱したるものにして彼れを綽名してテリアルと云ひしも亦た全く之を以てなり。

蓋し此時イヴァン第四世が其心に商量したる所は知るべきのみ、彼れ思もへらくモスコイの朝廷は今や全くシルヴェストル、アダセフ等の黨與を以て滿たさるゝに至れり。カルプスキの如きは要するに其一部類たるに過ぎざるのみ、此二人の者が其勢力を樹立せる事は斯くまでに深からざるべしと思ひきや今は到る處に其擁護者を發見せり、若し此黨與を滅絶せずして因循姑息の間に經過するあらん乎、カルプスキの如き者後來益々蹶起して口をシルヴェストル、アダセフ等の

擁護に藉り、跋扈跳梁遂に制御すべからざるに至らん、後患を除くには、一時の非常手段は到底之を避くべきにあらず、然り彼等の總べては皆な之を殺戮せざるべからずと、而して斯く決心したる上にも、彼れは尙ほ持重して未だ輕卒に其虐殺に着手せず、先づモスコイの地を去りて、スロボダ、アレキサンドロン(Sloboda Alexandri-)に赴き、モスコイの宮廷は今や陰謀叛逆の府と爲りしかば、復た留り居るに堪はずと稱し、此くの如くにして彼れは巧みに國民の多數を恫喝し、其非常手段を執りて心の儘に行動するにあざれば、自身は最早や斷然モスコイの帝位を去り、露西亞の乾坤は再び之を貴族政治に一任し、貴族等に其無耻の貪婪掠奪を繰返へさしめんと脅迫したりしかば、モスコイ民衆の惶懼は殆んど其極に達し、皆な相率ゐてスロボダ、アレキサンドロンに赴き、叩頭頓首して其退隱の意を願へすと懇請し、百般の施設、一に皆な其意の如く、決行して敢て或は異議あるなしと誓ひたりしを以て、イヴァンは茲に始めて其慘憺なる悲劇を演出して、毫も非難を受くべき恐なき位地に立ち、愈々引續き帝位に在ることに関し、幾多の條件を提出して、悉く其承認を得、當時の露西亞帝國を分て二と爲し、其一部に對しては、自個は只だ一切の監

督權と叛逆者を刑する權とを確保せるのみにて、此以外の細故に關しては、尙ほ貴族等に其容喙する事を許し、貴族等の組織に係る會議の存在せる事を認め、他の一部に對しては、全然自個の施設に係る政治を行ひ、新たに無數の官司を設け、吏員を置き、且つ千人の近衛兵を設けて、嚴重に其一身の保護を計ることと爲したりしが、露西亞に於て此奇なる状態は、紀元千五百六十五年より千五百七十二年に至まで七年間持續し、所謂『恐怖』の時代として知られたり。

『恐怖』の時代に於て行はれたる虐殺の度數に至りては、其餘りに頻繁なりしを以て、到底之を確知すること能はざりしも、犠牲と爲りて非命の最後を遂げたる者は約三千四百七十人にして、虐殺の重なる場合は左の數個なりき。

一、モスコイ大僧正の虐殺 此大僧正はイヴァン第四世が所謂叛逆者を刑するに當り、妄りに容喙する所ありしのみならず、彼れの近衛兵等を憎み、其暴横を彈劾せんとしたりしを以て、遂に虐殺せられたり、大僧正の名はセント、フィリップ(Saint Philip)なり。

二、義妹の虐殺 イヴァン第四世の弟イニョーリは、天性怯弱にして、暗愚なりし

が是れより先き既に死没したりしに、イヴァンは事を以て其未亡人にして即ち自個の義妹たるアレキサンドラ(Alexandra)を虐殺したり。

三、従弟ウラヂミルの虐殺　ウラヂミルは嘗て紀元千五百五十三年イヴァンが病牀に呻吟して、誓言を拒みし貴族等の舉動に切齒扼腕せし際、其擁する所を爲り、機一髮將さにイヴァンを亡き者として自ら立て露西亞皇帝の位に上らんとしたる人なりしかば、イヴァンが之を疾視すること殊に甚しく、遂に其母と共に虐殺の悲運に遭遇せしめたり、此母はウラヂミルが貴族等に擁せられたる時自ら進んで莫大の軍用金を齎出したる者なり。

四、ノヴゴロツドの惨刑　少くとも千五百人の生靈は此處に滅亡したり。

五、紀元千五百七十二年に於ける惨刑　一時露西亞帝國を震懼戰慄せしめたる大悲劇にして、當時モスコイ人、ノヴゴロツド人並に嘗てイヴァンの殊遇を受けたる者數人等皆な屠戮せられたり。

七年間に涉れる『恐怖』の時代は、其概梗以上の如くなりしが、此恐ろしき内訌の際に於ても、イヴァンがリヴォニア人並にリヴォニア人と攻守同盟を形成したる波蘭

の王シキスモンドに對する戦争は繼續したりき、否、否、シキスモンドは、屢々リヴォニア人を援けて露西亞の軍隊を撃破したり、然れども此時既にリヴォニア人は其當年の勇氣を沮喪せしめ、夫のリヴォニア武士と稱せられたる一隊の士群も今は概ね怯懦孱弱にして、物の用に立つべくもあらず、露西亞人に對し連戦連敗、各處に不名譽の事跡のみ多かりしかば、最後に此武士は解隊せらるゝ事となり、リヴォニアは自ら甘んじて波蘭王の版圖に歸して止みたりしが、イヴァンは是れより後ち其唯一の強敵として波蘭王と對戦し、一勝一敗、互に相下らざりしが、其後彼れは波蘭に於て志を得る事の到底至難の業たるを察し、暫らく此地より其手を引かんと欲し、リヴォニア王の稱號を以て丁抹の皇子マクナス(Magnus)に與へ、尙ほマクナスに嫁するに其嘗て虐殺したるウラヂミルの女を以てし、斯くてマクナスをして専ら此方面の事に當らしめたるに、マクナスは久しからずしてイヴァンに對し或る陰謀を企てしかば、彼れは直ちに之を廢し自ら軍を率ゐて再びリヴォニアに進發し、一回兩回波蘭人等を破りたりしか、此時クリミアに於ける蒙古人等はイヴァンに對して戦争を開始し、蒙古種族の軍隊等は或る時の如きはモスコイに侵入

して其大部分を焼き、頗る猖獗を極めたりしを以て、彼れは之れが爲めに少時間其力をリッゾオニアに専用することを得ざりしも、雖がてシギスモンドも病を以て死没するに至りたりしかば、彼れは當時ツルソー(Warsaw)に於て貴族の一黨が己の子を推戴して新たに波蘭の王と爲さんと謀議しつゝありしに、乗じ自ら其王位に上り以て露西亞波蘭の統一を計らんと夢想する所ありしが、其後ステファン、バトリイ(Stephan Batory)が波蘭の王と爲るに及んでは、勇悍にして善く兵を用ひ、數度の戰場に總へて、皆な露西亞人を撃破し、其嘗て奪取したる土地を回復したりしかば、イツァンは到底其敵すべからざるとを覺知したるのみならず、齡亦た次第に老境に及び、長へに攻城野戰の勞に堪ゆること能はざりしを以て、遂に羅馬法王クレゴリー第十三世(Gregory the Thirteenth)に請ふて露西亞と波蘭との間に於ける確執の調停を依頼し、紀元千五百八十二年に至り始めて、彼我兩國間に休戰の條約を締結し、彼れは此條約に依りてポロトスク及びリッゾオニアの地を波蘭に與へ、其バルチック海に達する一門戸を得んどの素望は斯くて、全く失敗に歸して止みたり、而して夫の彼得大帝が異日彼れの遺囑を継ぎ、遂に能く其目的を達したるは實に此時より

百五十年の後なりき。

人生萬事意の如くならず、イツァン第四世は露西亞の爲めにバルチック海の濱に通ずる一港を得んと欲し、拮据經營殆んど其半生の精力を傾倒して、執掌したりしかど、如奈せん時未だ利あらずして、其計劃は空しく一場の幻夢と化し去りしが、尙ほ彼れは當時未だ全く失望するに及ばずして、バルチック海の方面に於て失敗したる代りに、偶然にも白海の方面に於て成功したり、勇悍なる英國の探險者等が此時白海を通じて、ドニールバルの河を溯り、モスコイの朝廷を訪ふて、其通商上の關係を成立せしめたる事是れなり、今少しく之に就て記する所あるべし。

エドワード第六世(Edward the Sixth)の統治の下に在りし英國は一般に皆勇悍なる冒險家を輩出せしめ、各地の探險に従事せし者多かりしが、紀元千五百五十三年に至り、此探險者等の一隊は三艘の船を續して遠く北東の天涯地角を究めんと欲し、彼等は航行幾年、孜孜として忘らざれば必ず支那に達し得べしと信じたりしを以て、纜を解て意氣軒昂直ちに一瞬千里の勢を以て、其船の進行を始めたりしに、思ひきや中途にして颶風に遇ひ、探險者を載せたる三艘の船は互に分離し、中には憐むべ



き末路を遂げたる者もありしが其一艘は能くラポニア(Laponia)及びハリリーゲル(Holy Cape)等を廻りて當時探險者等が未だ曾て知るを得ざりし一大海に入り尙ほ溯洄すると數日にして岸上に輪煥たる一寺院を有する大河の口に達したり、抑も此大海と大河とは何の海何の河にして輪煥たる寺院は何の寺院なりしや、寺院は是れセントニコラスの巨刹、河は是れドニイバルドニイバルの流、海は是れ汪洋たる白海にして、彼等は今實に露西亞皇帝イヴァン第四世の版圖に入り來たるなり、斯くて新來の探險者等はモスコに到りてイヴァンに謁し、エドワード第六世の信書と稱するものを捧呈し、遂に通商上の事を協定したり、而して是れより後ちイヴァンは常に英國の主權者と親密の關係を有し、殊にエリザベス(Elizabeth)女王とは最も圓滑なる交情を持續し、瑞典波蘭等の強敵に對して、彼女と攻守同盟を締結せんと提議したる程にして、此議は英國に於て聽かれざりしも、當時英露兩國使節の往來は引きも切らざりしと云ふ。

イヴァン第四世の御世に於ける最後の出來事は其西伯利亞に對する戰勝なりき、是れより先きイヴァンはカマ河の畔に於て方九十二哩の地を劃してクレゴリー、

ストロゴノフ(Gregory Stroganov)なる者に與へたりしに、ストロゴノフは此地に於て市街を創設し、烏拉爾の鑛物を採掘し漸次西伯利亞の地と觸接するに至りたりしが、彼れは由來慄悍にして進取の氣象に富み恰も當年の西班牙人の如くなりしかば、遂に此一帶の地を征服せんと欲し、イヴァンに請ふて其力を借らんことを依頼したり、然るに此時ドン河の畔にも亦た各種の部落ありて頗る慄悍を極はめ、敢て露西亞皇帝の威風に服せざりしのみならず、往々旅客を掠奪しドン河を上下する船舶を捕獲し、イヴァンの怒を挑發したるもの一回兩回にして止まざりしが、恰も好し其酋長の一たるコザック、イルマク、チモーフネチモーフネ、オサック、イマク、ティモフェヴィチofevitchなる者は、當時新たに彼れに請ふて其既往に於ける罪過を赦免せられストロゴノフを助けて西伯利亞征討の舉に努力する所ありたりしかば、其成功は意外に容易にして西伯利亞はイヴァンの晩年に於て遂に露西亞皇帝の版圖の一部を形成するに至れり、而してイヴァンは紀元千五百八十四年に於て死没しぬ。

## 第十五章

### イヴァン第四世死後の露西亞

自一千五百八十四年  
至一千六百八十二年

以上叙し來りたる所に依りて之を觀れば、イヴァン第四世の御世は兎も角も露西亞の爲めに名譽ある歴史なりき。彼れが殘忍酷薄にして人を殺すに果斷なりし一事は固より彼れの爲めに攻撃非難の矢を集むるもの莫大なりしと雖も、這は只だ彼れが個人としての道徳性行に缺點ありし所以なるのみ、彼れがイヴァン第三世の遺圖を繼ぎて益々露西亞の統一を完成したる事、モスコイ大公の名稱に満足せずして始めて露西亞皇帝の稱號を用ゐたる事は、實に彼れ自身の爲めに光輝ある事跡なりしのみならず、亦た誠に露西亞の歴史に於て誇耀すべき事實なりしなり、然れども斯る名譽あるイヴァン第四世の御世も其死後に至りては忽ちにして紛糾擾亂を極はめ、彼れが始めて保有したる露西亞皇帝の位は一時野心ある貴族の篡奪する所と爲り、引續き史家の所謂「多難の時代」なるものを現出し、黑暗なる僧侶若しくは無名のコサック人、猶太人すら驟起して露西亞皇帝の大位を覬覦し能く

其目的を達し得たる程なりしかば、其露西亞の尊嚴を冒瀆し體面を毀損したるもの限りなく、此前後の時代を對照して兩々相比較し來れば實に月窟雲泥も啻ならざる差違ありしを觀るべし、今斯る紛糾擾亂の時代及び其前後幾年間に於ける露西亞歴史の概要を摘録して左に之を掲ぐべし。

一、フェオドール、イヴァノヰチ(Fedor Ivanovich)の御世 イヴァン第四世の嗣子はフェオドール、イヴァノヰチにしてイヴァンの死後紀元千五百八十四年より千五百九十八年に至るまで露西亞皇帝としてモスコイの朝廷に君臨したりしが、彼れは其資性恬退寡慾にして富貴を喜ばず、切名を願はず、平生の心事動作一も「テリブル」の綽名を贏ち得たるイヴァン其人の繼承者たるに適するものなく、之に加ふるに彼れは其習癖沈靜にして往々喧囂煩雜なる塵世を厭ひ青山綠水の欲する所に任せ超然として脱俗遁世し去る意志ありしかば、イヴァンは其在位の日に於て、既に深く彼れが已れに肖ざること慨し豫じめ其輔佐たるべき五人の貴族を指名したりしに、此五人の中の一入たるボリスゴドノフ(Boris Godunov)はフェオドールの死後、遂に露西亞皇帝の位を

篡奪したり。

二、ボリス、ゴドヌノフの時代　ゴドヌノフはフェオドールの皇后レナ (Rena) の兄にして、彼れはイヴァン第四世が己れを擁護してフェオドールの輔佐たらしめし以來胸中常に一種の野心を懷抱し、其目的を達する爲め劃策經營毫も怠る所なかりしが紀元千五百九十八年に至りフェオドールの死するに及び彼れは遂に其宿昔の目的を成就して露西亞皇帝の位に上り、紀元千六百五年に至るまでモスコイの朝廷に南面して支配の權を掌握したり。而して是より先きフェオドールにはドミトリ (Dimitri) と名づけられたる一人の弟の尙ほ襁褓の裡に在る者ありしが、ゴドヌノフはフェオドールに説くに、其將來必ず陰謀の張本たるべきことを以てし遂に彼れをウグリツチの僻邑に移し、尙ほ紀元千五百九十一年に至り執念くも暗殺者を派遣して之を殺さしめたり、斯くてアンドレイ、ボゴリユフスキの子孫たるモスコイ王公の系統は茲に全く斷絶し、其素性來歴を探討すれば比較的卑賤なりし他の系統は新たに露西亞帝國を支配することゝ爲りぬ。

三、ドミトリの時代

ゴドヌノフの御世の末路に當りて端なくも道塗に説を爲す者あり、曰く「ウグリツチに於て不幸にも刺客の兇刃に斃れたる者は其實ドミトリにあらずして彼れは當時身代りを立て、此不慮の禍を免れ今尙ほ健在しつゝあるのみならず、不日將さに兵を率ゐてモスコイに入り其正當なるフェオドールの繼承者たることを主張せんとす」と、斯くて此所謂ドミトリと稱せる者は臆がて現はれ來り、篡奪者たるゴドヌノフの死後、モスコイの市民がイヴァン第四世の遺れ形見を見ることゝして只管隨喜の涙に咽び其歡迎に狂奔しつゝありしに乘じ、咄嗟軍隊に擁せられてモスコイに闖入し先づゴドヌノフの妻子を屠戮し、直ちに『萬歲』の聲雷の如く湧く裡に露西亞皇帝の位に上りたりしが、元と是れ一場の狂言たるに過ぎずしてドミトリは固より既に死したることなりしかば其賸物なる事は須臾にして發覺し來り大なる詐欺師はモスコイに入りて未だ三句の日子を経過せざるに早くも既に萬衆怒罵の中心と爲り、甚しきは直ちに彼れが肉を啖て以て甘心する所あらんと疾呼する輩さへありしかば彼れも初めの擬勢に似もやらず頗る周章狼狽を極

はめ、最後に暴徒の彼れに對して蜂起する者遠近相望み、遂にヴァシリ、シユイスキ (Vasilii Shuiski) なる者は等總べての暴徒の巨魁なりと稱し、忽ち兵を靡きて彼れを攻めたりしかば、彼れは爲すべき術もなく、忽ちにして慘殺せられたりぬ、而して此詐欺師の本名は實にグレゴリー、オトレビーフ (Gregory Orpich) にして、彼れは年尙ほ若き一僧侶の實に昨涯なき野心を其胸裡に貯藏したる者なりき。

四、ヴァシリ、シユイスキの時代　グレゴリー、オトレビーフの死と共に露西亞皇帝の位は空虚と爲りたりしが、ヴァシリ、シユイスキは自ら取て此稱號を僭したりしが、當時彼れは齡既に五十を過ぎ、精力漸く涸渇して意氣復た奮に似ず、百般の施設動もすれば倦怠の念を生じ、隨て即位後民衆の輿望を繋ぐ所以のもの一に皆な闕如たりしかば、さらぬだに民心の離叛日一日其激甚を加へつゝありし際、此時露西亞皇帝の正當の繼承者たりと露言する者二八再び突然として現はれたりしを以て、モスコの市民は其先きにオトレビーフに欺罔せられたる大耻辱ありしに管せず、今も亦た狂奔して之を歡迎し、其後二人

の中、エオドルの遺子ピートル (Peter) なりと呼號せる某サツタ人は幸にして滅亡したりしも、他の一人にしてオトレビーフと同じく尙ほイヴァン第四世の遺れ形見なるドミトリなりと僞稱せる某猶太人或は露西亞人なりとも言へり、は波蘭の王シキスモンドの援助ありたる爲め、其の勢頗る猖獗を極はめ、忽ち大軍を驅てモスコに前進し、地をトユシノ (Tushino) に卜して新政府を創設し、シユイスキが露西亞皇帝なりと稱せる傍らに於て別に第二の露西亞皇帝なりと號し、露西亞に於てはモスコの皇帝とトユシノの皇帝と兩々相對峙して其朝廷を有し、殆んど天に二日あるが如き觀ありしが、最後にシユイスキは瑞典に援を求めて其應諾を得、以てトユシノの皇帝に頻りに大打撃を加へたりしかば、シキスモンドは時局の決して袖手傍觀すべからざるを察し、トユシノの皇帝を排除して自ら進んでシユイスキに對する當の敵手と爲り、能ふべくんば、其子ヴァチラス (Vladislas) を以て露西亞の皇帝たらしめんと欲し、銳意熱心に其方畧を講じ、露西亞の形勢は頗る危殆にして時事日に非なりしかば、モスコの市民は憤慨措く能はず、蜂起して各處に集屯し、遂に

會議を開きて時難の救済策を討議し其結果としてシユイスキは讓位の事を要求せられ遂に之を聽かざるを得ざるに至りき。此シユイスキの御世の後半期は所謂『多難の時代』なりき。

五、ミケル、ロマノフ (Mikhail Romanof) の御世 斯くてシユイスキの讓位後モスコの貴族等は、一時相談會を開き政治上一切の事項を議定し以て施政の局に當りつゝありしが、彼等も何時まで斯くてあるべきにもあらざりしかば、纏がて新らしき露西亞皇帝を人選すべき必要に迫られたるに、此時夫のトユシノの露西亞皇帝は尙ほ依然として其位地を持續しつゝありしのみならず、波蘭王の子ツラヂスラスも亦た夙に其候補者の一人として現はれたりしかば、彼等は稍々顧慮する所ありて未だ遽かに決する所あらざりしが、其後偶然にもトユシノの露西亞皇帝は暗殺者の兇刃に斃れたりしを以て波蘭王も今は既に其兵士を露西亞に駐屯せしむべき口實を失ひたると同時に露西亞人の敵愾心は一齊に皆な波蘭人に向て挑發せられ、其結果遂に國民全體の騷起となり老幼婦女すら皆な『モスコの附近に高視闊歩して傍若無人の舉動を敢て

しつゝある波蘭人等を勦滅せしめよ』と長叫せざるはなく、戦争各處に破裂して幾場の慘劇を演出したる後、モスコは全く波蘭人の毒手を離れ、露西亞人等は紀元千六百十三年に、至り國民の大會議を開き、茲に始めて新らしき露西亞皇帝を選定することゝ爲り、之を選定するに關しては一切外國人を採らざることに決し、夫のイツァン第四世の御世に於て一度頗る時めきし貴族ロマノフの後裔たるミケル、ロマノフは、殆んど全會一致を以て指名せられ、斯くて所謂『多難の時代』なるものは漸く其終了を告ぐるに至りぬ。而してミケル、ロマノフは此時其齡甫めて十三にして爾後紀元千六百四十五年に至るまで、露西亞皇帝として其支配を繼續し、『多難の時代』に於て全然破壊し了せられたるモスコの朝廷の秩序と紀律とを回復し、波蘭に對する戦争の局を結び更らに西歐諸國と外交上の關係を成立せしむることに拮据執掌したりき。

此時代に於て最も奇觀なりしは夫の露西亞國民の大會議 (The States General) なりき。此大會議は元來イツァン第四世が始めて之を召集したるものにして、當時イツァンは僧侶貴族及び商賈の三階級より各々其代表者を出さしめ以

て之を開催したりしが、爾後此會議は何れの時代に於ても必要ある毎に必ず召集せられ、夫の露西亞皇帝を選定するが如き重要な場合には例として之を開き、以て其人を決定せざるはなかりき。蓋しイヴァン第四世の如き極端なる獨裁君主の治下に於て這般の會議を見たるは最も奇異に感ぜらるゝ所ならずや。

六、アレキシス、ミケロウヰチ (Alexis Nikhlovitch) の御世  
ミケル、ロマノフの子はアレキシス、ミケロウヰチにして、其支配は紀元千六百四十五年より千六百七十六年に至るまで繼續したりしが、彼れが御世の重なる出来事は從來有り觸れたる波蘭及びユサク等、等に對する争鬭の繰返しなりしも、今爰に之を一々するは到底其煩に堪へ得べきにあらず、而して彼れの死後は其子フェオドール、アレキシウヰチ (Feodor Alexievich) 代て露西亞皇帝の位に上り、紀元千六百八十二年に至るまで其支配を繼續したる後、露西亞の歴史は夫の有名なる彼得帝の御世に到着しぬ。

### 第十六章 彼得大帝(露西亞の改造者上)

其出生 其即位 自千六百八十二年 至千六百九十二年

露西亞皇帝アレキシス、ミケロウヰチ胸懷悒鬱として樂まず、紀元千六百六十九年、世は春と唱へて花笑ひ鳥歌ひ人の心も坐ろに浮き立つの候何事ぞ一室の裡に閉ぢ籠り外出だも爲さずして徒らに愁の眉のみ擧めぬ。事果して何に困りしか、彼れは實に最愛の皇后マリヤ、ミロスラヴスキ (Maria Miloslavsk) を失ひて人生の無常を觀じ、心緒紛々遂に狂亂するまでに悲哀の深淵に沈淪したるなり。されば此時彼れが左右に侍せし者は勿論、内宮外廷の臣僚誰れ一人として孤獨の皇帝を慰藉する所以を考へざるはなく、皆な其肝膽を碎きて氣鬱病に罹れる一人を救治せんと努めつゝありしが、當時彼れが優渥なる信任を博し所謂外務大臣の位地に在りしマトウヰフ (Matveev) は其平生殊遇を受けつゝありしだけ、衆に挺んで一倍此點に苦慮する所あり其結果として漸く一策を案出したり。何ぞや、彼れを私邸に請し妙歌清舞山珍海味極めて盛大なる宴會を張り以て其萬斛富ならざる幽愁を掃蕩

せんと欲したることは是れなりき。然れども此時アレキシスの氣鬱病は殆んど其極に達し悶々愁々覺に自ら禁ずる能はず果ては寢食さへ安からずして一室の外に出づる事は總べて皆な之を懶しと爲したりしかば彼れは容易く此招待に應ずべくもあらず。『歌ふ人の剛腕たる美音を聴くも何かせん舞ふ者の婆娑たる妙姿を観るも何かせん況んや日常有り觸れたる臆羞に於てをや。それも亡き人の此世に在る時なれば相携へて臨御するを得るが故に亦た聊かの興味もあらん乾坤落々朕が身一つとなりたる今日に於ては歌を以てする勿れ舞を以てする勿れ朕が眼は今尙ほ亡き人の面影を髣髴の間に視つゝある外復た他を視ざるなり朕が耳は今尙ほ亡き人の過ぎにし夜語りたる陸言を依微の裡に聴きつゝある外復た他を聴かざるなり。己みなん己みなん朕は断じて宴會の席に赴かじ』爾かく當初彼れは實に其心中に獨語しぬ。されど彼れの爲めに忠貞實なる外務大臣の招待も亦た無造作に拒絶せらるゝものにあらず懶き心はあらゆる方便を以て勵まされたり進まぬ思は總べての手段を通じて勢づけられたり斯くて彼れは豫定の日を以て遂に外務大臣の心を籠めたる宴會に赴きぬ。

宴會の綱領は一通り既に行はれたり。席に待する者は皆な氣鬱病に罹れる一人を慰めんとて故らに融々和樂の態を装ひ勉めて興味を添ゆる所以を計りたり。然れども試みに眼を擧げて他の顔を一瞥せよ笑ひもせず言ひもせず依然苦々しき面色にて其眉目の間を檢すれば歴々として奏樂も面白ろからず舞踏も嬉しからず他人が余を慰めんとて狂奔する程余は益々悒鬱を感ずるなり世に宴會程詰らぬものはあらずと云ふもの讀み得られぬ。果して如何にせば可なりし。咄々怪事此黯澹たる殺風景の裡に於て形勢は忽ち一變したり。過刻まで意氣銷沈し盡くして半ば既に死したるが如くなりしアレキシスは今や端なく一縷激烈の電氣に感觸したるが如く見へき。彼れが堅く結びて開かざりし唇は突如として綻べり笑ひもするなり言ひもするなり。見よ其青白くして枯槁したる雙頬は時ならずして微紅を潮し何となく光澤を添へたるが如きにあらずや。アレキシスをしつて爾かく轉瞬の間に別人の如く爲らしめたる怪物は果して何者ぞ。

外務大臣マトツヅカアの許にナタリアナルイシエキン(Natalia Narushkin)と呼ばれたる妙齡可憐の一佳人ありき。其先穉粗種族に出で嘗て露西亞の某地方に於て大

地主として世に時めきたることもありしが、今は次第に零落して世にも人にも知らるゝことなく、漸くマトヅキフに僅かばかりの親戚の因みありしに由り身を寄せて其邸内に起臥しつゝありしが、此日も偶々マトヅキフの命を受けて宴會の席に周旋しつゝありしに、料らざりきアレキシスは彼女を瞥見して其新らしき愛に陥り、今は遂に其心に思ふ色を機微に現はさるを得ざるに至りき。黒き髪黒き眼而して丈け高き姿、種種族の佳人は別に一段の趣味あり、アレキシスは實に彼女を瞥見して故後の事を打忘るゝまでに其新たなる愛に陥りたるなり。

マトヅキフは頗る一驚を喫したり。「不可思議なる事は不可思議なる邊より起るもの哉、心盡しの宴會を張りて孤獨悒鬱に沈める皇帝を慰めんとこそ計りたれ、我が親戚たる兒女を一天萬乗の至尊に參らせんとは夢にだも思はざりき、而かも亦た事既に此に至りたれば詮方なし、若し皇帝が縁りて以て其愛を忘れらるゝ契ともならば却て幸甚なり」彼れは其家族に向て先づ此くの如く物語りぬ、斯くて女徳極りなしと云へる諺に漏れず、寧ろ一浪人の娘と稱ぶ所なかりしナルイシユキンは遂に露西亞皇帝アレキシス、ミクローヅキフの第二の皇后として冊立せられたり、

而して皇帝と新后との交情は固より言ふまでもなかりき。

人間萬事心と違ふ、是れより先き露西亞名門右族の麗はしき兒女を持てる輩は皆な心筋かにアレキシスの第二の皇后の冊立せらるべきを知り、人にとこそ言はね胸中には「我家の佳人こそ其選なれ」と獨語して、雖もがて星期の卜せらるゝを待ちつゝありしに、思ひきや思はぬ新后は思はぬ方面より現はれ來り、折角の冀望も哀れ水上の泡沫と消へ果てぬ。而して女は醜美となく宮に入りて皆な嫉まるゝ者なるに况んや、嬋妍窈窕を以て至尊の眼に留り、幾多巾幗を失望落膽の悲境に沈淪せしめて、挺然獨り宮に入りたるナルイシユキンに於てを、第二の皇后に冊立せらるゝ前も冊立せられたる後ちも、幾場の讒誣擠排に遭遇して遂に夫のマトヅキフにまで幾度となく迷惑なる攻撃を蒙るに至らしめぬ。然れどもアレキシスは決して是等の言に傾聽して彼女を疎外する者にあらず、其膠たり漆たる情は愈々益々厚きを加へ、紀元千六百七十二年六月九日午後一時、一片の告示は夙にモスコの楓宸を下りぬ、曰く「新后ナタリア、ナルイシユキン皇子を分娩せられ母子共に健全に亘らせらるゝ」と。斯くて芝蘭荆棘の叢に在りて幸に害せられず、温良險惡の群に處



して竟に傷はれず、今やナルイシユキンとアレキシスとは其相慕ひ相思ふ情の聯鎖として、愛らしき一塊の肉に恙なく呱々の聲を放て、此世に生れ出でしめたり、兩個が喜びや知るべきのみ。

彼得大帝とは素性如何なる人なりや、實にナルイシユキンが今始めて分娩したる皇子にぞある。彼れは言ふまでもなく露西亞を改造して世界的大帝國たらしむる基礎を創設したる者なり、己れの生存せし日より二百年後の今日に至るまで未だ曾てあらざる雄圖の模型を貽し、其子其孫に歴代皆な遵奉して敢て或は怠る所あらざらしむる者なり、十九世紀の剩殘の曆日幾ばくもなき即今露西亞風が頗る東亞の天地若しくは歐羅巴の乾坤に吹き荒むも、檢し來れば亦た皆な彼れが細張りしたる雄圖の餘業なるのみ。思へば今生れたる韃靼婦人の赤子こそ眞個に驚天震地の大事業を成就したる豪傑なれ。而かも亦た其露西亞に生れ來りたる所以を釋ぬれば如何に偶然に似たるものあるよ、偶然に似たるは即ち天命の夙に歸せる所以なるか、彼得大帝は誠に思懸けなく生れたり。

斯くて露西亞皇帝アレキシス、ミケロヴチの死後はモスコの朝廷には故后ミ

ロスツラスキの一門と新后ナルイシユキンの一門と、互に黨派を樹て品流を分ち各々其門より出でたる皇后の子を立て、大位を繼承せしめんと争ひしが、兎に角ミロスラツスキの子フェドールはアレキシスの長子にして露西亞皇室の典範上其大位繼承者たるに於て些の疑を挟むべき餘地なかりしかば、身軀の脆弱にして到底政務を視るに堪へざりしに管せず、一時所謂九五の位に上りたりしが、彼れは不幸にして其の後幾ばくもなく暴死したりしかば、新舊二后の一門が帝位を争ふ所以のもの、は茲に再び激甚と爲り、ミロスラツスキ家の一族は是非ともフェオドールの同母弟イヴァンを立て、アレキシスの第二の繼承者たらしめんと努めたりしも、奈何せん天未だ彼等に社せざりしか、イヴァンは其兄フェオドールよりも身軀更らに一層の孱弱を覺ぼへ、且つ不治の眼病と脚疾とさへありたりしかば、到底彼等が望に副ふべくもあらず、况んや此時他の一方を顧みればナルイシユキンの出たる彼得は其齡僅かに九歳なりしに管せず、天縱の英資早くも既に其才氣を煥發して俊邁靈活の氣象殆んど其匹儔なく、前途誠に洋々たる望ありしを、十目の視る所十指の指す所復た争ふべくもあらずしてフェオドールの繼承者は遂に彼れ

を推すことに決し、ナルイシニキンは新たに攝政の位に上り、實際總べての政務を其一身に綜攬することゝ爲りぬ。されば此時ミロスラヴスキ家の面々にして何事も只だ天命の歸する所なりと諦め、専心一意モスコイ朝廷の無事平穩を計るに急なりしならん。平時局は全く平和の裡に進行したりしならん、而かも私門の榮達を計りて個人的野心を遂行するに汲々たりしは、由來此時代に於ける貴族等の通弊なりしかば、彼等は難がて恐ろしき陰謀を企て、遂にモスコイの各所に血を流す叛亂の教唆者使喚者と爲り、眼病と脚疾との爲めに平生殆んど廢人と一般なりしイヴァンは固より彼等が統領として縦横無盡に其胸臆を施設する大人物ならざりしも、故后ミロスラヴスキの子は、男性の者に於て、有爲の傑物を出だす能はざりし代りに、女性の者に於て優に其缺を補ふに足る人豪を見、フェオドールとイヴァシとの外に六人の姉妹ありし中、此の時始めて二十五の青春を迎へたるソフィアは、雄才大畧ありて頗る政治上の驅馳操縦を嗜み、復た深宮の裡に靜坐して畫眉是れ耽る尋常一様の皇女の流にあらざりしかば、彼女は其露西亞皇帝の子と生れたる思出に、一度必ず同皇帝の位に上り以て全露西亞を支配せんと欲し、遂に紀元千

六百八十二年に至り、イヴァン及び彼得の二人をして名義上共同して露西亞の皇帝たらしめ自ら進んで二人の者の攝政と爲り以て爲政の實權を其の織手に掌握したり。而して是れより後ち彼女は露西亞の内治外政總べてのものを殆んど其心の欲する儘に施設しつゝ、ありしが彼女は屢々彼得の旨に悖り剛愎執拗にして、毫も其言を用るざりしかば、彼得も今は大に激怒を發し直に其母后ナルイシニキシと共に其住み慣れしモスコイの金殿玉樓を去りて南の方約三里なるプレオブラズヘンスコイ (Preobrazhenskoe) の一村巷に引退したり、而して是れより後ち數年間彼得が境遇は頗る慘澹落窶を極めぬ。蓋し此時彼得が爾かく果斷にもモスコイの宮殿を辭し去りしは、或は此くの如くにして當時餘りに我儘氣隨なりしソフィアを懲らしめ以て少しく其の改悛の實を擧げしめんと意なりしやも知るべからず。然れども跋扈跳梁悉く其爲さんと欲する所のものを爲し眼中復た一人なかりし彼女は、何とて這般の事の起りたる爲め逡巡遲疑して其志を驕へすべき。彼女は嘗に彼得に對してモスコイに歸り來るべき事を請はざりしのみならず却て彼得が其眼前咫尺に在らざりしを幸

とし従來に比して更らに一層其傍若無人の行爲を敢てしたりしかば、勢地に趨走して權家の鼻息を伺ふに汲々たるは由來古今東西を通じて其揆を一にする人情の常なれば、ソフィアを謳歌し崇拜する者は日一日其の多きを加へ來る傾ありしに反し、レオオブラズヘンスコアの荒村覺束なき居宅を構へ昨日の榮耀榮華に引換へ今日は最も物憂き日月を送りつゝありし彼得若しくは其母ナルイシユキンは、既に全く世人の記憶より抹殺せられ僅かに其左右の者數人と共に世情人心の輕薄陰險なることを嘆む面白からぬ光陰を送りつゝありき。然れども艱難汝を玉にすとは古今の金言、後來彼得の爲めに言ふ者は此數年間に涉りし荒村僑居の生活を以て彼れが却て大に其志氣を鍛練し躰軀を強壯ならしめたる所以なりとなし、當時深遠なる露廷の内部は全然腐敗と墮落とを極めたりしかば、モスコアの宮廷に鬱積せる香薰を嗅ぐは固よりモスコアの郊外に面を掠むる清風を呼吸するに如かず、彼得にして若し不慮の出來事の發生することなく、盡頭極尾モスコアの宮廷に生長したりしなれば、彼れは縱ひ天資の極めて卓絶なるものありしにもせよ、其俊邁靈活の氣象は或は大に之を望み難きものありしならんに、此荒村寂寞

の裡自然的不羈獨立の起臥を試みたる一事が其限りなく天縱の才氣を發達開展せしめたる大原因なり』と言ひき。

子供として彼得は甚だ異りたる者なりき。レオオブラズヘンスコアに於ける僑居の時代は彼れは尙ほ十歳前後の小兒にして紙鳶竹馬嬉々として村巷に遊戲する程の頑是なき者にもあらずりしかど、其未だ童態を脱出する能はざりしは言ふまでもなき事實なりき。而かも彼れが好尙は此時より既に一般の兒童等とは頗る其趣を異にし、彼れは小なる弓、短き箭、厚紙にて製したる鐵砲、木にて造りたる槍、其他總べての武器の外一切の玩弄物を喜ばず。否な彼れは當時其臣僚某が日耳曼より齎らし來りたる着色せる武將の繪を愛玩して殆んど其手を釋かざりしのみならず、左右の者より常に此武將等が事跡の一斑を聽取し、不完全ながらも古の所謂英雄豪傑等が歴史の上に殘したる芳んばしき事歴の概略を知了し、又た嘗に外國に於ける偉人の丕績のみならず、彼れは露西亞其者に在りては従來所謂大王と稱する名を博したる王公、殊に夫のイヴァン、ゼテリナルに就ては最も詳細に其事業の歴史を話され、彼等が攻城野戰の模様より領土擴大の企圖に及び果ては大

なる露西亞統一の事に至るまで、既に幾回となく左右の者より繰返へされ、露西亞の位地を高かめ露西亞の面目を發揮する所以に關しては子供ながらも早くも既に一種の感想を其腦裡に印しぬ。而して尙ほ獨り之れのみならず、此時モスコの市街は淫猥靡麗其俗を爲し時に嘔吐を催ふすべきものさへありしも亦た頗る奇警卓抜の外國人を見、或は瑞典より或は英吉利より或は日耳曼より冒險者を入込ましめしかば、彼得は本來其快活伶俐なる性質を以てして遂に能く是等の人々と觸接する機會を得、其談論說話に依りて新らしき智識を得たるもの夥しく、元と一を聞て十を悟る利發者なりしだけに面白半分己れが遊び仲間を約して歐洲最新の兵式に擬し、最も嚴峻なる紀律の下に行動する一軍隊を編成し若しくは當時に在りて最も進歩したりと評せられし建築術の一斑を聽取し、之に倣ひて直ちに一小堡砦をフレオアラズヘンスコーの近傍に築設したりき。而して其嘗て日耳曼人フランツ・チメルマン(Franz Timmerman)と相携へて、イスマイロフ(Ismailof)の村巷を過ぎりつゝありし際、偶然にも一艘の外國製短艇を發見し平生の好奇心よりして黙止するに忍びず、急に自個も亦た這般の短艇を取扱ひ得るに至らんと欲し、

遂にチメルマンの紹介に依りて當時同じく露西亞に來寓しつゝありし和蘭人ブランド(Brand)なる者を得、新たに同形の一小艇を築造し以てイアウザ(Lauza)河の流に浮べたる一事は最も有名なる事實にして、幼時一度嘗て水に溺れんとしたる事ありしより、河池湖沼若しくは海を恐るゝこと限りなく、橋をさへ畢生復た渡らむと決心したる彼れが、後來醸て海軍の創設者として執掌し身先づ水夫と爲りて努力したりしは、其決心の萌芽實に此時に胚胎せりと稱せらる。

露西亞に旅行する者は今も尙ほフレオアラズヘンスコーの村畔に於て、イアウザ河の岸に一個矮小なる古壘の面影を認むべし、此古壘は何れの時代に於て何人が築設したるものなりや。實に彼得が其部下の遊び仲間を督勵鞭撻して夫の歐洲最良の建築術に倣ひ起工したる者に屬す。一たび笈を曳て、其光景を探討する者は胸懷轉た當年を追思する念に堪へざるべし。

斯くて彼得はフレオアラズヘンスコーの村巷に引退して零ぼ上に叙せしが如き有様に於て消光しつゝありしかば、曠昔に於ける金殿玉樓の榮耀榮華は固より既に一場の夢幻と化し去り、彼れは却て自由にして檢束なく物憂きとは云へ或る意

味に於て頗る愉快なる生活を送りつゝありしが驟て此時に於けるモスコの地位を觀みれば、誠一種奇妙なるものにして、夫の黠猾にして女ながらも野心満腹を以て有名なりしソフィアは、元と攝政と稱するに過ぎずして、正當なる主權者にはあらざりしも今は既に傲然として獨裁者(Autocrat)なりと自稱し、益々其威福を行ひつゝありしが尙ほ且つ其の意に安んずる能はざるものありて、往々首を擧げて天の一涯を瞻望し、アレオブラズヘンスコに彼得及ツナルイシユキンの在ることを回想し、平生大言を放て彼等が能く爲すなきことを豫言しつゝありしに管せず、心算かに鬼胎を懷きつゝありき。而して此鬼胎を懷きつゝある念慮が層一層次第に嵩じ來るに及んでは、彼女は益々彼得及ツナルイシユキンを嫌惡し、遂にモスコとアレオブラズヘンスコとの間をして、反目疾視仇敵も皆ならざるに至らしめたることを、誠には非もなき次第なりしなり、否な彼女は此後幾ばくもなく愈々アレオブラズヘンスコに於ける其競争者を勦滅し了せんと決心し、恐ろしき陰謀を企てしかば、彼得母子の運命は一時頗る危殆に瀕せしが、彼得は由來露西亞改造の大任を受けて、此世に生れ來りたる者なりしかば、未だ輕々しく野心家の

毒手に墮るべくもあらずして、彼れは此時其母后并に左右の者と共に更らに第二の避難所を求めて、トロイツァ(Thotsa)に赴きたりしに、圖らざりき當時彼れが後を追躡して擁護の爲めに隨從し來れる者引きも切らざりしかば、彼れはトロイツァに到るに及んでは既に頗る厯然たる大衆を其麾下に擁し、嘗てアレオブラズヘンスコに在りし際、其自ら編成したる遊次仲間の軍隊は言ふに及ばず、從來其優遇しつゝありし外國人の中にも多數の士官ありしを以て、彼等も亦た事の急なるを觀皆な彼れの爲めに一臂の力を假すことを辭せず、自ら來りてトロイツァの避難所に集合せるは勿論、中には或る手段を以て西歐諸國より最新の兵器を取り寄せ、續々之を供給したりしかば、彼得の聲望は隆々として抗抵すべからざりしと同時に、モスコに於ける陰謀の張本たるソフィアは、事頗る其の豫期せし所に違ひ、己れが黨與と頼みてし人々は、案外皆な冷淡にして容易く其願使に任じ奔馳する者なかりしかば、一切の劃策總べて皆な齟齬し去り、遂に一先づ波蘭に逃れんと企てたりしが、是れさへ未だ事を實行するに及ばずして、彼得の發覺する所となり、攻守の勢今は全く其位地を易へ、遂に彼得の爲めに某寺院に幽閉せらるゝ悲しき身と

爲らざるを得ざりき。而して是れより後ち彼得はモスコに歸り、尙ほ從來の如く其異母兄イヴァンと共に聯帶の名義を以て露西亞に君臨せしが、イヴァンは多病に惱める一個の執事たるに過ぎざりしかば支配の全權は一に彼れ自身に存したり。彼得の齡此時僅かに十七なりき。

### 第十七章

彼得大帝(露西亞の改造者中) 自千六百九十三年至千七百二十五年

アゾフの奪取 廢立の隠謀 歐洲漫遊

土耳其に對する戰爭 瑞典に對する戰爭

冷を去りて熱に就くは古今人情の常なれば彼得がアレオブラズヘンスコーの荒村に引退して怪しき生活を送りつゝありし際之には眼も呉れずして舊臣のモスコに於けるソフィアの許に趨走せる者日々其の踵を接しつゝありしが、此輕佻浮薄表裏反覆俗を爲せる間に於て彼得に對して常に滿腔の赤誠を捧げ、其左右に侍して或は師傅の役を勤め或は友侶の位地に立ちしソトフ(Notov)なる者ありき。絶代の偉人傑士と云ふにはあざざりしが、亦た頗る伶俐滑脱にして一通りの學

識さへ之を備へたりしかば、彼得が彼れを信用せること限りなく殆んど一にもソトフ二にもソトフと云ふものありしが、紀元千六百九十三年八月彼得は此ソトフと共に百餘人の同勢を召し連れてアルカングル(Arunkangel)に旅行したり。而して此處に於て彼れは端なくも從來露西亞の王公等が未だ曾て觀るを得ざりし廣濶なる海洋を觀たり、否な獨り之れのみならず彼れは其身の高貴なるをも打ち忘れ同地に來りつゝありし外國の海軍士官若しくは商賈等と一處に團欒して會食したり、其結果として彼れは西歐の乾坤より來りつゝありし夥しき新空氣を呼吸したり。彼は一種の好奇心に驅られてアルカングルに船渠を築設したり、尙ほ百尺竿頭一步を進め彼れは船を同地の某所に曠し五日間に涉れる航海を試みたり。而して其翌年彼れは不幸にして其生母ナルイシニキンの訃音に接しアルカングルに歸りたる後ちスロヴェトスキ(Slovetki)の寺院に到らんと欲し、再び船に搭じて發程したりしが途中風浪殊に險惡にして殆んど覆没の奇禍に罹らんとしたり、然れども此時幸に船長たりシアンヤン、パノフ(Antip Panof)なる者が船を操縦せること其宜きを得たりしを以て彼れは辛ふじて其事なきを得たり。されば當時彼

一六六  
れも亦た大にアンチン、パノフを徳とし其功勞に酬ゆる所以として特に巨額の年  
金を與へ、且つ災厄の當時に於ける紀念として自ら着用しつゝありし上衣を與へ  
たりしが、此上衣は悉く鹹水を以て浸たされ色大に褪却したりき。斯くて彼得は  
航海の一事に關しては既に頗る危険の運命に遭遇したりしが、彼が決心は尙ほ半  
乎として抜くべくもあらざりしかば彼は此後幾ばくもなく復び海に航してホー  
リケーブを回航したり。蓋し當時彼得の意中を付度すれば彼れはイヴァン第  
四世が嘗て夢想したりし如く露西亞の爲めに是非とも恰當なる一海港を得、此海  
港を通じて西歐諸國と觸接し以て其新元素を輸入せんと欲しつゝありしを以て  
先づ拮据經營總べての手段を盡くして此方面に成功せんと欲し、遂に身親しく船  
に搭じて各所に歴遊したるなり。而かも今ホーリケーブに來て見れば果して  
如何、イヴァン第四世の時勇敢なる英國の探險者等が一度深く進入し來りたる白  
海は臘末春首の交に至れば結氷殊に甚しくして到底船舶の廻洄に堪へ得べくも  
あらず。露西亞の爲に是非とも西歐諸國と觸接する一門戸を得んと欲せば必ず  
白海以外に一個良好なる不凍港を得ざるべからず。バルチック海か黒海か將たカ

スビアン海か、彼得は今や此三者中必ず其一に向て垂涎せざるべからざる場合と  
爲れり、バルチックは瑞典に屬し、黒海は土耳其に屬し、而して裏海は波斯に屬せる  
者、彼は果して何の處に向て其奪奪の手段を講ずべき。人の領土に屬せる者を奪  
取して己れが宿謀を成就する所以に供せんとするとなれば戦争は固より避くべか  
らずとするも、敵を撰擇する一事は成るべく慎重に之を商量せざるべからず。斯  
くて彼得は霎時思案の岐路に彷徨しつゝありしが、是れより先き露西亞が政界上  
并に宗教上の必要よりして波蘭及び埃地利と締結したる條約は此の時端なくも  
有力なる原動力と爲り、彼を使喚德通して土耳其に對して開戦せんと欲せしめた  
るのみならず、當時の君士坦丁堡に對する露西亞與衆の感情を言へば最も不味な  
るものにして、露西亞人等は其宗教上の流義を異にせるより土耳其人を以て所謂  
異端の徒若しくは眞成なる聖教の冒瀆者なりと爲し、攻撃非難の聲殆んど其喧囂  
の極に達したりしかば、彼得は巧みに此機會を利用し、且つ從來久しく西歐諸國に  
漫遊する意志ありしも今は又た熟考の上其新たなる戰勝者として出現するまで  
は暫て不知案内の土地に旅行せざるべしと決心し、愈々土耳其に對して開戦する

ことに決心したり。

然れども此土耳其に對する戦争は彼得の爲めに寧ろ悲むべきものなりき。彼はカリツイン (Galitsin) なる者をして前後兩回までクリミアに對する遠征軍を率ゐて出發せしめたりしが、此遠征軍は不幸にして兩回共失敗に歸して止みたりしかば、彼は大に攻撃の圖を改め、ドン河を下りてアゾフ (Azov) の市を奪取せんと欲し、約一萬人の軍隊を分て數隊と爲し、コロツキン (Golovin) ハーランド (Gordon) レンオール (Lefor) などの將校をして之を統率せしめ、潮の如き勢を以て前進したりしが、其軍隊は一の艦隊だも之を有せずして、アゾフの攻撃は盡頭極尾海に依りて之を行ふ能はざりしと、軍隊を統率して驅馳の任に當たる將校が元來彼得がアレオブラズヘンスコーに於て遊戯三昧に編成したる軍隊に屬し實際戰場に於ける經驗に乏しかりしと、機關師たりし日耳曼人マヤコフ (Majok) なる者が從軍中或る事を以て刑罰を受け其結果己が鑄造すべかりし大砲を鑄造せずして驕て敵軍に逃走したるとに因り、初めの豫期に似もやらず、急に之を抜く能はずして露西亞軍は一兩度攻撃を試みたる後ち到底其容易に陥落すべくもあらざるを觀破し、紀元千六百九

十五年に至り遂に其包圍を放擲せざるを得ざるに至りぬ。而して彼得が爾かく熱心に此アゾフを奪取せんと執掌したるものは是亦た大に其理由の存せる所に於てアゾフは當時露西亞の爲めに實に海に通ずる唯一の要樞なりしかば既に此地にして露西亞の掌中に歸するあらん乎、彼得は其宿願を成就するに甚だしき困難を感ぜざるべしと思惟したりしなり。而かも此の如き重要な目的を以て遂行せられたる遠征も今や漸く失敗に歸して終らんとす。軍中に在りし彼得自身は言ふに及ばず其親近の徒輩も亦た大に焦心苦慮せしもの殆んど言語の外にありしと知るべし。

彼得は幼少の頃より最も深く軍事的遊戯を好み、其アレオブラズヘンスコーに赴くに及んではさらぬだに活達なりし性質は、更らに一層無檢束と爲り殆んど連日の如く附近の山野に跋渉して其所謂行軍なるものを演じつゝありしが、此時露西亞の軍隊は概ね皆な傭兵にして就中日耳曼人を其最多と爲したりしかば、後來領土擴大の目的を達し得る爲には先づ其必要條件として軍隊の改造を完成せざるべからずと打算したる彼れは、地をアレオブラズヘンスコーに密邇



せる某所に卜し殊に其心を籠めて抱へつゝありし日耳曼士官等の爲めに一定の住處を與へ其名さへ之を『日耳曼郭』と呼び以て益々外國の士官等を招致する所以を計りたりしかば此後幾ばくもなく西歐諸國の總べての者より殆んど其來朝者を觀ざるはなかりき。されば今回のアソフに對する遠征に於ても其重もなる露西亞の將校は一に皆な外國人にして、ゴールドンは英人、レフォールは佛人なりき。而して彼得が爾かくブレオブラズヘンスコイに於て上は重もなる將校より下は少たる一兵卒に至るまで之を招徠編成して以て其行軍の用に供しつゝありし軍隊は當初は彼得に依りて『娛樂團』(The party of Amusement)若しくは『遊獵軍』(The Troop of sports)と名けられしが其後幾多の刷新改良を見たる後ち此軍隊は露西亞皇帝の近衛兵中其第一隊を組織せる有名なる『ブレオブラズヘンスコイ隊』と爲されぬ。

斯くて彼得は露西亞帝國の爲めに破天荒の改造を斷行し從來の帝王中イヴァン第四世を除却すれば嘗て夢想したる者なかりし軌道を馳驅せんと欲しつゝありしかば此馳驅の第一着手たるアソフに對する遠征が拙々しき成功を觀るに至ら

ざりしは實に彼れの爲めに言ふべからざる痛心の事なりき。然れども當時此不結果ありし爲め彼得にして若し遽かに自ら抑損し其結果時に或は悒鬱に沈み去り遂に國務を視る能はざるが如き事あらん乎、彼れに對して物議の紛起すべき恐は更らに一層大なるものありしかば彼れは遂も失望落膽の風を示さず、モスコイに歸りたる後ちも準備一番東隅に失ひたるものは纏がて之を桑榆に回復し得べしとの意氣込にて、凡百の施設一に皆二三親近の者と商議せるのみにて其所存の勝は益々固まり愈々モスコイに歸りたる時の如きも嘗てガリツインが其遠征に失敗したるに管せず政界上尙ほ光輝ある戰捷を得たりしかの如く、裝ひ正々堂々名譽の打勝者としてモスコイの城門に入込みたる故智を襲ひ故らに第二の戰勝者として其最も勇ましき凱旋式を擧げたりき。而して此くの如くにして彼得は能く一時を糊塗したりしが、斯くては固より其中懐に於ける良心を慰むべくもあらざりしのみならず、其畢生の雄圖も亦た初めの一挫折に辟易して全く龍頭蛇尾に歸して止むべかりしを以て、彼れはモスコイに歸りたる後ちは從來の銳意熱心に倍蓰せる熱誠を以て益々有爲なる外國士官の招致に執掌し、殊に艦隊缺乏の一

事は其アソフに對する遠征の失敗したる重なる原因なりしを以て、軍艦建造の必要は倏忽として茲に承認せられゾオロネズ(Tonozu)と呼ばれたる地に夥しき深林の存するありて振古以來未だ曾て斧斤の入りざりしを幸ひ、其大木を容赦なく採伐して材料を供給する所以を計り夜を日に繼ぎて督促したる末、彼れは能く二十二艘の小艦と百艘の筏と百七十艘の短艇とを製造したり、而して此時に於けるドン河に沿へる各港の景況を敘述すれば宛かも繁華なる無数の造船場と化し去りたるが如く、二萬六千人の船大工等は汗の如き彼得の繪言に一刻も猶豫ならずして露西亞帝國の總べての方面より此地に來集したりしかば其盛況は譬ふるに物なく、此後紀元千八百四年に至り夫のナポレオン第一世が英國に侵入せんと欲し、ブーロン(Boulogne)に於て無数の運送船を作製しつゝありし時と稍々勇躍たりき。且つ又た此時に於ける彼得の銳意熱心は實に非常なるものにして工事の中途に於て幾回となく發生したる災厄は一も彼れが勇氣を挫折せしむるに足らず、即ち此災厄は或は激して船大工等の同盟罷工と爲り或は過て造船場の焼失と爲り或は發して彼得自身の病弱と爲りたりしも鹿を逐ひつゝある獵夫は山を觀

ざる影に漏れず、是等一切の出來事は毫も彼れが計劃を中止せしむるに値ひせざりしかば、遂に露西亞最初の艦隊は滞りなく其の落成を告げ、海の結隊行旅なる名を以てドン河の流を下るに至りぬ。否な獨り之れのみならず彼得は其艦隊を創設するに先だち既に無数の陸軍士官等をも亦た之を招徠し、普魯西、埃地利、和蘭、ヅエニース等より有爲の將校機關師等を得たるもの頗る多く、其中には水師提督たるべき恰當の人物さへありたりしかば、露西亞も今や全く曠昔の觀を一變し、戰鬪の一事に關しては左程歐洲西部の先進國に譲らざるに至れり。斯くて時機は漸く熟し、彼得は其一度失敗してモスコに歸りたる以來東の間も懐に忘るゝ能はざりしアソフに對する復讐を決行するを得たりき。さてアソフに對する第二の攻撃は其念々決行せらるゝに及んでは誠に無造作なるものなりき。初め露西亞の軍隊は海に面せる同市を封鎖せんと欲し、海岸より若干尺を隔りたる一帶の海面を埋立て、此處に高堤を築設せんと企て、一萬乃至一萬二千の工夫を嚴督し、晝夜とも曾て其業を休ましむることなく、全く五週日の間専心一意此に執掌せしめたりしかば、アソフ市の外壁を瞰下するに足る高堤は

一七四

繼がて其落成を告げ、同市に於ける交通遮断は大に其効果を觀たると同時に、アソフの形勢は次第に窘窮切迫に陥り、其企劃せる所は總べて皆な齟齬蹉躓に歸して終り、露西亞の軍隊が總攻撃を商議して將に其舉に着手せんと爲しつゝありし一刹那、全市を擧げて遂に陥落したり。而して此時に於ける彼得及び其の將校等の喜悅は言ふまでもなく、露西亞人一般の満足も亦た實に著大なりき。否な獨り露西亞人等の雀躍したるのみならず、此戰捷は歐羅巴の各方面に於ても鮮少なからざる反響を生じ、ソルソの民衆の如きは勝報を傳へて歡喜自ら禁ぜず回々教徒に對する耶蘇教徒の復讐なりとの意味を以て各處に「露西亞皇帝萬歲」を絶叫したり。而して彼得は紀元千六百七十六年今回こそは眞成の打勝者なりしかば、先年の儀式に比し更に數層盛大なる凱旋式を行ひ以てモスコに歸着しぬ。彼得は年來の志望茲に漸く酬ゆるを得て今や全くアソフを略取したり。然れども由來彼れが此地に垂涎するに至りたる起源を釋ぬれば彼れは決して此くの如くにして漫然漠乎只だ其領土擴大の野心のみを成就せんと欲したるにあらず。彼れは實に此地に於て露西亞の爲めに歐西の新元素を輸入する一門戸を創設し、

尙ほ其海軍養成の一事が、時世に喫緊急須にして毫も等閑に付すべからざりしを覺知するに及んでは所謂海軍根據地なるものも亦た能ふべくんば此地に經營せんと欲したりしかば、既に此地を略取したる後ちに於ても其之に對して施設すべきもの固より一にして足らざりき。されば彼れはモスコに歸りたる後ち直ちに其重なる臣僚を引て帷幄の謀議に參せしめ、先づ同地に向て露西亞の民衆を移殖することに決し、約五千を降らざる露西亞人等を驅て殆んど電光石火の勢を以て己れが爲めに最も貴重なる新領土に移住せしめ。而して是れより後ち彼れは更らに遍ねく國內の貴族僧侶等に課して無數の軍艦を築造せしめ。最後にドン河とヴォルガ河との間に一大運河を開鑿し、以て此兩者を聯絡せしめんとす。計畫を立て、技師の必要茲に再び生じたりしかば、彼れは前回に於て歐西より數多の人物を招致し、其力に依りて成功したるもの、極めて顯著なりしを思ひ、更らに復び技師の供給を以て歐羅巴の各方面に懇請したりしが、彼れは尙ほ之を以て満足せず、其近親の臣僚中より年少有爲の子弟五十人を簡拔してヴェニス、英蘭、ニールランド等に留學せしめ、其所要の技術を修得せしめたり。然れども當時に於

ける露西亞の民衆は概ね皆な頑冥不靈にして保守退嬰の氣風一般に俗を爲し、改善進取の精神は殆んど絶へてなくして稀れにある所なりしかば海外に留學して新智識を修得する一事の如きも必ず大に之が成功を觀んと欲せば、主唱者たる彼得其人が先づ自ら其身を以て彼等の爲めに一個良好の模範を示さざるべからず。蓋し當時に於ける彼得の境遇も之を忖度すれば亦た誠に困難なるものありしなり。而して既に此事情あり是を以て彼得は其九五の位に在る身なりしに管せず遂に一度身を棄つして歐西諸國を遍歴し、果ては和蘭なるサンダム(Sandam)に於て船大工とまで成り下がりたるなり。

然り彼得は此くの如くにして實に拮据經營して露西亞の改造を完成せんと努めつゝありしが、元來人の一身に關する毀譽褒貶は棺を覆ふて後ち始めて定まり如何なる偉人傑士も夙に一代の革命を轉旋し其輿衆を警醒鞭撻して與に共に彼岸の曙光に達せんと欲せば當時に於ける一種の非難は到底之を免る能はざるものなれば、熱誠國に盡すの外胸中復た他の物なかりし彼得も今は大に物議の燒點と爲るに至りぬ。而して其攻撃の重なるものを舉ぐれば凡そ三點ありて或る者

は彼得を以て露西亞人よりも寧ろ外國人を優遇歡待して一切の事總べて皆な外國崇拜に失する非愛國者なりと爲し、或る者は彼得を以て露西亞名門右族の子弟等を遠く天の一涯なる外國に派遣して船大工若しくは鐵砲鍛冶の如き極めて卑賤なる業務を傳習せしむる無禮漢なりと爲し、或る者は彼得を以て脚下より大鵬の逸するが如く最も急激に巨額の製艦費を醸出せしめ殆んど窮極する所なき不法者なりと爲し、一たび之を口に發して唱ふる者あれば附和雷同して沾々自ら喜ぶ者も亦た頗る多く、彼れが容ほ諸般の準備を整へて西遊の期將さに近きにあらんとする日に至りては、是れ等の怨聲は次第に其喧囂を極はめ直接間接に彼れに慊焉たらざる者露西亞帝國の裡到る處として其人を發見せざるはなき有様なりしかば、恐ろしき陰謀忽ちにして此間に企劃せられ、露西亞皇帝の廢立を計りて甘心せんと欲する一群は密かに相商議して彼得の一身上に關し最も寒心すべき計劃を企て、此陰謀の主腦者は一度モスコウの朝廷に坐して盛んに威福を行ひつゝ、ありしも不軌の野心は到底成功すべくもあらずして一蹟復た拾收し難く、今は處狭き某寺院に幽閉の身と爲りつゝありし、夫のソフィアにして彼女は此陰謀の企